

鷺巣—Washizu— 宿命
の闘牌

園咲

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アカギとの死闘のうえ敗れた鷺巣…しかし鷺巣は女子高生としてアカギとの再戦を目指す。

pixivの女鷺巣様を見てから創作意欲が湧きました。

原作はまだまだ続くでしょうが、南4局アカギがツモったとして話を進めます。

初投稿で牌画像変換ツールを使う暴挙…狂気の沙汰…コツコツ続けていきます。

駄文です。

追記・鷺巣麻雀が完結したので第一話を書きなおしたいと思います。ゆっくり書くのでしばらくお待ちください。

目次

成長	101
執念	83
決勝	65
出陣	51
県予選編	
入部	42
対局後半戦	24
対局前半戦	14
転機	9
失望	5
終焉	1

前哨	317
閑話	
熾烈	296
特訓	284
決着	263
猛追	240
本気	221
奇襲	207
策略	195
危惧	179
異端	161
激流	140
牽制	120

全
国
編

上
京

副
露

|

|

340 329

終焉

時は1965年…

東京武蔵野において狂気の宴が繰り広げられていた。

アカギ対鷲巢の半荘6回戦。

アカギは自らの血液を賭け、対する鷲巢は大金を賭けた戦い。

いつもどおり勝てるはずだった。目の前の男の亡骸を拝むはずだった。

しかし始まってみると予想外の苦戦を強いられる鷲巢。

隠し預金を含めた6億円（現在の価値では約60億円）を全て奪われアカギと同じ血を抜く状況に追い込まれてしまい満身創痍で迎えた6回戦オーラス：

「ツモ…清一色三槓子リンシャンツモドラ8…数え役満だ」

アカギ手牌 (2235 ツモ4 副露 ■11 ■ 888横8 666横6)

「ア…アカギイ……」後ろに控えていた仰木が涙をこらえ駆け寄る。

「やったな、アカギ。これで決着だ！」

長い長い死闘が終わり、アカギのサポートの安岡も仰木組の黒服たちも露骨に安堵の表情を浮かべる。

「負けた…鷲巣様が…」

「鷲巣様…」

一方鷲巣陣営は敗北という現実を受け入れるしかなかった。先ほど散々流した涙を三度流している者もいる。

(ツモられた…か…この流れで…)

鷲巣殿は敗北したというのに変に落ち着いていた。

「頼む！」

「ここでもここまで静粛を保っていた鈴木がアカギに対して頭を下げる。

「もちろん金は全て持っていったいい…まづこう事なきこちらの敗北だ。

だが鷲巣様の命だけは見逃してもらえな…」「よせ…」

しかし鷲巣が鈴木の頼みを一蹴した。

「何度も言わせるな。決まりを反故にしてなにが王か…

もし生きながらえたとしてもそれは死んだも同然…

ワシは生き恥を晒すつもりはない。」

「しかし…」

「アカギ！」

鷲巣がはつきりとしめない意識ながらもアカギに呼びかける。

「確かにワシは今日お前に負けた…それは認めてやる。

そのこの6億とワシの命…くれてやろう。

だが…いつの日か…必ず再戦だ…

次は完全に叩きのめす。それまで待つとれ…」

「な、なにをバカなことを「安岡さん」ア、アカギ…」

「なるほど、鷺巣…お前らしい。命乞いなど無様な真似をせず

再戦要求か…いいだろう。今後お前以上の強敵は現れないだろうからな…」

フツと鷺巣が鼻で笑う。その表情はどこか満足げでもあったという。

「岡本」

「ハ…ハッ！」

鷺巣の呼びかけに後ろで控えていた白服の1人、岡本が涙で歪んだ顔を上げる。

「抜け…」

「鷺巣様…：…ぐっ…分かりました…」

もう鷺巣はなにをいっても意思は変えないだろうと悟った岡本がゆっくりと血を抜き始める。

次第に薄れていく意識。近くに寄ってくる白服たち。

「わし…さま…」

「……ず……ま……」

(…意識が…遠のく…)

こうして…かつて昭和の怪物とまで呼ばれた鷺巢巖は1人の悪魔じみた青年によつて、75年の生涯に幕を閉じた…かに思えた。

(……………あつ……………)

鷺巢は疑問に思う……………どうして自我があるのかと…

自分はアカギとの死闘に敗北し、血を抜かれ死んだはずだと…

(見たところ地獄という訳でもないようじゃが…)

鷺巢はかつて昏睡状態に陥った際死者しか送られないはずの地獄を訪れている。

そこはまさに地獄としかいいようがない場所だった。

ここはそんな地獄とはかけ離れている。

とある屋敷のような部屋。そこで鷺巢は目覚めた。

何かがおかしい。視線も低いし、髪もやたら長い。

幸いあれだけ血を抜かれた後なのに体調がいいのであたりを探索してみる。

その部屋にあった鏡を覗いて言葉を失った。そこには白髪で長髪の美少女が映って

いた…

失望

とある長野県の雀荘にて：

「…ツモ、80000・160000」

鷺巢手牌 (二二78白白白発発発中中 ツモ6)

「うわっ大三元!」

「おいおい嬢ちゃんまだ四巡目だぜ?」

「ついてんな」

点棒を受け取りながら鷺巢はこうなつた要因を思い出す。

どうやら自分は死んだわけではないらしい。

そう結論を出したのは目を覚まして数日経つてからだった。

西暦は2014年：アカギとの死闘から40年近くが経っていることになる。

しかしどの文献を調べても「共生」という経営コンサルタント会社は見つからなかった。現在はなくなっているとしても日本を裏から牛耳る企業だったのだ。

かなり後ろめたいことはやっていたが歴史から抹消できる規模ではない。

この事実から鷺巢はここが自分のいた未来ではないことに気づいた。余りにも才

カルトチックだが若い頃超人類となった乳児と麻雀を打っていたりした鷺巢は案外あつさりこの現状を受け入れた。

次に戸籍等の問題だがこれもあつさり解決した。全て揃っていたからだ。

名前は鷺巢衣和緒^{いわお}、年齢は15歳、住所は長野県某所の（鷺巢が目を覚ました）屋敷だった。

両親は既に事故により他界しており、祖母（鷺巢にとつては面識もないが）が世話を焼いてくれる。

ある程度の遺産があり鷺巢が成人するまではもつだろう。

しかし15歳という事は義務教育がとうぜんあるわけで…大学まで卒業した鷺巢にとつてはストレスが溜まるだけの場所だった。

もつとも孤立していたのか滅多なこと以外では話しかけられることはなかったのが幸いか。

休日、憂さ晴らしに雀荘に入った鷺巢は大学生らしき3人組と打つことになって現在に至る。

役満を上がられたというのに目の前の3人組には動揺がない。

それどころか今の上がりを褒める。

それもその筈、この雀荘はノーレートで純粹に麻雀を楽しむ場所だからだ。

鷺巣は心の中のため息を吐く。目の前の3人は典型的な凡夫…

かつての鷺巣なら無能な若者に対していらだちが募っていただろう。

しかし今はただただ失望していた。

残りの半荘を適当に済まし場代を払い雀荘を引き払う鷺巣…

何も賭けず、緊張感など欠片もない面白くもなんともない麻雀…

その顔には現状に対する不満が明らかに見て取れた。

「つまらん…」

つい呟いてしまう。

現在麻雀は世界的なブームとなっており麻雀人口も爆発的に増加した。

これにより麻雀のイメージをよくしようとする違法な高レート雀荘はほぼ検挙されて

しまったのだ。

まだあることはあるのだが一見は入れない。未成年などもってのほかだ。

さらに野球中継の代わりに麻雀中継、囲碁教室の代わりに麻雀教室が放送されるよ

うになったのだ。

鷺巣も自宅のテレビで麻雀プロリーグの試合（薄型テレビをみて心底驚いた）を見

てみたのだが、自分やアカギクラスの間人はいなかった。

せいぜいアカギの前に戦った確か平山といったか…それくらいなのだ。

麻雀に見切りをつけるべきかもしれないと思い始めていた。

アカギとの打ち合いに未練はあるが、とにかく自分はここで再び「共生」を立て直す」と…

その為には当然学歴は高いほうがいいのだ。

もうすでに12月…そろそろ高校を選ばないといけない。

「ここらで一番上の（偏差値が高い）高校は…龍門渚高校…か…そこにするか」

こうして鷺巣は龍門渚高校を受験することにしたのだった。

ちなみに勉強は近代史を少し確認するだけですんだ。

受験は大きな問題も特に起きず無事龍門渚高校に入学することが決まったのだった。

転機

鷺巢は龍門渚高校の入学式に参加していた。

理事長らしき人物の長い長い話と共に入学式が終わり各々の教室に移動する。

その後教員の話もほどほどに今日は解散となった。

（ようやく終わったか……まさかこの歳でもう一度高校生活をする事になるうとはのお
……

甘いものでも食べに行くか……この体になってから甘味が欲しくてかなわん。）

結構うまく女子高生をやつていけそうな鷺巢であった。

カラオケだのなんだの誘いを全て断り帰ろうとする鷺巢……その時一人の少女とすれ違つた。

（うぬ～透華め！衣を置いて先に行くとは……）

（ケーキにするか。いや和菓子も捨てがたい……）

その瞬間二人の間に電流走る……それは強い者同士が惹かれあうような感覚……

（な、なんだこれは!?!この感覚は始めてではないが……ここまで強烈なのは一度たりとてなかつた……此奴は一体……?）

(ほう……こんな小娘がこれ程の力を……少なくともただの凡夫ではないな……)

一瞥し先を急ごうとする鷲巢。だが袖を引つ張られ振り返る。そこには先程の少女がいた。

「なんじゃ……小娘。」

「……こむす……衣は小娘ではない！立派なお姉さんだ！」

(とてもそうは見えんが……)

「と、こんなことを言っている場合じゃない。お主……麻雀は打てるか？」

「まあ……人並みにはの。」

一刻も早く甘味をむさぼりたい鷲巢は適当にあしらおうとするが……

(嘘だ……でなければさっきの説明がつかない……この者ならばなつてくれるかもしれない)

……衣の莫逆の友に……)

少女には通じなかった。

「……すまぬ。ちよつとこつちに来てくれ！」

「ぬ……」

少女に袖を引つ張られる鷲巢。振り払うこともできたが流石にはばかられた。

暫く歩き、着いたのはやたら裝飾めいた「麻雀部」と書かれた看板がぶら下がっている部屋。

「ここだ！」

そう言うなり少女はドアを開ける。

「衣！遅かったですわね…あらそちらの方は？」

「衣が連れてきた！」

「いやそれは見れば分かりますが…見たところ1年生のようですわね。お名前は？」

「名前は…名前は…聞いてない…」

「名前も聞かずに連れてきましたの!？」

暫くすると金髪の少女が鷺巢に話しかけてきた。

「すみませんわ…うちの衣が…」

「まあ…構わん。」

「それより衣があなたをここに連れてきたということに興味がありますわね…お名前は？」

「鷺巢…衣和緒…」

「衣和緒というのか！私は衣！天江衣だ！」

先程まで怒られていたのかしよげていた少女…もとい天江衣が会話に割り込んでくる。

「私わたくしは龍門渕透華ですわ。以後お見知りおきを。」

「はあ…」

「衣和緒！早速打とう！」

衣が衣和緒の腕を引っ張る。その先にはしつかりとした麻雀卓があった。

「ですが面子が1人足りませ「ういーす」…揃いましたわね。」

ドアが開き、やたら背の高い女？が入ってくる。会話から察するに彼女も麻雀部員のようだ。

「おう透華。衣。誰だそいつ？新入部員か？俺たちも先輩か…」

「純！打ちますわよ。早くいらつしやいな。」

「説明もなしかよ…まあいいや。よろしくな！名前は？」

「衣和緒…」

馴れ馴れしく話しかけてくるので少しイラつきながらも今日何度もした自己紹介（名前だけ）をする。

「そうか。衣和緒か！俺は井上純だ。まあ楽しもうぜ。」

しかし純はそんな鷲巢の様子に全く気づいてないようだ。

「ルールは半荘戦のアリアリ。赤4枚でいいですわね。」

鷲巢は雀荘で赤ドラありで打ったことがあるが面白いと思っていた。単純にドラが8枚となり高打点を作りやすい。

役牌のみでもドラ、赤ドラ次第でハネ満にも化ける。要するに場が荒れやすい。

つかみ取りの結果

東家 井上純

南家 天江衣

西家 龍門渕透華

北家 鷺巢衣和緒

……となった。

(なぜこうなったかは分からぬが……こんな小娘どもに負けてはいられん……そこそこやるようじゃがの……)

対局前半戦

東家	井上純	2	5	0	0	0
南家	天江衣	2	5	0	0	0
西家	龍門渕透華	2	5	0	0	0
北家	鷺巢衣和緒	2	5	0	0	0
東一局	親・純	ド	ラ	・	(3
純配牌						

(一二二六七八三三七④北白中中 ツモ 白 打 北)

純：速さと打点を見込める好配牌。

(ドラ対子に特急券二つ：…なかなかだ。鳴いて連荘といきたい。)

「…リーチ」

しかし三巡目そうそうに北家鷺巢からリーチがかかる。

鷺巢捨牌

(南南横8)

(ぐ…早い…こっちはまだろくに手も進んでねえのに…)

純はとりあえず今引いた西をツモ切りする。順目が早く、待ちもおおよその打点も読めない。

(く…)

(勝負できませんわ…)

衣も透華も比較的 안전한牌を切つて凌ぐ。

「一発…」

だがあつさり鷺巢がツモ上がった。

鷺巢手牌

(①①②②③③④⑤⑥⑥⑥⑦ ツモ ⑦)

(メンチン!?)

三巡目のリーチでメンチン五面待ち。常人なら偶然だが鷺巢だけは別。必然的に高打点の手を引き寄せて上がってくる。

(まずい…裏に5筒でも見えたら…)

この時点でリーチ一発ツモメンチンイーペーコーで倍満。裏が1枚でも乗れば三倍満に達し、5筒ならば裏4となり文句なく数え役満となる。

鷺巢の手が無造作に裏ドラに伸びる。

(乗るな！乗るんじゃない！)

そんな純の執念にも似た祈りが通じたのか裏ドラ表示牌は発…裏は乗らず倍満止まり。

「……40000・80000」

少し声のトーンを落とした鷺巣が点数申告を行う。

（ふう…助かつ…てねえな。いきなり倍満親つかぶりかよ。マズイな…今の上がりで流れがかなり傾いた…）

東家 井上純 17000（18000）

南家 天江衣 21000（14000）

西家 龍門瀏透華 21000（14000）

北家 鷺巣衣和緒 41000（+16000）

東二局 親・衣 ドラ・（六）

「わーい。衣の親番だ〜」

衣は親番がよほど好きなのかサイコロを回しつつはしゃいでいる。

配牌が配られ、鷺巣は理牌しつつ先程の局を振り返っていた。

（一発ツモとはいえ平和がつかぬ安め…更に裏も乗らなかつた。誰かが儂の豪運を僅かに歪ませている…猪口才…）

鷺巣配牌

〔一六六六七五667赤⑤⑥⑥北 ツモ ⑦〕

配牌からドラが暗刻…それに三色同順、三色同刻などいくらでも高くなりそうな好配牌と流石の豪運ぶりを見せる。鷺巣はまず一萬を切り出した。

六巡目

鷺巣手牌 〔六六六七五6677赤⑤⑥⑦北 ツモ 5〕

あつさり鷺巣テンパイ。高め三色の理想的な三面待ち。打点を考えればリーチをす
る必要はないのだが…

〔ダマで放出を待つなど…儂らしくないじゃろ。ここは当然〕

「リーチ！」

鷺巣北切りリーチ。これに反応したのは衣と純だ。

〔間違いない。さつきより強大な手…〕

〔流石に放つちやおけねえな…さつき上がられた以上かなりの手になっているはず…〕

純手牌

〔一五五八八446④④南北北〕

「…その北ポン」

純は北を鳴き打一萬とする。一発消しにはなるものの七対子イーシャンテンを崩す
一見不可解な鳴き。安牌が減り手牌も短くなる。

しかしこの不可解な鳴きこそが純のプレイスタイルである。

(ぬ…ずらされたか…)

鷺巣ツモれず。河に9が打たれた。そして鷺巣の本来のツモは純のもとへ。

純手牌

〔五五八八446④④南 ツモ 赤五 副露 横北北北〕 打 (6)

純はイーシャンテンに持ち直す。鳴きを入れなければ鷺巣が赤五萬をツモ上がっていた。

仮想鷺巣上がり形

〔六六六七556677赤⑤⑥⑦ ツモ 赤五〕

メンタンピン一発ツモイーペーコー三色ドラ5…裏なしでも数え役満。ほぼ勝負が決まっていた。結果的に鳴くのが正解だった。

そして次順4筒をツモリ、純は八萬、4索待ちでテンパイ。数巡後リーチしている鷺巣から4索がこぼれる。

「ロン！トイトイトイ北ドラで8000！」

純手牌

〔五五赤五八八44④④④④ ロン 4 副露 横北北北〕

(よし！この上がりは点数以上に大きい。これで流れが変わるはず。)

(儂の上がり牌を5枚使いか…ずらされた程度で上がれぬとは。我ながら情けない…)
 「衣の親番が終わってしまった…」

「半荘ですからもう1回親が来ますわよ…」

北家 井上純 26000 (+9000)

東家 天江衣 21000

南家 龍門渕透華 21000

西家 鷺巢衣和緒 32000 (19000)

東三局 親・透華 ドラ・(西)

鷺巢配牌

(一一三12578)②東北白中 ツモ 9 打 (北)

(配牌が悪い…)

鷺巢の配牌は先程の軽いタンピン系とは異なりチャンタ系。無駄な牌も多くテンパイまで時間がかかる…と思われた。

七巡目

鷺巢手牌

(一一三1235789)②⑨白 ツモ ⑨ 打 白

先程より順目がかかったが好形のイーシャンテンにこぎつけていた。

「ポンですわー！」

ここでもここまで上がっていない透華が鷺巢の打った白に飛びつく。

透華手牌

〔四四四45⑦⑦⑧西西西 副露 白白横白 打 ⑧〕

（さあこれが上がって連荘でしてよ！）

白ドラ3のテンパイ。3、6索の両面待ち。面前なら三暗刻か役満四暗刻も狙える牌勢だが、鳴いて親満でよしと考えた現実的なデジタルの打ち手なら当然の鳴き。

だがこの鳴きで鷺巢に余計なツモを送ってしまった。

鷺巢手牌

〔一一三一二35789②⑨⑨ ツモ 4 打②〕

鷺巢も4引きで高め一通のテンパイ。しかもなんの因果か透華とオナテンの3、6索の両面待ち。常人なら先程の上がりを見てひよってしまったダメにでもしてしまうが…

「リーチ！」

（儂がひよるわけなからう…それが狙いじやろうがの…）

（マジかよ！さつきより遅いとはいえ手が出来上るとは…しかも…）

鷺巢捨牌

〔北東東一中七〕

〔横②〕

〔捨牌はほぼ手出し。つまり無駄ツモが少ないということだ。さつきのメンチンといいこいつなんてツキしてやがるこいつ。〕

純は鷺巢の強さの真髓に気づきつつあった。

〔鳴くしかないか。このままだと間違いなく一発ツモだ…〕「…チー」

純手牌

〔四五五23889②白南 副露 横②③④ 打 南〕

〔相変わらず妙な鳴きをしてきますわね…〕

〔上がるためではなくツモをずらすための鳴きとは…面白い…〕

純、リーチに対してやはり不可解な出来面子鳴き。透華は変わらない純のスタイルに多少呆れ気味だが、鷺巢はツモずらしを散々使った鷺巢麻雀を思い出していた。

「ツモ」

鷺巢手牌

〔一二三12345789⑨⑨ ツモ 6〕

上がったのは鷺巢。高めのメンピンツモ一通…裏が九萬でハネ満。この上がりに苛立ちを隠さないのは透華である。

〔ずらしてもあがられるか…〕

(オナテン…という事は純が鳴かなければ私がツモっていた6索！純！)
 (やべえ…なにかしたか…めちやくちや睨まれてるな…)

西家 井上純 23000 (13000)

北家 天江衣 18000 (13000)

東家 龍門洩透華 15000 (16000)

南家 鷺巢衣和緒 44000 (+12000)

東四局はこの上がりを逃してペースを崩した透華が純にタンヤオドラ2を振り込んだ。これによりますます透華が不機嫌になったことは言うまでもない。

東場終了時

南家 井上純 26900 (+3900)

西家 天江衣 18000

北家 龍門洩透華 11100 (13900)

東家 鷺巢衣和緒 44000

(うっ…)

(…来たか…)

(ほう…ここまで大人しかったが…)

瞬間卓上の3人を謎の圧迫感が襲った。寒くもないのに身震いが止まらない。それ

は1人の少女から発せられていた。

「待たせて悪かったな衣和緒…そろそろ御戸開きといこうか…」
間違いなく荒れる南場が始まる。

対局後半戦

南一局 親・純 ドラ・(1)

東家 井上純 26900

南家 天江衣 18000

西家 龍門洩透華 11100

北家 鷺巣衣和緒 44000

(まだ昼過ぎとはいえ確か今日は満月：9割といったところでしょうか)

この天江衣という雀士は少々特殊な打ち手であり月の満ち欠けにより強さが上下する。今は最大限に近い強さのようだ。

鷺巣配牌

(一二三四五五六七八七②⑨)白発 ツモ 白 打 ⑨)

鷺巣の手牌は変わらず好調を維持。打発とせず9筒とした混一色狙い。三萬の二度受けがネックだが鳴きを入れれば難なく手を進めることができるだろう。

二巡目 (一二三四五五六七八七②)白白発 ツモ 七 打 ②)

三巡目 (一二三四五五六七八七白白発 ツモ 北 打 7)

四巡目 (一二四四五五六七八北白白発 ツモ 9 打 9)

五巡目 (一二四四五五六七八北白白発 ツモ 南 打 南)

六巡目 (一二四四五五六七八北白白発 ツモ 六 打 北)

七巡目にて鷺巢あつさりイーシャンテンに持つてくる。

鷺巢手牌

(一二四四五五六七八白白発)

三、六、九萬と三面待ちのイーシャンテン。鳴いてもテンパイにとれ、三萬か九萬なら一通も見える。張るのも時間の問題…と思われた。しかし途端に鷺巢の手が止まる。

十三巡目

鷺巢捨牌

(9②79南北)

(北98③⑥⑨)

(9)

七巡目以降は全てツモ切りである。つまり鷺巢の手はイーシャンテンで凍りついていた。

(ありえん…儂に限ってこんな事が…)

鷺巢は改めて場を見るとある違和感に気づく。誰一人として鳴いていない。全員面

前である。順目も深くなり1人ぐらい鳴いて手を進めていてもいいものだが：

そんなことを考えていると下家の純から三枚目の三萬が切られた。当然鳴けない。

(ぐ…)

十四巡目

鷺巣手牌

(一一四四五五六七八白白発 ツモ 1)

鷺巣ここでドラを引いてくる。場にはソーズが高くそれおいと切れる牌ではない。

かといって発はまだ1枚切れ。これも切りにくい。鷺巣は仕方なく二萬を切った。

しかし次順：

(なに…馬鹿な)

十五巡目

鷺巣手牌

(一四四五五六七八1白白発 ツモ 三)

裏目になるラス三萬引き。1索さえ通していれば張っていた。ここから鷺巣は一萬を切る。

十六巡目

鷺巣手牌

〔三四四五五六七八一白白発 ツモ 一〕

だがまたもや裏目。やはり一索を切つていれば発切りでテンパイに取れていた。

流石にここまで手が進まず裏目になったことはない。流局も近くなりテンパイを諦め一萬をツモ切る。

〔流石におかしい…やはりこの小娘か？〕

鷲巢は衣に疑いをかけるもまだ確信には至らない。

〔リーチ！〕 打 〔②〕

衣が十七順目でツモ切りリーチをかけた。ツモは親の第一ツモを合わせて70枚。

つまり鳴きが入らない限り南家の衣がハイテイ牌を引く事になる。

〔ここはどうですか？〕 打 〔8〕

〔ダメだ。鳴けねえ…〕

実は純と透華、数巡前から互いに鳴かせ合おうとしていたがうまくいっていなかった。対面同士でチーが出来ないのが痛い。

そして鳴けない以上この状況を打破出来ない。結局衣にハイテイツモを許すことになってしまう。衣はハイテイ牌を掴むと口端を吊り上げ盲牌すらせずに宣言した。

〔海底撈月〕
ハイテイヲオユエ

衣手配

〔11456678④⑤⑥九九 ツモ 九〕

裏ドラは白で乗らなかつたがリーチ一発ツモハイテイドラ2で跳満。

しかし余りにも不自然な上がりである。

（ラスト一順でのツモ切りリーチか。まるでハイテイ牌でツモる確信があるように見えるが…）

東家 井上純 20900 (16000)

南家 天江衣 30000 (+12000)

西家 龍門渕透華 9100 (13000)

北家 鷺巣衣和緒 41000 (13000)

南二局 親・衣 ドラ・〔中〕

「わーい。衣の親番だ〜サイコロ回れ〜」

先程と同じことを言う衣だが2人は内心冷や汗が止まらなかつた。

麻雀は親が上がると続けて親ができる。つまり衣が上がり続ける限り局が進まないのだ。

十五巡目

鷺巣手牌

〔七八555678②③④⑤⑥ ツモ 一 打 一〕

先程とは違い、受けが広いイーシャンテンであるにも関わらず有効牌が入ってこない。事ここに至り鷺巢は確信を持った。天江衣という少女が何らかの力でこちらのツモを妨害している…

「ポン」

衣が下家である透華の切った三萬を鳴く。これでハイテイがずれ透華から衣になる。

そして誰も鳴けず上がれずハイテイツモを衣が引く。

「ツモ！海底撈月」
ハイテイラオユエ

衣手配

〔四赤五六④⑤45699 ツモ ⑥ 副露 三三横三〕

三色ハイテイドラ1で20000オール。この上がりで僅かではあるが衣が鷺巢を抜きトツプに立った。

北家 井上純 18900 (12000)

東家 天江衣 36000 (+6000)

南家 龍門洩透華 7100 (12000)

西家 鷺巢衣和緒 35000 (12000)

南二局一本場 親・衣 ドラ・〔3〕

(やはり衣和緒でも無理なのか…)

今まで自分と対峙してきた打ち手たちはことごとく敗れ去りこちらを化物でも見るかのような視線を送ってきた。

例外はこの龍門渚高校の皆だが心底では自分を恐れているのは隠そうとはしているようだが分かっている。同等以上に打てるかもしれないと思っていただけに残念だった。

八巡目

鷲巣手牌

{三四七七七九33456④⑤}

(小娘…面白い力を使うが…こちらに侮蔑の視線を送っておる。気に食わん…気に食わんな。)

この鷲巣という男(今は女だが)見下されることが大の嫌いであり、例え神でも仏でも従えさせるような人間である。更にそれが年端もいかぬ少女ならば尚更であり耐えられるはずがない。

「…凶に乗るなよ……小娘………」

それは余りにも小さい声だったので誰にも聞かれることはなかったが地の底から響いてくるような声色だった。

(見ておれ。こゝで…ツモる…)

その瞬間鷲巢の全身から白く眩い光が漏れ出す。それは奇跡をおこすような光。
 (なんだ!?) (なんですの?)

(す…凄まじい力を感じる…)

アカギとの対戦で見せたホワイトホール。鷲巢が時折見せる超豪運状態。

八巡目

鷲巢手牌

{三四七七七九33456④⑤ ツモ ⑥ }

そして必然的に持ってくる。テンパイに至る6筒をツモ。

鷲巢ついに衣の支配を真正面から抜けテンパイ。リーチで満貫確定の二、五萬待ち。

(隠す必要もなからう…)

「リーチ！」 打 (九)

(な…! 張ったのか!?)

一方驚愕したのは衣。複数人で協力されて支配を抜けられたことはあれど単独では
 経験がない。

やはり先ほどの光による力と考えるのが妥当か。数巡後純から当たり牌の二萬が切
 られた。

「…ロン。裏1で8000は8300」

鷺巣手牌

（三四七七七七33456④⑤⑥） ロン 二

裏ドラは6でリーチタンヤオドラ3の満貫。

（衣の支配下で…見たことがありませんわ…）

この上がりで鷺巣、衣をまくり再びトップに立つ。

北家 井上純 10600（18300）

東家 天江衣 36000

南家 龍門渕透華 7100

西家 鷺巣衣和緒 43300（+8300）

南三局 親・透華 ドラ・（七）

（衣和緒…衣の支配を破つてくるとは…こんなこと始めてだ）

衣は興奮していた。これからもずっと一人ぼっちだと思っていた。

思えば透華に誘われて昨年麻雀部を革新し大会に出たが、地区大会、インターハイを

通して少なくとも衣が戦った相手の中に衣和緒のような存在はいなかった。

（勝ちたい…衣和緒に勝ちたい！）

六巡目

鷺巣 打（八）

(ぐ…張ったな。しかもとてつもない手…)

鷲巢捨牌

(北南南9②八)

鷲巢の手から強烈なオーラを感じ取って衣は身震いする。

普通この時点で手の高さどころかテンパイを察することすら不可能に近い。

だが衣はある程度相手の手を読み取ることが出来る。これも衣が「牌に愛されし子」と呼ばれている一つの所以である。

同順

純手牌

(二三四五六七③④⑤226 ツモ 8)

(テンパイ…衣の支配が緩んだのか…?カンチャンがネツクだがここは…)

「リーチ」打 (③)

純の先制リーチが入る。ここで衣取るべき行動を決める。

衣手牌

(三四七九5678⑤⑥⑦東東 ツモ 五)

(衣和緒に上がられると勝負そのものが終わる。衣の手は一手遅れ。上がらぬと決め付けるのは余りに甘い…)

打 (7)

「ロ…ロン！リーチ一発タンヤオドラ1…裏はなしで8000!」

衣の差し込み。裏ドラは北。乗らなかつたが痛い満貫放銃。

(衣が一発放銃!?)

(どういうことですか?)

(差し込みか)

鷺巣手牌

(一一二二三三四赤五六七八九九九)

衣の判断は正しなかった。鷺巣は一、二、四萬待ちのメンチンをテンパイしていた。

一萬なら九蓮宝燈。衣が差し込まず順当に手を進めていたら近いうちにツモつていただろう。

上がりを逃したというのに鷺巣は惜しむことなく自動車に牌をかき入れた。図らずもこれが衣がした始めての差し込みだった。

西家 井上純 18600 (+8000)

北家 天江衣 28000 (-8000)

東家 龍門瀏透華 7100

南家 鷺巣衣和緒 43300

南四局 親・鷲巢 ドラ・〔8〕

衣配牌

〔三四八3①③④⑥⑧〕西北北 ツモ 八 打 北

差し込みで点差が離れたとはいえまだ許容範囲。衣は満貫直撃か跳ね満ツモで鷲巢をまくる事ができる。配牌はなかなかいい。ドラ対子もある。ここから跳ね満を狙うならメンピン系が良さそうだ。

八巡目

衣手牌 〔三四八八23③④⑥⑦⑧⑧〕西

衣、メンタンピン系のこの形から純の切った八萬を鳴いて西を切る。

(これでハイテイツモは衣。最後まで衣らしく打つ…)

(自分を曲げぬ…か。)

十三巡目

衣手牌

〔三四五23③④⑥⑧⑧〕副露 横八八八

衣の手はイーシャンテンまで進む。幸いまだ誰も張っている気配がない。

しかしここで衣にとって想定外の事態が起きる。

「カン」

鷲巢は8索を暗カン。ドラが増えるのはリスクイだが、恐らくハイテイをずらすためのカンだろう。

新ドラは三萬となり、衣の手に1枚乗る。しかしその瞬間衣は鷲巢の手からテンパイ気配を感じ取る。

「……今のカンで張ったか」

どこにもスキがないように感じる衣の能力だがただ1つ、王牌には及ばない。つまり嶺上ツモからのテンパイは防げないのだ。

手は満貫以下だが上がられると勝負が決する。ツモられないよう祈るしかない。同順鷲巢の捨牌を警戒したのか、純が鷲巢の現物である5筒を切る。

（しめた！）

「チー」

衣は当然鳴く。手を進め、ハイテイを戻す一挙両得の鳴き。衣は6筒を切りテンパイにとった。

衣手牌

〔三四五23⑧⑧ 副露 横⑤③④ 横八八八〕

（新たなハイテイ牌は4索か…手替わりを待つしかないな。）

1、4索の両面待ちだが片上がり。このままハイテイでツモっても跳ね満まで1翻足

りない。

勿論鷺巢が4索で振り込んでも逆転にはなるが期待値は薄い。

十七巡目

衣手牌

〔三四五23⑧⑧ ツモ 5 副露 横⑤③④ 横八八八〕

〔来た！〕

なかなか手が進まなかったがここに来て5索ツモ。

これで2を切れば三色がついてタンヤオ三色ハイテイドラ3。跳ね満に届く。

〔ただ問題は衣和緒の手…〕

鷺巢捨牌

〔②九②赤⑤①中〕

〔東東⑧一二四〕

〔96南九〕

〔捨牌は明らかにソーズ染め。でも衣の直感では2索は通るはず…〕

衣の直感は麻雀において外れたことがない。その直感に則^{のっと}って今まで打ってきた。

〔これさえ通せば衣の勝ちだ！〕 打 〔2〕

衣の打った2索。直感通り鷺巢の当たり牌ではない。なかったが…鷺巢動く。

「…ポン」

(!?)

鷲巢は2索を鳴く。そして手牌の中から9筒を切った。

(その捨牌で今更9筒切りですか?)

(どういうことだ?)

2人には鷲巢の迷惑が分からない。しかし衣は鷲巢の手の気配が急激に強くなったのを感じた。先程と同じような役満を匂わせる強さ。

(ハイテイを奪われた…更に満貫以下の手がたった一鳴きで役満に?)

この鳴きでハイテイツモが鷲巢となる。そして…

「…ツモ…16000オール」

鷲巢手牌 (3344発発発 ツモ 4 副露 2横22 ■88■)

「おいおい…」

「な…緑一色!?!」

(衣和緒…鳴く前の手格好がこうだ)

(223344⑨発発発 副露 ■88■)

(これだと9筒単騎の発イーペーコー…満貫以下。手の大きさを隠していたというのか…緑一色テンパイにとれる6をツモ切りしてまで。そして衣の2索を鳴き緑一色3、4

索のシャボ待ちとなった…か…完敗だ)

終局

南家	井上純	2600	(116000)
西家	天江衣	14000	(116000)
北家	龍門洩透華	18900	(116000)
東家	鷺巢衣和緒	91300	(+48000)

「衣和緒…ありがとう」

「ぬ…」

対局終了後衣が鷺巢に礼を言った。鷺巢には心当たりがなかったのだが。

「ここまで勝ちたいと思わせてくれたのは衣和緒が始めてだ。とても楽しかった。また

…打つてくれるか？」

「…うぬ…また打とう。」

「！…うん！」

「衣…よかったですわね…」

衣は笑った。それは対局中に見せたサデイスティックな笑いではなく、年齢相応のとても可愛らしい笑みだった。

鷺巢自身も久々に楽しめた対局だった。後ろで透華がハンカチ片手に泣いているの

がとても気になるが。

「いやーごめんね遅れちゃって…ってなにこれ？」

「遅れた…」

その時部室のドアが開き少女が2人入ってきた。

彼女たちも麻雀部員なのだろう。そんな彼女たちは目の前の光景がよく分からず困惑しており、純に事の顛末でんまつについて聞いて聞いていた。

「へえ〜これがその対局かあ…ってあれ？透華飛んだの？」

「うっ！」

「っていうか焼き鳥…」

「ぐっ!!」

対局の簡単な牌譜を見て少女たちは気づいてしまった。

透華にとって触れられたくなかった事実を。実は透華この半荘で飛んだばかりではなく見事に焼き鳥になったのであった。

「ふふ。今日の夕食は焼き鳥にでもしますか」

「な…ハギヨシ！」

「焼き鳥か…たまにはいいな」

「最近食べてなかったしね」

「悪くない……」

いつの間に現れたのか燕尾服を着た男性が夕食に焼き鳥を提案する。

透華は反対のようだが皆はまんざらでもなさそうだ。

「そうだ！是非衣和緒も来てくれ！」

「それはいいですわね。あなたなら歓迎しますわ！」

「いや儂は……」

鷺巢もこのあと家に来ないかと誘われる。特に用事はないがだるい。

「……は無難に断ろうとしたが……」

「来てくれないのか……」

（うっ……）「ま、まあどうしてもというなら行ってやらんでもないが……」

「わーいー！」

鷺巢城、衣の涙の前にあっさり陥落。

こうして鷺巢は夕食を龍門渕家にてご馳走になると同時に麻雀部の面々と知り合うことになるのであった。

入部

「ふあゝ…眠い…」

鷺巢は眠かった。猛烈に眠かった。理由は昨晚にある。

あの対局のあと龍門淵家に招待された鷺巢は夕食を ご馳走になった。

(本当に焼き鳥だった。透華がやけ食いしていた。)

そこまではよかった。だがそのあと衣の提案で麻雀を打つこととなった。

寝る前に軽くと思っていた鷺巢だったがしばらくして鷺巢と衣にあてられたのか透華が豹変し、打ち筋が昼の時と全く変わった。

鷺巢も流石に手を焼いたが結局透華がなぜか気を失い強制終了した。

ほぼ夜通しとなったためほとんど寝ていない。朝そのまま高校まで送迎してもらったのは正直助かった。

授業が終わり今日は早く帰ってさっさと寝てしまおう。そう考えていた鷺巢だったが…

「衣和緒——！」

「ぐふっ」

授業後すぐに教室を飛び出したのかやってきました衣が腰あたりに抱きついてきた。

衣は驚巢と同様昨日はほとんど寝ていないはずなのになぜか昨日より活気に満ちていた。

やはり自分と同等以上に打てる驚巢との戦いが彼女を変えたのだろう。

「昨日は楽しかったな！ さあ早く行くこう！」

「いきなり何を…行く？ どこへ？」

「それはもちろん…」

「来ましたわね！ 衣！ 衣和緒！」

「これで全員だな」

衣に連れてこられたのは昨日同様麻雀部室。そこにはあらかた顔を合わせた面子が揃っていた。

「さて！ 新入部員も迎えたところで我が龍門渕高校麻雀部今年度も始動ですわ！」

「すまん…」

「なんですの衣和緒」

驚巢は違和感を覚えた。おかしい。いつの間にか新入部員になっている。

「儂は入部した覚えはないが…」

「「「「えっ」」」」

鷺巢の当然の主張に5人が驚きの声を上げる。

「入部してくれないのか…」

「新入部員じゃなかったの…あんなに強かったのに」

「オレも透華が説明したもんだと思ってたよ。なし崩しに入部させちまおうとも思ってたんじゃないの」

「大体透華はいつつも強引に物事を押し進めるんだよね。ボクのとときだって…」

「うるさいですわ！そこ！」

順に衣、智紀、純、一、透華である。かなりの小声で喋っていたが透華には聞こえていたらしい。

遠い岩手の地で謎のシンパシーを感じた少女がいたようだが今はどうでもいい。

透華にとっては鷺巢衣和緒は是が非でも入部してほしかった。

衣相手に勝った打ち手は今までいなかったし、衣も鷺巢に相当懐いている。

あとなぜか昨日の夜に打った記憶がないが後で牌譜を見せてもらおうと鷺巢はきつちり2人に勝ち越していた。

「是非入部してくれませんか。あなたがいればあの白糸台を破って優勝できるかもしれません」

「白糸台？」

「知らないの？えーと…はいこれ」

透華の口から出たのは白糸台という知らない単語。会話の流れから言って高校名だろう。

その言葉に疑問符を浮かべると、一が本棚を漁って一冊の雑誌を手渡してきた。

「ウィークリー麻雀TODAY」

麻雀愛好家御用達の週刊雑誌であり、勿論この龍門渕高校でも定期購読している。

渡された週では高校生大会の特集をしており、有力校の紹介やインタビューなどが載っていた。

（龍門渕グループは日本有数の大企業…付き合っておいて損はないが…ん？）

「あーそれな。白糸台や千里山に比べてうちの紹介が少なくて透華が不機嫌になったよな」

「だっておかしいですわ！」

「おかしくないよ…向こうは全国常連でこっちは新鋭だよ？長野はしばらく風越だったし」

「だからこそ！注目されるべきでしょう！」

「そんなこといっても…」

透華たちが何やら言い合っているが鷲巢の耳には入っていないかった。鷲巢の目には去年優勝したらしい白糸台の大將が映っていた。あまりの衝撃に眠気が吹き飛んだ。

宮永という先鋒と共にダブルエースとして紹介されている。

(赤木しげみ)

流石に偶然にしてはできすぎだった。牌譜が載っていたが常識に囚われない異常な打ち筋である。

もはや間違いない。赤木しげるだろう。

(そうかそうか…そういうことか…お前とは再戦せねばならんとは思ったが…よもやこんな形とはな…)

「クツクツクツクツ…」

「衣和緒…?」

思わず上機嫌で笑う鷲巢に対し訝しげにこちらを見る龍門瀧麻雀部一同。

透華たちも言い合いをやめこちらを見ている。

「…入部しよう」

「ほ…ほんとに!」

「うぬ…ちよつと戦いたい奴がいての…」

鷺巢のその言葉に一番喜んだのは衣。また抱きついてきた。

鷺巢はうつとうしそうにしながらも満更でもない様子。

その光景を微笑ましく見る一同。

しばらくし、透華がわざとらしく咳払いして言い直す。

「では改めて…：我が龍門瀧高校麻雀部今年度も始動ですわ！」

「衣和緒！また打とう！」

「勘弁してくれよ…」

そう悪態をつくのは純…：実は昨晚一番割を食ったのが純である。

満月の夜の衣、豹変した透華、鷺巢となると卓を囲むにはあと一人必要なわけで。

まず智紀が逃げた。そして一が打つのを拒否。足早に自室に戻っていった。

よって残された純は仕方なく最後まで打っていた。

そんな純も苦笑いしながら卓に座る。リベンジといきたいのだろう。対局が始まった。

日にちが過ぎる。5月の連休では合宿替わりに龍門瀧家にて泊りがけで麻雀を打った。

女子の麻雀を見てみたりもした。そこで気づいたのが衣以外にも明らかにおかしい打ち方をしている者が僅かながらいることだ。

ツモ切りリーチをすれば必ず一発ツモしたり、突然打牌が変貌したりしている。曰く能力だつたりオカルトだつたりいうらしい。つくづく面白いと感じた驚巢であつた。

そして長野県予選を間近に控えることとなつた。

「それでは！県予選オーダーを発表します！」

龍門渕高校麻雀部室。そこで県予選のオーダーが透華から発表される。

「先鋒は純。鳴いて場を荒らしてきなさい」

「よーし」

「次鋒、一。期待していますわ」

「次鋒…か」

「中堅は私。大船に乗つたつもりでいるといいですわ！」

「はいはい…」

透華の余りの自信に呆れ気味の一。いつもの事なので慣れたように軽く流す。

「副将は衣。出番が遅い方が都合がいいでしょう」

「うん！衣はどこでだつて全力で打つぞ！」

「大将は衣和緒。…任せましたわ」

「…うむ」

鷲巢は大将以外には興味がなかった。見たところ赤木は個人戦には出場していないらしい。

よって大将でないと再戦が叶わないためである。

「……智紀は補欠です。あとデータ収集などをおねがいますわ」

「うん」

(ともぎー……)

「あと昨年と大きくルールが変わっています。大まかに言うと平凡な競技麻雀から運要素の強い赤ドラ新ドラ裏ドラ一発あり……ですわね。

細かいルールは……」

透華が言いにくそうに述べる。これまではちょうど5人だったため補欠選手はでなかったが今年はそうはいかない。

自分が連れてきたのでやはり申し訳ないと思っっているようだ。

その後透華はルールの変更点の説明に移ってしまった、オーダー発表は終わる。

智紀自身覚悟はしていた。これといった強みもなく打ち筋は至って普通のデジタル麻雀。

龍門測の皆の中で一番下は間違いなく自分だろう。

一はそんな智紀の様子を心配そうに見つめていた。

その日の晩、夕食の片付けをしていた智紀のところは一がやってきた。

「ともぎー…ホントに大丈夫？」

「…気にしないで。私は私の出来ることをするから…」

「で、でも…」

「衣和緒が来てからあの子は…衣は本当に笑うことが多くなった。私たちではできなかった事。」

衣和緒のためなら私は粹を譲る。一…頑張つて」

「ともぎー…う、うん！」

珍しく饒舌に話した智紀。その口から語られたのは鷺巣への感謝だった。

衣があそこまで明るくなったのは間違いなく衣と真つ向に打てる衣和緒がいてのとだと智紀は思っていた。

それを聞いた一は必ず全国に行くことに心に誓ったのであった。

そして後に語り継がれることとなる長野県予選を迎えることとなる。

県予選編

出陣

いよいよ明日に控えた県予選のため鷺巢は龍門淵家に宿泊することになった。

衣は鷺巢が泊まることを心から喜び、当然のように麻雀を打つ流れとなつたが流石に透華に止められ早めに就寝した。

翌日朝早く起き、衣たちと朝食を取つたあとハギヨシの運転で会場に向かった。

(余りの手際の良さに部下に欲しいと少し思った)

「おつ緊張でもしてんのか？」

会場へ向かう車内、目をつむり腕を組んでいる衣和緒に純が話しかけた。

「馬鹿を言うな。退屈さえしなければいいと思つていた」

「お前らしいな…しかしお前を満足となると…」

「まああまり期待はしていない。県予選など通過点だ」

「その通りですわ！」

「しー！衣が寝てるから…」

純と話していると透華が大声で会話を割り込んできた。

しかし余りの声に一が制止の声を掛ける。

衣はいつもより朝早く起きたので車の中でぐっすり寝ていた。

「す、すいません…しかし通過点というのは同意ですわ。私たちの目標はあくまで全国優勝。こんなところで負けてはいられません。」

「そうだね…慢心は良くないけど…」

「慢心ではありません。余裕ですわ」

「はいはい…そろそろ着くみたいだね。衣、起こすよ」

「いや…寝かせておきましょう。私たちはシートで午前中の試合はありませんし、何よりここまで気持ちよさそうに眠っているのですから」

そうこうしているうちに会場に着く。ちなみに衣はまだ夢の中で、ハギヨシが会場にある仮眠室まで連れて行った。

鷺巢は面倒くさく感じ姿を消そうとしたが透華に見つかってしまった。

不貞腐れながら持つてきていた饅頭を歩きながら食べていた。

「衣和緒！はしたないですわよ。早く食べてしまいなさい。私たちは注目を浴びるのですから」

「む…」

透華の叱責に眉にしわを寄せる鷺巢だったが言っていることは間違っていないので

さっさと飲み込む。

透華を先頭に龍門洩高校一同は会場入りした。

「龍門洩が来たぞ……！」

「前年度県予選優勝校——！」

「昨年の四天王は2年生になっても健在だ……」

（ふっふっふっ……目立っています……目立っていますわ！）

（相変わらずだな透華の奴）

（目立つの苦手なんだけどな……ボク）

（恥ずかしい……）

（うっとうしい）

瞬間一同を覆い尽くしたのは人混みとマスコミのカメラ。

鷲巢は思わず顔をしかめる。衣がマスコミを嫌う理由がよくわかるといふものだ。目立ちたがり屋は透華だけであり他4人はマスコミを無視していた。

「天江がないな」

「天江衣ですか？素人のような打ち筋だったじゃないですか」

さてそんなマスコミと話しているのは藤田靖子である。地元長野のチームに所属しているれっきとしたプロ雀士。今日は解説と呼ばれていた。

最もプロ麻雀煎餅カードでは外れ扱いされている駆け出しではあるが…

「素人…ね。いや…麻雀は時折常識では計り知れない打ち手が出てくる。」

一昨年は西東京の宮永…去年は鹿児島島の神代と天江衣…あと赤木がいたな。あいつだけは別格か」

「藤田プロは確か赤木と対局経験がありましたよね？」

藤田はそれを聞き渋い顔をする。あれほど追い詰められた対局もなかった。

雑誌の企画で対局する機会があった。通ると思つた牌が当てられ、こちらがリーチしても危険牌を涼しい顔をして切ってくるが決して放銃せず大物手を張れば差し込みで潰された。職業柄数多くの雀士を見てきたが藤田はあれほど完璧な打ち回しは見たことがなかった。

そのまま独走を許しまともに麻雀を打たせてもらえなかった。

「そんな打ち手が今年も出てくるかも…」

そこで藤田が気づいた。いや気づかざるを得なかった。龍門渕の中にとつともない奴がいる。

見覚えのない白髪の少女だ。去年姿を見なかったので恐らく1年生だろう。

「これは…荒れるな」

「どういふことですか？」

「…直に分かる」

マスコミからようやく開放された龍門渚一同は通路を歩きつつ会話していた。

「衣いつ起きてくるかな」

「まあ起きたところで今日の出番はありませんわね。私が飛ばしますから」

「あはは…」

正面から1人の女子高生がやって来た。恐らく何処かの選手だろう。なぜか涙目になっていたが…

すれ違った瞬間重い空気を感じる。鷺巣や衣が纏っているような強者の気配。

鷺巣を除いた4人に戦慄が走る。

「なんだ…あいつ」

「衣や衣和緒に似た空気を感じたよ…独特な」

「清澄の制服…」

「それじゃああいつが原村和か？全中王者の」

原村とは全中大会で優勝した今最も期待されている1年生だ。

そして透華が執着している選手でもある。

そんな透華なら原村の姿は知っているだろうと問いかける。しかしある一点が決定的に違っていた。

「いや…原村和はこう…胸のあたりに無駄な脂肪がある感じですね…」

本人が聞いたら激昂するだろう判断理由である。

「ところで衣和緒は…うわ！」

「おまえ…女がしちやいけない顔してるぞ…」

「猛獣みたい…」

さつきからだんまりの鷲巢を訝しんだのか一が鷲巢の方へ振り返り思わず小さい悲鳴をあげる。

鷲巢は元々つり目だが今は更に目をつりあげ口を三日月のように歪ませ、齒を覗かせていた。

その姿はまるで獲物を見つけた時のライオンのようである。

他校にもなかなかの打ち手がいるようだ。自分と当たるかは分からないが退屈はしなさそうだと思つた鷲巢であつた。

「まあそれはともかく先程言つたとおり私たちはシードですから午前中の試合はありません。一旦ここで解散としましょう。正午に集合ということですね。」

「それはいいが…何するつもりだ透華」

「勿論！清澄の試合を見に行くのですわ！原村和が本当に（のどっち）なのか確かめなければなりません」

「へいへい…俺らは適当にぶらつくか」

「そうだね」

「ちよつと！着いてこないのですか!？」

「そりやそうだろ。興味もねえし何より目立つだろ」

「ぐっ…」

透華は当然皆で行くつもりだったので着いてくる気配がない純たちに叱責するが最もな理由を返され二の句が出ない。

「な…なら衣和緒！あなただけでも」

「なんで儂が…」

と言いかけたところでふと気が付く。先程の強者特有の空気を纏った少女。確か同じ清澄のはず。

ならば見て確かめるのも悪くはないと。

「よし…行こう」

「よく言いましたわ!」

こうして2人の目的は違うものの清澄の試合を観戦することになったのだった。

「ふ、藤田プロ!」

「…何があったんだ一体」

「こゝ、これ先程提出された龍門渚のオーダーなんですが…」

実況解説室に向かおうとしていた藤田を呼び止めたのはとある記者だった。

かなり焦っている様子だ。どうやら想定外の事態が発生したらしい。記者は一枚のオーダー表を手渡してきた。

「沢村がオーダーから外れ、天江が副将…か。そして大将は…」

昨年とオーダーを組み替えてきている。大将は聞いたことがない1年生だったが藤田には心当たりがあった。

あの白髪の少女で間違いないだろう。天江衣を副将に追いやるくらいだ。やはり相当ててるのだろう。

（龍門渚…昨年より相当強くなっていると見て間違いないな）

「衣和緒。これを着けなさい。変装用ですわ」

「いや…いいい」

一方観戦室で席を取った透華と鷺巢。透華が着けている同じサングラスを渡されたが正直効果があるとは思えない。と言うより逆に目立つと思うのだが。

やはり何処かずれている透華。当然鷺巢は付けるのを拒む。

「そうですか。ああそろそろ始まるようですわね」

対局が始まった。試合は終始清澄ペースで先鋒、次鋒、中堅と進んでいったが鷺巢の目当ての少女は出てこず

また出てきた打ち手も個性的なのはいるがはつきり言って鷺巢の障害にはなりえないだろう。まあポジションが違うので絶対に当たらないが…

(さて、いよいよですわね！お手並み拝見といきましようか)

副将戦。どうやら透華の目的の原村和が出てくるようだ。

全中王者ということもあり一気に観客が増えてやかましい。

しかし透華は中堅であり、副将である原村と団体戦で当たることはない。果たして気づいているのだろうか。

そしてその原村和は序盤こそ目立ったところはなかったもののミスのない打牌をし着実に点を稼いでいった。

(無駄のない打ち筋と最善の和了…やはり原村和はのどっちですわ！)

のどっち。ネット麻雀界最強との呼び声も高い。透華はこののどっちが原村和ではないかと感じていた。

中学時代からその片鱗は見えていたのだが、今日の対局を見て確信を持った。間違いない。

副将戦が終わり透華は用は終わったとばかりに立ち上がる。

「さあ行きませうよ。衣和緒」

「…いやもう少し見ていく」

「そうですか…なら先に行つてませうね」

透華は当然鷲巢と共に観戦室を去ろうとするが鷲巢はこの後の大将戦まで見るつもりだった。鷲巢は横目で少し先に居る清澄一同を確認すると先程の少女が観戦室を出て行く。自分と直接当たる大将なのだろう。実に都合がいい。透華はそれならと一足先に出て行つた。

それからしばらくして…透華は龍門淵一同と合流していた。ようやく起きたのだから衣とハギヨシもいた。

興奮しっぱなしで原村和がのどちだったことを説明する。そんな透華の調子に押し入れ気味の一同。

話が一段落したところで衣が透華に尋ねた。

「ところで衣和緒は？純たちが透華と一緒にだと言っていたが」

「ああ…衣和緒ならまだ観戦していますわ。なんでもまだ見たいものがあるとか…」

「珍しいな…あいつが興味を持つなんて」

すると少し騒ぎが起きていた。なんでも原村和の後に出てきた清澄の大将が東福寺

を飛ばして対局を終わらせたらしい。透華の記憶では他の3校もそこそこ点が残っていたはずなのだが。そして観戦を終えた鷲巢が帰ってきた。先程浮かべていた邪悪な笑みを浮かべている。

「衣和緒！」

「…ようやく起きたか衣。いやなに…なかなか面白いものが見れたのでな」

「清澄の5人目か」

純の問いかけに鷲巢は笑みで返す。どうやらかなり鷲巢の興味を引いたらしい。

一は清澄の大将に内心同情した。なにせ鷲巢は衣以上の人外だ。持ち前の豪運で高い手を張り、しかも早い。

東一局の四巡目で国士無双を振り込み飛ばされたのは恐らくもう忘れないだろう。

そして厄介なことに、衣と違い強さにムラがない。鷲巢が負ける姿が想像できなかった。

「じゃあもう時間ですし…食べに行きましょうか」

「わーい！衣はエビフライだ！午後から頑張るぞ！」

「そうだな」

こうして龍門渕一同は昼食を取りに食堂へと向かう。

ちなみに午後からの2回戦は透華が他校を飛ばし、衣及び鷲巢の出番はなかったこと

を付け加えておく。

そしてもう一つのシード校：風越女子も危なげなく決勝進出を決めていた。

「そう…龍門渕も勝ったのね…よかった」

「でも中堅戦で終わってしまつて…結局大将は分からずじまいです」

名門風越女子のエースにしてキャプテン：福路美穂子は今後輩からの報告を聞いていた。

打倒龍門渕…王座奪還…それらを掲げた今大会だが不安材料があった。

龍門渕のオーダーが変わっているのである。

昨年MVPまでとつた天江衣を副将にし、大将に新1年生を据えている。そしてこの1年生、これまで公式戦の出場がなく、まったくデータがない状態だった。

出来ることなら打ち筋を確認したかったのだが…

「どんな打ち手でも華菜なら負けないわ。証明しましょう…私たちが最強だということ」

(龍門渕…か)

こちらは同じく決勝進出を決めた清澄高校：部長であり中堅の竹井久は考えていた。

昼食の時腐れ縁の藤田靖子からの忠告があった。

龍門淵に気をつける…と。

(今更つて感じね。元から強いんだし…私は全力で打つだけ)

(明日…間違いなく苦戦を強いられるな…)

決勝進出の最後の1校、鶴賀学園の部長…ではなく副部長の加治木ゆみは明日の勝機の薄さを理解していた。

チーム力はシード校には勿論、清澄にすら及ばないかもしれない。ここまでもギリギリで勝ち上がってきた。

しかし決勝進出で十分だなどは露程も考えてはいなかった。

(勝機がないわけではない。勝つ…勝って全国に…)

それぞれの思惑がかかった決勝戦が幕を開ける。

「あれ…私が中堅という事は…」

「やつと気づいたか透華…原村和は副将だ。どうあがいても団体戦では戦えない。なかなか言い出せなくてな…」

「なっ…なんですってー!」

…やはり透華は気づいてなかったようだ。

決勝

難なく決勝進出を決め帰路に着く龍門渚高校麻雀部。鷺巢は昨日同様龍門渚家に泊めてもらう手はずとなっていた。

夕食後今日出番のなかった衣が打ちたいと言い始める。流石に明日に差し支えるため透華が止めたのだが聞く耳を持たずどうしてもとだだをこねる衣。

しかし鷺巢が衣の提案に乗る。鷺巢も鬱憤が溜まっていた。しばらく言い合いが続いたが、結局透華が折れた。

「いいの？透華」

「仕方ありませんわ。調子を崩されても困りますし…2人は副将と大将ですから対局は午後からでしょう。いざとなったら午前中は仮眠室で寝かせます。」

「あの2人に限ってそんなことないと思うけどね…」

呆れたように話す透華と一。残り2人の生贄…ではなく打ち手は純と智紀がじゃんけんに負け、付き合うことになった。

そのまま夕食はお開きとなり難を逃れた透華と一は明日に備え、智紀がまとめた対戦校の資料を自室に持っていき確認し終わったあと就寝した。

翌日、昨日と同じようにハギヨシに送迎してもらっている一同。

「いや、酷い目にあつたぜ……」

「本当に酷い……」

「智紀お前……この前逃げただろ」

「……」

「衣和緒！猛者がいるといいな！」

「ぬ……」

車内で軽口を叩く純と智紀を見て思わず苦笑いする一。

一方隣では昨日危惧していた事態が起こっていた。

衣は大丈夫そうだが鷲巢が少し眠そうである。この2人純と智紀が自室に帰り寝たあとも打っていた。衣は一昨日より寝ていないはずなのにどういうことだろうか。

「はあ……だから昨日あれほど……」

「透華！今日は衣たちに回してくれ！」

はいはい……とから返事をしつつ、ここまで頭に描いていた通りになるとはと呆れ気味の透華。衣がピンピンしているのは意外だったが。

「お嬢様、もうすぐ着きます」

「そうですか、では皆さん降りる準備を」

運転席からハギヨシが話しかけてくる。いつの間にか結構時間が経っていたようだ。会場に着くやいなやマスコミに取り囲まれ主に透華を中心に取材を受ける。

昨日の飛ばし勝ちが印象に残ったのだろう。透華は上機嫌で取材に応じるが、マスコミ嫌いの衣がいつの間にか姿を消していた。

副将戦の前には帰ってくると思うのだが…発信器を持たせてあるので大丈夫だろう。そして昨日と明らかに違う点が一つ。決勝進出校に控え室が用意されることだ。リラックスして対局に望めるようにという運営側の配慮だろう。

「ふあ…」

「大丈夫…?」

「今のうちに仮眠室行つとけよ」

観戦室に入ってから眠気を隠せないのか大あくびを欠く驚巢。そんな驚巢を智紀が心配し、純が少し寝たほうがいいと勧めてくる。

確かに少し寝たほうがいいだろう。車内では衣が常に話しかけてくるため寝るに寝られなかった。と同時に先鋒戦が始まるアナウンスが流れた。

「と…ま、遊んでくるわ」

「僕は少し睡眠をとりにいく」

「いつてらっしやい…頑張つて」

智紀の激励と共に純が対局室へと向かい、鷺巢は真逆の方向にある仮眠室へと向かう。今日は決勝進出校の生徒しか出入り出来なくなっているらしく道中誰とも出会うことがなく仮眠室にも誰もいなかった。鷺巢は床に着きすぐにすつと眠りに引き込まれていった。

それからしばらくして鷺巢は目を覚ました。深い眠りについていたのか眠気はすっかり取れていた。時計を確認したが、1時間程度しか経っていない。テレビでは先程まで先鋒戦が行われていたらしくダイジェストを流している。純はどうやら前半戦は奮闘していたものの、後半風越にまくられ結局原点近くで終えたようだ。観戦室まで戻ろうと立ち上がり仮眠室を出てすぐに清澄高校の制服を着た2人とすれ違う。

大将の宮永咲と副将の原村和である。鷺巢はこの後の対局の事を思い、つい口元を歪ませてその場を去っていった。

「うっ……」

「どうしましたか？宮永さん」

「いや……ちよつと寒気が」

咲に正体不明の悪寒が襲う。体が冷えてしまったのだろうか。

いずれにせよ体調を崩すわけにはいかなるので早く布団の中に入ろうと仮眠室に入

る。部屋の中央辺りにひと組の布団が敷かれていた。言うまでもなく先程まで鷺巣が寝ていた布団である。どうやら起きたあと畳まないまま出て行ったらしい。

「あつ…暖かい。ふかふか…」

「その布団で寝るんですか…?」

当然鷺巣が寝ていたのでまだ熱が残っている。

咲は都合がいいのでそのまま寝ることにした。抵抗などは特にないらしい。

和は新しく布団を敷き、2人は全国への思いを互いに口にした後仮眠に入った。

「…すつきりした」

「おかえりなさい。意外と早かったですわね」

透華の出迎えを受けたあとテレビにて改めて点数を確認する。

一は次鋒戦に向かったらしく既にいなかった。

先鋒戦終了時

風越女子 148000 (+48000)

龍門渕 101200 (+1200)

清澄 82400 (-17600)

鶴賀学園 68400 (-131600)

風越女子が頭一つ抜き出るスタートとなった。しかし他3校はまだ主力を残している。まだ勝負の行方は分からないと言つていいだろう。

「あーちくしょう…あの片目女」

「お疲れ様…」

しばらくして愚痴りながら純が帰つてきた。前半に独走しながらも風越女子の福路にいいようにされたのが気に入らないのだろう。とんだ食わせ物だった。

「いや…原点を死守できただけでもなかなかですわ。…それにしてもあの女目立つてますわね…」

「はは…でも楽しかったな。個人戦が楽しみになったわ」

透華にとっては点数より目立つ目立たないの方が重要らしく、後半稼いで一気にトップに立つて目立つている福路にご立腹である。純は変わらない透華の調子を見て苦笑いして先程の対局を思い出す。

風越は言わずもがな清澄には爆発力があつた。彼女たちともう一度打ちたいと純粋に思つた純であつた。

次鋒戦が始まり透華たちは愕然とした。鶴賀の次鋒が明らかに素人なのだ。

手元がおぼつかなく、捨牌の切り順もめちやくちや。他家のリーチに対してもしャンテンから一発で危険牌を切り振り込む始末だった。

「なんで決勝にあんな素人が紛れ込んでいるんですの!？」

「人数合わせじゃねえの。にしてもひでえな…よく決勝に上がってこれたな」

(いや…ただの素人ではない。なかなかの強運を持っている…)

鶴賀学園は今大会初出場である。無名の高校で補欠の登録もなく5人きっかりなので数合わせの部員がいても不思議ではない。

現に部員不足で数合わせに素人を入れて参加している高校はいくつもある。

ただそういった高校の大半が早々に負けるので決勝まで残っているのは極めて稀であると言えるだろう。透華に続き純も人数合わせだと判断したが鷺巢の見解は少々違っていた。

次鋒戦も終盤に差し掛かり、一は順調に点棒を稼いでいた。

もうすでに親番を終え、大きい手に振り込まない限りはプラスで終わることが出来るだろう。

次鋒戦後半戦南三局 親・風越女子 ドラ・(七)

西家 龍門測 117800 (+16600)

北家 清澄 100800 (+18400)

東家 風越女子 146200 (11800)

南家 鶴賀学園 35200 (133200)

(どどどどどどどどしようしようしよう!?)

この上なく焦っているのは鶴賀学園の妹尾佳織である。

先鋒の津山睦月が予想以上に削られ、部長の蒲原から発破をかけられて臨んだ次鋒戦。

しかしここまで失点しっぱなしである。流石にこのままではまずい。

佳織配牌

〔1 1 1 3 4 5 9 9 9 ④赤⑤⑥北〕 ツモ (2)

(えーと……これは……)

比較的ソーズが多い配牌を見て佳織はひとまず赤5筒を切りつつ、かつて蒲原から役について教えられたことを思い出していた。

それはまだ佳織が入部してまもない頃。

「いいかー佳織。手を一つの数牌に統一した手をチンイツっていうんだ」

「数牌ってマンズソーズとあと…ピンズのことだったよね」

このあたりの知識もまだまだ乏しい佳織である。

「うん、そうだ。打点が高いから狙える時は狙っていくといいぞーワハハ」

(やってみよう…)

もう点棒は4万点を切っている。上がるだけ上がろうととりあえず佳織はチンイツを狙う。

六巡目

佳織手牌

(一 1 1 2 3 4 5 6 7 9 9 9 ⑥) ツモ (八) 打 (一)

七巡目

佳織手牌

(1 1 2 3 4 5 6 7 8 9 9 9 ⑥) ツモ (一) 打 (⑥)

(あ…一色になった。テンパイはしてるんだらうけど…何待ちだらう…?)

「リ、リーチします!」

佳織、何待ちか判断できないがとりあえずリーチをかける。これも蒲原の教えである。今回はリーチも忘れない。

七巡目

一手牌

(二三六八3赤568①②白白白) ツモ (東) 打 (白)

(リーチかあ…ここまでかな)

一の配牌はかなり悪くここまで来てようやく字牌整理が終わった。

ツモも締まらず、この形から上がりを目指すのはさすがに無謀だろう。

点棒にも余裕が有るためノータイムで白の暗刻を崩し、下りる。序盤に一枚切られて
いるため完全安牌である。

七巡目

まこ手牌

〔①②②③③④④④⑥北北 副露 横南南南〕 ツモ (一)

(ぐっ…)

清澄次鋒の染谷まこは好形の混一色のイーシャンテン。しかしここで1索を引く。

佳織捨牌

〔赤⑤北四④④発一〕

〔横⑥〕

相変わらず訳の分からない河である。まこの長い麻雀歴でも見たことがなかった。

故に待ちが読めない。

(はつきりとは読めんが…強いて言うなら一枚も見えとらんソーズが怪しい…?)

上がりを目指すのなら1索ツモ切りである。

2索が3枚見えているためワンチャンス。他のソーズと比べて切りやすいのは確か

だが：少考の末まこは現物の北を切りリャンシャンテンに戻す。

シャボ待ち等を考慮し1索は切れないと判断、この手ではあまり打点も見込めない為下りを選択した。

八巡目

未春手牌

(三四赤五七七③④⑤⑥⑦ 副露 2横22) ツモ (発) 打 (発)

親の風越女子の次鋒、吉留未春はすでに好形でテンパっていた。

2、5、8と三面待ちのタンヤオドラ3。

(この手を上げれば大きい。連荘できるし何よりプラス収支に転じる。こっちは3面張…引き合いで負ける気はしない!)

当たり牌はツモれなかったが幸い持ってきた発は佳織の現物。その後特に鳴きも入らず佳織のツモ番が回ってくる。

「…あ！す、すいません！ちよつと待って下さい」

(一発でツモったか…?)

佳織がツモ牌を見ると同時に声を上げた。手牌を区切り当たり牌かどうか確認する。明らかにマナーに反しているが他の3人は素人だと気づいているので何も言わなかった。

「3つずつ…3つずつ…ツ、ツモです！裏は…ありません」

「…手牌は？」

「あわわ…すいません！」

確認が終わり間違はなく当たり牌だと確信した佳織はツモを宣言し、裏ドラをめく。しかし先に手牌を倒さなかったためまこが指摘する。佳織はすっかり忘れていたように慌ててパタパタと手牌を倒した。

佳織手牌

（11112345678999） ツモ （8）

「チンイツです…面前だからえーと…」

「なっ!？」

「九蓮宝燈じゃと…」

チンイツどころではない佳織の手牌。上がった佳織はなぜ3人が呆然としているか分からなかった。

「ちゅ…九蓮宝燈ー！ここまで押されていた鶴賀学園に役満が出ましたー！」

「すごいな…流石に純正は見たことがない」

この役満に藤田が思わず感服する。実況席はおろか観客席も湧いていた。

役満は麻雀の花であり、ましてその中でも滅多に見れない純正九蓮宝燈である。

そしてこの上がりで鶴賀学園が一気に盛り返す。

西家 龍門湊 109800 (18000)

北家 清澄 92800 (18000)

東家 風越女子 130200 (116000)

南家 鶴賀学園 67200 (+32000)

次鋒戦後半戦南四局 親・鶴賀学園 ドラ・(中)

佳織配牌 (2二⑧二13白534⑦⑨白二)

(早く理牌しないと。つてあれ…これつてもしかして…)

理牌を進めていた佳織が途中である事に気づく。

凡庸な配牌だと思っていたのだがどうにも様子が違う。

(まさか純正九蓮をあがってくるとはのう…始めて見たわ…)

先程下りたおかげで難を逃れたまこは心中で愚痴を吐きつつ理牌を済ませる。

配牌はいい。タンヤオ系の軽い手だった。しかし親である佳織からなかなか第1打が切られない。理牌は終わっているようなのだが遅い。ついにしびれを切らしたまこは佳織に問いかける。

「どうしたんじゃ？あんたが切らんと始まらんぞ？」

「あ、はい。すいません…大丈夫です！」

「そーかい。じゃあ早く切つ…「ツモ！」…は？」

佳織手牌 (一二二一123345⑦⑧⑨白白)

「[「…」]」

もう言葉が出なかった。ありえない事態に頭が追いつかない。

実況席も観戦席も驚愕し、沈黙が場を覆っていた。

「て、天和です…鶴賀学園の妹尾選手、天和を上がりました…」

「いやもう…なんといえばいいか…ずるいな」

しばらくして実況が我に返り職務を全うしようとして説明を行う。

まさかの天和に藤田も呆れ気味に話す。

余りにも理不尽である。ずるいと言った藤田は決して間違っていない。

南家 龍門渕 93800 (116000)

西家 清澄 76800 (116000)

北家 風越女子 114200 (116000)

東家 鶴賀学園 115200 (+48000)

「オース…続行されますか？」

「ふえ…あつもういいです！」

佳織は連荘せず上がりやめを選択。これにより荒れに荒れた次鋒戦が終わった。

次鋒戦終了時

鶴賀学園 115200 (+46800)

風越女子 114200 (-133800)

龍門渕 93800 (-17400)

清澄 76800 (-15600)

「次鋒戦終了ー！まさかの鶴賀学園の一人浮き！風越をまくりトップに立ちました！」

「鶴賀は最後の2局で一気に稼いだな…。まさか連続で役満を上がるとは」

鶴賀学園以外は点を減らす結果となった。

特に役満の親かぶりを食らった風越が大きく点を減らし、福路が作った貯金をかなり吐き出してしまった。

「……目立ちすぎですわー!!純正九蓮に天和!?ありえせんわ!」

「ごめんね…点減らしちゃって。て、やっぱり荒れてるね透華」

「おつかれ、まあ気にすんな。ありやどうしようもねえよ…って早く行けよ透華。次お前だぞ」

「…分かっていきます!」

龍門渕高校の控え室では透華が喚いていた。一応純が咎めるが気持ちは痛いほど分かる。帰ってきた一もある程度予期していたようだ。鶴賀学園の妹尾佳織、途轍もない幸運の持ち主である。

だがそんな彼女のたった一つの不運は…

「ククク…：カカカカカ…面白い…面白い小娘だ…」

鷺巢の興味を引いてしまったことだろう。

「佳織すごいな！大活躍じゃないか今日は！」

「あ、あれでよかったですか？」

「いや…十分すぎる」

「うむ。途中までヒヤヒヤしてたが」

「稼ぎすぎつすよ…怖いくらいつす」

一方佳織はそんな事は露知らず鶴賀学園の控え室に戻ってきていた。

収支は＋46800と大幅なプラスとなり、風越を抑えトップになった事で盛り上がった。

「蒲原…分かっているな」

「もちろん。引き離せばいいんだろー風越を！」

鶴賀学園中堅の部長、蒲原智美は状況判断断力に優れておりどちらかという守備型の打ち手である。少ない稼ぎながらも失点も抑えてくれるだろう。

「ところで…佳織。九蓮宝燈と天和を上がったよな」

「う、うん。そうみたいだけど」

「ダブルかー明日にでも死ぬかもなーワハハ」

「ええ!?!私死ぬの!?!」

天和、九蓮宝燈は滅多に出ない役満である。純正九蓮ともなると更に珍しい。

上がつてしまうと全ての運を使いきり死んでしまうという話もある。

「蒲原!…大丈夫だ妹尾。ただの迷信だ」

「…もう! 智美ちゃん!」

「ワハハ! 行ってくる!」

流石に怯える佳織が可哀想になったのか蒲原を咎める加治木ゆみ。

からかわれたと知った佳織は怒ったが、蒲原は笑いつつ中堅戦に向かつていった。

「すまんの…凹んでもうた」

「ま、しようがないわねあれは…じゃ行ってくるわ!」

「頑張ってください!」

清澄の中堅は部長の竹井久。今のところ4位でかなり劣勢である。

久はできることを最大限にやろうと割り切っていた。ここで点差を詰め、後は1年生

2人に託す。

「さあ決勝戦中堅戦が始まります！」

折り返しの中堅戦。まさにターニングポイントと言えるだろう。

ここを制することで流れが変わってくるかもしれない。

各校の中堅はそれぞれの役割を胸に勝負に挑む。

執念

『さあ中堅戦です。ここまでの点数はこのようになっていきます。ここからどうなるでしょうか』

鶴賀学園 115200

風越女子 114200

龍門渕 93800

清澄 76800

『そうだな…まさか鶴賀学園がトップに立つとは思わなかった。更に差を広げることになれば逃げ切りも十分見えてくるだろう。対して風越が辛い。エースの福路が作った貯金を吐き出し、トップを明け渡した。高打点が売りの池田がまだ大将に控えてはいるが…』

なるほど…と相槌を打つ実況を傍目に解説の藤田は簡単にはそうならないだろうが…と心中で付け足した。

各校の点差はまだまだ離れていない。しかし清澄の中堅はあの竹井久である。そのひねくれた打ち筋は嫌というほど知っている藤田。ここで清澄が巻き返すようなこと

があればまた分からなくなる。

中堅戦前半戦東一局 親・龍門渚 ドラ・(六)

東家 龍門渚 93800

南家 風越女子 114200

西家 清澄 76800

北家 鶴賀学園 115200

(起家…:そしてこの配牌!初つ端からついてますわね)

透華配牌

(二一九②④234赤5778中) ツモ (四)

タンピン三色が臭う好配牌。

この手を上がって連荘できればデジタル派の透華でも一気に流れが来るだろうと感じていた。とりあえず浮いている九萬から切る。

(原村和…:直接打ち合えないのは残念ですが…)

おつといけないと自分を戒める。原村和との対局は個人戦までお預けだ。

まずは目の前の中堅戦に集中しなければならない。我が龍門渚高校は現在3位。このままでは県予選敗退である。後ろにあの2人が控えているので大丈夫だとは思うが稼ぐに越したことはない。何よりも目立つことができない。

「リーチ！」

しかし七巡目清澄竹井久に先制リーチをかけられる。

(む…しかし私は親ですしこの手…引くわけにはいきませんわ！)

同順

透華手牌

〔二三四②④234赤5677中〕 ツモ 〔③〕

(どカンチャン！テンパイですわ！)

3筒なら鳴いてテンパイに取ろうと思っていたが、まさか自力で引いてこれるとは。これで中切りで1、4、7索待ちでテンパイ。高め三色の満貫手である。

透華は今一度場を見渡す。

文堂(風越)捨牌

〔西中一九九④〕

〔8〕

竹井(清澄)捨牌

〔西東一九八二〕

〔横七〕

蒲原(鶴賀)捨牌 副露 〔発横発発〕

〔南中⑨①一2〕

〔北9〕

清澄は序盤にヤオチュウ牌を切り、ペンチャン払いをしているのでタンピン系の手牌だろう。間四軒の三、六萬待ちあたりが本命だと透華は考えた。ドラ筋でもある。

打点が十分のため和了率を考えリーチはしない。

(引き合い…出来れば高めで上がりたいですわね) 打 (中)

「おつと出たわね…ロン！リーチ一発ドラ4…裏はなしね」

久手牌

(六六六567④⑤赤⑤⑥⑥⑦中) ロン (中) 裏ドラ (発)

(な…中単騎!?)

安牌として残しておいた中が当たり牌。しかも七萬切りで3面張、高め三色を捨てている。中は2枚切られていたのでわざわざ打点を下げ地獄単騎にとつたことになる。

(なぜそんな不可解な待ちに…)

子の跳満12000点分の点棒を支払いつつ、透華は頭を急速に回転し始める。

そういうえば昨日一回戦の試合を見たとき、原村和目当てで見に行っていたのであまり記憶に残っていないが待ちをわざわざ悪くすることがあつたような気がする。理解できない打ち方だったため牌譜もあまり確認しなかった。

しかしこういう振り込み方をする点数以上に精神的にダメージが大きい。頭を切り替え、引きずらないようにしなければならぬ。

東家 龍門渕 81800 (112000)

南家 風越女子 114200

西家 清澄 88800 (+12000)

北家 鶴賀学園 115200

「今のでウチが最下位か」

「……のままでは厳しいな」

「衣和緒？」

龍門渕高校控え室。一はつい呟いてしまった鷺巢に問いかける。

鷺巢はこれではじり貧だと感じていた。透華とは何回も打ったが基本に忠実なデジタル打ちだと鷺巢は認識している。故にああいう絡め手を使ってくる敵には脆いだらう。

「…透華なら大丈夫だよ」

「おいおい衣和緒、透華を甘く見すぎだろ」

「同意……」

「ぬ……」

粗方話したあと一同から出たのは透華に対する信頼の言葉だった。

聞けば去年全国に出場した時もあれほど極端なのはいなかったが若干数ああいう打ち手がいたらしい。

その度に透華は打ち筋を変え、大きく稼ぐことはなかったが大量失点した事もないとか。

「まあ最悪休憩の間に「うわーん！とーかあーん！」…衣!?どうしたの!？」

突然今までどこに行っていたのか衣が帰ってきた。

しかし原村和が持っていたはずのペンギンらしきぬいぐるみを手に泣いている。

どうやらぬいぐるみを届けようとして取り合いになり破けてしまったらしい。

泣きじやくりながらなので衣の言うことはよく分からなかったが、とにかくぬいぐるみを直せばいいことだけは理解できた。

「んーでもこれはハギヨシさんくらいしか「呼びましたか?」うわ!どこから!？」

「神出鬼没は執事の嗜みですから」

「執事スゲエな…」

どこから現れたのか部屋中央にハギヨシが佇んでいた。状況を理解しているのかソーイングセットを持っている。

そして慣れた手つきでぬいぐるみを縫っていき、あつという間に元の姿を取り戻して

いく。

「すごいぞハギヨシ！ペンギンが黄泉から帰ってきた！ハラムラに返してくる！」

「次、衣だから真つ直ぐ帰ってこいよ！」

「うん！」

はしやぎながら出て行く衣を見てこのままだとまた姿を消しそうなので純は一声かける。流石に副将不在で不戦敗なんてことになつては笑えない。

なおハギヨシは役目を終えた後いつの間にか姿を消していた。

「ツモ！30000・60000！」

久手牌

（五六七九赤567⑤⑥⑦西西西） ツモ （九） ドラ （九） 裏ドラ （9）

（また地獄単騎…なんでそんなうつつすいところ一発で持つてくるんですの!?!）

対局は南四局オーラスまで進んでいた。

ダーンと卓にツモの音が鳴り響く。牌を高く弾き飛ばして叩きつける盲牌しているのか分からない清澄のツモ和了。

リーチ一発目にそんなところを持つてこられては堪らない。

そして半荘打つて確信したがやはりこの竹井久、多面張を嫌う傾向にある。

今回も8切りリーチのため5、8索のノベタン待ちを捨てている。しかし自分の手牌

を見るにそれが正解だと感じざるを得ない。

透華手牌

(一一二六八五五五八八九九⑦⑧⑨)

透華は苛立ちを隠すことが出来ないまま、牌を雀卓にかきこんだ。

中堅戦前半戦終了

南家 龍門渕 78100 (115700)

西家 風越女子 93900 (120300)

北家 清澄 122100 (+45300)

東家 鶴賀学園 106900 (19300)

『前半戦終了…清澄高校が大きくトツプに立ちました！中堅竹井久の活躍が光ります！』

『ここまで稼ぐとは。清澄は終始他家にペースを握らせなかったな』

(ぐ…ろくに打たせてもらえませんでしたわ…)

東一局の振り込みでケチがついたのかその後の配牌とツモが噛み合わなかった。

確率論は狂っていないのだがどうにも裏目裏目に引いてしまう。

清澄を警戒しすぎるあまりドラのヤオチュウ牌や浮き牌が切れず手が進まない。

おかげでその後は振り込まなかったもののツモ和了は防げない。気がつけば3校に

離されてしまった。

「とーかー！」

「つー衣?! なぜここに! というよりどこに行つてましたの!?!」

少し席を外そうと対局室を出てすぐに、よく聞く衣の声が透華を呼び止めた。

その声は少し弾んでいて、衣も幾分か嬉しそうだ。

とにかく透華はまず衣に事情を聞き、納得する。

「なるほど…そんな事が。それにしても衣、偉いですわね」

「えへへ…」

透華はつい衣の頭を撫でる。いつもなら子供扱いされることを嫌い、嫌がる衣だが本当に嬉しいのかそんな素振りを見せない。

そして衣は満面の笑みを浮かべていた。

ふつと気づき、廊下にかけてあつた時計に視線を向ける。

そろそろ休憩時間が終わり、後半戦が始まる時間だ。名残惜しく透華は衣の頭から手を離した。

「さ、もう時間です。早く控え室に帰りなさい」

「うん! とーかも頑張つて!」

「…! ええ! もちろんですわ!」

透華は心から驚いた。衣から激励を受けた事が今までなかったからである。

衣が鷲巢との対局後孤独でなくなったことで少し変わったのは気がついていたが…
何にせよこれでやられっぱなしですごくごと帰られなくなった。

(ふっ…後半戦で大きく稼いで堂々と帰ってやります！)

透華は意気揚々と対局室へ戻っていった。足取りも先程より軽かった。

中堅戦後半戦南三局 親・清澄 ドラ・(7)

透華配牌

(一一一13499②③⑦⑧東白) ツモ (9) 打 (東)

(やっときましたわね…チャンタ系ですが…ツモ次第では勝負できそうですわ！)

透華の頭のアホ毛が回転する。

ここまで透華は放銃こそしていないものの大きな手を上げてもらえない。

今回は第一ツモで順子が完成した。これなら高打点を狙えるかもしれない。

九巡目

久手牌

(四七444567④④④赤⑤⑥⑦) ツモ (五)

(テンパイだけど…三色は嵌張になっちゃったか)

しかしこの局も波に乗っている久が先にテンパイ。だが頭を悩ませる形となった。

四萬切りリーチで跳満確定。そして三萬はまだ場に見えていないが、六萬は既に2枚河に捨てられている。通常なら上がりやすさを優先して七萬切りで両面待ちにとるところだ。

「リーチ！」打〔四〕

（そんなの…私らしくないわよね！）

しかし久は六萬待ちの確定三色に取った。

親のリーチをかけることで牽制の意味合いもあり、これまで見せた怒涛の和了がその効果を倍増させる。これで降りて他家は勝負を避けるはずと久は考えていた。

（ワハハ…こりや厳しいな…）

（この人のリーチは読めない…）

そして久の目論見通り鶴賀と風越はまだ張っていないかった為消極的になってしまう。危険牌を掴んでしまえばオリてしまうだろう。そして透華のツモ。

同順

透華手牌

（一 二 一 三 四 九 九 ① ② ③ ⑦ ⑧ ⑨） ツモ （赤五）

『あつと…龍門洩選手厳しい所を持ってきてしまったー』

『リーチがかかってしまった以上オリるだろう…純チャンイーシャンテンだが有効牌が

少なすぎる』

竹井（清澄）捨牌

〔北北1発中⑨〕

〔九38横四〕

肘をつき頬杖をかいたやる気のなさそうな解説の藤田が言う通りこの手有効牌が驚く程少ない。

テンパイに至るのは三萬と2索のみ。一応5索でも張れるが、純チャンと三色が消え一気に手が安くなってしまう。まず透華は久の河を一瞥した。いつもの透華なら間違いないかオリる。だが…

（この手をものに出来ないようなら…全国で活躍など出来るわけありませんわー）
透華は赤五萬をそのままツモ切った。デジタルではまずありえない打牌である。

『な…突つ張るのか!？』

藤田も思わず立ち上がり意外そうな声をあげる。

龍門洩透華という雀士を去年から見てきたが堅実なデジタルの打ち手だと記憶している。少なくともこんな無茶はしないはずだ。

透華 ツモ 〔7〕 打 〔7〕

（1）（5）…

透華 ツモ (2) 打 (2)

(い) (.....)

透華手牌

(一) 二 一 三 四 九 九 ① ② ③ ⑦ ⑧ ⑨ ツモ (2)

(張った！純チャン三色確定！)

三巡後透華はテンパイに漕ぎ着ける。それも最高系。

4 索を通さないといけないが、ここまで危険牌を打つておいて今更ひよるわけがない。

「通らばリーチですわー！」 打 (4)

「…通しよ」

無筋中張牌四連打切りリーチ。しかし透華は通ると確信していた。

裏筋や間四軒など平凡な待ちであるはずがないと。それはある意味久への信頼、期待だった。

(追いつかれるなんて…早くツモりなさい！)

一方先にリーチしたはずの久は焦っていた。

周りがオリてくれるかと思っていたが、突っ張ってくるとは。ここまで一向にツモる気配がない。脇に流れているかもしれないが、そうなるかと完全にオリている鶴賀と風越

からは出ないだろう。

十三巡目

久手牌

〔五七44567④④④赤⑤⑥⑦〕 ツモ 〔三〕

〔三萬…両面待ちが正解だったというの!?!〕

よりにもよってツモってきたのは両面待ちにしていたら和了っていた三萬。

しかし和了牌ではない以上リーチをしている久はツモ切りするしかない。

恐る恐る三萬を河へ放る。経験上こうして裏目った牌はろくなことにならない。切ったその瞬間透華のアホ毛がピンと伸びた。

「ロン…リーチ一発三色純チャンドラ1…裏1…16000点いただきますわ!」

透華手牌

〔一二12399①②③⑦⑧⑨〕 ロン 〔三〕 裏ドラ 〔⑧〕

悪い予感的中しその三萬が透華に当たる。裏はめくるまでもないが1枚乗って倍満。終盤にきて大きい、トップへの一矢報いる16000点の直撃。

〔意趣返しってわけね…やられたわ。まさか突っ張ってくるなんて…〕

久は軽く苦笑いしながら実らなかつた自らの手牌をパタツと伏せた。

〔私らしくもない和了ですが…やりましたわ!衣…見てくれているでしょうか…〕

その頃龍門測高校控え室では：

「…衣、なぜ儂のひぎの上に座っている？ソファーはいくらでも空いているだろうに…」
「衣はここがいい！」

それを聞き鷺巢は諦めたようにため息をつく。

ことは中堅戦後半戦が始まってすぐに遡る。

純、透華の言いつけ通り控え室に真つ直ぐ帰ってきた衣。そこにはうたた寝をしている鷺巢の姿があった。

まだ眠気が抜けきっていないかったらしい。

衣は何か思いついたような顔をして鷺巢のひぎの上に乗った。そしてしばらくして鷺巢が目を覚まし現在に至る。

一と純には鷺巢と衣の姿はまるで仲のいい姉妹に見えていた。ただひぎに乗っている衣の方が年上ではあるが。

「いやー微笑ましいね。純くん」

「ああ…そうだな」

「……」

残念ながら透華の和了はただ一人、智紀を除いて見ていなかった。

「ロン。2600ですわ」

「ワハ…安くて助かった…」

透華手牌

〔九九九12367②② 副露 発発横発〕 ロン（8） ドラ（1）

南四局オーラス鶴賀学園蒲原からあつさり透華が出和了。これで中堅戦が終了。

中堅戦終了

清澄 114700 (+37900)

鶴賀学園 101400 (-13800)

龍門渕 94200 (+400)

風越女子 89700 (-124500)

『中堅戦終了ー！清澄の一人舞台かと思われましたが、最後に龍門渕選手が意地を見せました！』

『あのような打ち手ではなかったはずだが…何かあったのだろうか』

『決勝戦は副将戦に移ります…』

『昨年インハイMVPの天江に全中王者の原村か…面白くなりそうだな』

藤田は大分点が平らになったなと感じていた。

久がやってくれた。これでどう転ぶか分からなくなった。

「ねえさっきの南三局…どうして勝負にきたの？」

対局室から四校の選手たちが引き上げていく。

清澄の中堅にして部長、竹井久が透華にある疑問を尋ねた。

何でも清澄にも透華のような打ち手がいるが、（原村和のことだと透華はすぐに察し

た）彼女はあのような場面では間違いないくオリを選択するらしい。

透華も普段ならオリしていただろう。

「それは…あなたのようないびねくれた打ち手が相手だったからですわ」

「どういふこと？」

ひれくれて…と久は苦笑いしつつ再び尋ねる。

どうやら自分でも自覚はあるようだ。

「あなたのリーチは普通の待ちの訳ないでしょう？前半戦で身にしみましてよ」

久はしばらく呆然とした後大きな声で笑った。

まさかたった半荘一回で打ち筋を見抜かれるとは。二人は個人戦での再戦を約束し

別れを告げた。

「おつ中堅戦終わったか…てあれ!?点棒増えてんな…」

テレビから流れていた中堅戦終了を告げる実況が耳に入った純。

最後のあたりを見ていなかったので確認すると点棒が回復している。

何があつたのか分からない。そこですかさず唯一試合を見ていた智紀が説明に入る。

「はーん。やるな透華も…」

「おお！ やつと衣の出番か！」

衣は鷲巢のひざから飛び降りた。その顔は本当に楽しそうだ。

仲良くなった原村和と打つのが待ちきれなかったのだろう。

「衣」

「なんだ？ 衣和緒」

「…楽しんで打ってこい」

「うん！ 行つてくる！」

珍しく鷲巢から話しかけ、鷲巢なりの激励を飛ばす。

こういう面はまだまだ不器用である。だが衣はそれでも嬉しかったようで、更に笑みを浮かべる。

衣は控え室を飛び出し、対局室へと走り出した。

成長

衣が対局室に姿を見せた時には他三校の選手が揃っていた。

その中にはもちろん清澄の原村和もいる。腕に抱いているのは先程衣が届けたエトペンだ。和は驚きを隠せない様子だった。

「あなたが…天江衣さんですか？」

「うむ！天江衣だ！」

和に聞かれそう言えば名乗っていないかと思いつつ、エトペンを渡した後、透華を見かけそのまま別れたのだった。そういえば友達になってくれとも言いきびれた。

透華が散々口にしていた原村和。聞けば去年の全中王者らしい。なかなか楽しめそうだ…と衣は期待に胸を膨らませていた。

会場に迷い込んだ子供かと思っていました…

和はそう口走ってしまいそうだったが、寸前の所でそれを飲み込む。

よくよく考えてみれば今日は決勝戦進出の選手しか入れないようになっていた。ならばこの少女も当然選手ということではないか。

この見た目でも去年のインハイ MVP。部長である竹井久からも要注意だと聞かき

れていた。

しかし誰が相手だろうが関係ない。自分は自分の麻雀を打って役目を全うするだけだと和は考えていた。

その割り切り切りが和にとって長所でもあり短所でもある。

場決めをし終わり、副将戦開始を告げるサイコロが回りだした。

副将戦前半戦東一局 親・清澄 ドラ・(9)

東家 風越女子 89700

南家 鶴賀学園 101400

西家 龍門渕 94200

北家 清澄 114700

『さあ始まりました副将戦！やはり注目は清澄の原村選手と龍門渕の天江選手ですか？』

『そうだな……この対局は原村がどこまで天江に対抗できるかが焦点となるだろうな。鶴賀と風越の苦戦は必至だろう。』

観客も実況も藤田ですらも原村と天江のぶつかり合いだと思っていた。

しかし副将戦は予期せぬ方向に向かうこととなる。

衣配牌

〔一三赤五六3679⑦⑧⑨東北中〕 ツモ 〔1〕 打 〔北〕

〔む…配牌がよくない…〕

衣にしては悪い配牌。しかしそれも好都合かもしれない。というのもも衣は序盤から上がつていく打ち手ではない。

元々序盤は見に徹し、原村和の打ち筋を確認するつもりでいた。

「リーチ」

その後鳴きも入らない静かな場であったが、八巡目親である風越女子深堀からリーチがかかる。

深堀（風越）捨牌

〔中発19東八〕

〔⑤横⑧〕

〔高くはないな…攻めてもいいが…〕

衣が深堀の手から感じ取った気配は裏が乗ってやつと満貫に届くかどうか程度。

今回衣は他家の様子見のためオリることにした。ツモられてもすぐに取り返すことが出来る自信もある。

その後深堀は当たり牌をツモれず、ただただ順目だけが進んでいく。

「テンパイ」

「ノーテン」

結局そのまま流局。手牌を倒したのは深堀のみ。衣の予想通り、ドラ雀頭の役なしリーチ。

守りに入った3人は固く、しつかりとオリきり振り込まなかった。

「ロン…1000は1300です」

和手牌

（二三四七七⑥⑦） ロン （⑧） 副露 （横324） （7横77）

東一局一本場では原村和が浅い順目で鶴賀東横から出和了。二副露しての喰いタン。ドラもなく打点は低い。

『副将戦最初に和了を決めたのは清澄の原村選手！しかし地味と言わざるを得ない和了ですね』

『いや…リー棒供託もあったからな。あの酷い配牌からよく真つ先に上がったもんだ』

藤田は迷わず喰いタンを選んだ原村和を評価した。

確かにこの和了一見打点は低いが、リー棒と芝棒を加えると2300の収入。二翻分の価値がある。この局面では最良の判断だろう。

続く東二局は全員互いが互いの手牌を警戒していたのか誰も上がれず再び流局。和のみのテンパイで親が流れる。

そしてこの三局を通して衣は原村和という雀士が見えてきた。

(なるほど…透華が熱を上げるわけだ)

衣は思考の海に潜る。これは鷺巢と打ってから心がけるようにしたことだ。今の衣はしっかりと相手の打ち筋を見極めることができる。

その打ち筋は恐ろしい程牌効率に遵守している。まず強引に手役を追うことはしない。第一打に必ず少考して打っているのは配牌から最善の速さと打点を見極めているのだろう。

衣がよく知る透華のデジタル打ちはぶれることが多いのでその差がよく分かる。まさに究極のデジタル打法と呼べるかもしれない。しかし衣は負ける気など毛頭しなかった。今宵は満月ではないため場の支配は使えないが…高打点で上がってしまえば良いだけの事。東三局は自分が親、様子見はもう終わりだ。

副将戦前半戦東三局流れ一本場 親・龍門洩 ドラ・(①)

西家 風越女子 90700

北家 鶴賀学園 98100

東家 龍門洩 92200

南家 清澄 119000

東三局に入った途端衣から強烈なナニカが溢れ出る。それは肉眼では見えず特定の

雀士のみ感じ取ることが出来るもの。

室内で風などないはずなのに衣の金髪がなびき始める。しかし衣をよく知る者からすればまだまだ弱いと言うだろう。

衣配牌

〔三五六4①①①③⑤⑥〕東東南〔ツモ 〔3〕 打 〔南〕〕

配牌からドラ3。鳴ける牌も多くどこからでも仕掛けにいける。

連荘し、一気に稼ぎたいこの場面では正に絶好。言うまでもなくこの好配牌は衣が引き寄せたものである。

数巡後和から東が切られる。衣は当然鳴いていく。

「ポンー」

衣手牌

〔五六七4①①①③⑤⑥⑦〕副露 〔東東横東〕 打 〔4〕

無駄ツモなしでダブ東ドラ3の親満テンパイ。変則2、3筒待ち。場にはまだ見えていない為ツモにも期待できる。と思っていたがすぐに深堀から3筒が切られる。順目も浅くまだ張っていない、もしくは連荘狙いで打点が低いと判断したのだろうか。

いずれにせよ不用意な打牌である。衣は思わず口元をつりあげた。

「ロンー12300ー」

衣手牌

(五六七①①③⑤⑥⑦) ロン (③) 副露 (東東横東)

西家 風越女子 84400 (112300)

北家 鶴賀学園 98100

東家 龍門渕 104500 (+12300)

南家 清澄 119000

(うっ……ドラ暗刻……)

深堀としては予想外の親満放銃。こんなに早く手を仕上げているとは思わなかった。

12300点の支払いは余りにも痛い。元々深堀は決して打点の高い打ち手ではない。リスクを最小限に抑え、要所要所で上がっていくスタイルだ。

ここまで動きがなかったので忘れていたが相手にしているのはあの天江衣である。何としてでも堪えなくてはならない。そして衣の突然の変貌については龍門渕高校一同のみが理解していた。

「始まりましたわね……」

「ああ……だが……」

透華は純が言いたい事が手に取るように分かっていた。

今の衣はベストコンディションから程遠い。いつもの衣ならさらに高い手で上がっ

ていただろう。しかしこれはしようがない事だった。大会のタイミングが悪すぎた。

今日は新月であり、衣のバイオリティは最低である。さらにまだ外は明るい。部屋にある掛け時計はちょうど3時半を回ったところだ。

これまでの先鋒戦から中将戦まで大きな連荘もなく比較的早めに対局が進んでいった弊害がこんな形で出るとは。

当初透華はこれまで通り衣に大将を任せ、鷺巢を先鋒に置くつもりだった。実際それがベストオーダーである。だが鷺巢の入部のただ一つの条件が自分を大将に据えることだった。よって破るわけにもいかず今回のオーダーになってしまったわけだ。

透華は鷺巢に視線を向ける。自分が決めたこととはいえ衣に負担をかけさせることになった原因なのは間違いない。

鷺巢はしばらくして透華の視線に気づき、鼻で笑いそっぽを向いた。

(ムキーン・なんですその態度は！)

しかし言葉に出すことは出来ない。自分は殆ど現状維持となる+400。それに鷺巢の強さも嫌と言う程知っている。出番も終わってしまった今、衣とこのあとの鷺巢を見守ることしかできない。そんな自分がむずかゆかった。

さて対局はオーラスまで進んでいた。透華が危惧していた通り衣にはいまいち波に乗りきれないようだ。

それでもトップをまくるあたりは流石と言えるだろう。

副将戦前半戦南四局 親・清澄 ドラ・〔西〕

南家 風越女子 80200

西家 鶴賀学園 83100

北家 龍門渕 121700

東家 清澄 115000

三巡目

衣手牌 (四赤五七七七八456④赤⑤⑥西西 ツモ 六)

(張った…好形だ)

予想よりあまり稼げていない衣は多少焦っていた。大物手は張っているのだがなかなか物に出来ない。風越と鶴賀が鳴きあってツモが飛ばされる。どうも二人共、場を早く流そうとしているようだ。清澄も清澄で鳴いて適度に和了ってくる。どうしても調子が万全だったらと悔やまれる。しかしこの局は浅い順目で高い手を張った。

リーチでメンピンドラ4で跳満確定。三、六、九萬待ち。高め三色で倍満までのびる。

「リーチ！」 打 (七)

衣捨牌

〔北南横七〕

(うつ…早い…)

(浅い順目のリーチですか…しようがないですね…こういう時もあります)

他家を足止めさせる為にもリーチをかける。

これで他家は結託して鳴きづらくなるだろう。鳴けば手牌が短くなるため当然振り込むリスクが高まる。他家からのテンパイ気配は感じない。まだ四巡目でありろくに手が進んでいないだろう。安牌も少ないため、手が煮詰まったら高めである九萬あたりが切られてもおかしくない。衣の予想通り、五巡後に深堀から高めとなる九萬が切られた。

(よし…案外かかったが…)

「ロン」

衣手牌 (四赤五六七八456④赤⑤⑥西西) ロン 九

発声とともに手牌を倒す。しかしなにか様子がおかしい。端に控えていた審判が卓上と衣の手牌をしきりに確認している。

なぜこんなことをしているのか？理由が分からないのは、この場では和了った衣と振り込んだ深堀だけだった。

確認を終えた審判がこちらに近づいてきて声をかけてきた。なにか問題でもあったのだろうか。少なくとも衣にはまったく心当たりがない。

「なんだ」

「すみません：天江選手。言いにくいのですが：フリテンですね。鶴賀学園の東横選手が当たり牌を切っています」

「なんだと！フリテン?!」

その言葉に衣と深堀は鶴賀学園東横桃子の捨牌に視線を向ける。

東横（鶴賀）捨牌

〔東2中六98〕

〔①③〕

（馬鹿な！衣が見逃したとでもいうのか!?!）

（助かった：しかし六萬など切られていたか?）

確かに衣の当たり牌である高めの六萬が切られている。それもリーチ一発目に。まごう事なきフリテンだ。和了は認められない。倍満の支払いを免れた深堀はほつと胸をなでおろした。罰符となる満貫分を支払いつつ、衣は自問自答を繰り返す。

見逃してしまったというよりは視界に入らなかつた：思考から外れていた感じだ。もちろんこんな経験は一度たりともない。

南家 風越女子 82200（+2000）

西家 鶴賀学園 85100（+2000）

北家 龍門湊 113700 (18000)

東家 清澄 119000 (+4000)

副将戦前半戦南四局一本場 親・清澄 ドラ・(九)

チヨンボでは場が進まないため南四局オースの仕切り直し。

この局で衣は手牌を作るよりも、鶴賀の捨牌を見ることを優先させた。衣が立てた仮説が合っているかを確かめるために。だがそれも虚しく九巡目に鶴賀が手牌を倒した。

「ツモつす。メンピンツモで…裏はなし。700・1300は800・1400。前半戦終了つすね」

東横手牌 (123三四六七八②⑥⑦⑧) ツモ (二) 裏ドラ (北)

(また…いつの間際にリーチをかけた? テンパイ気配すら感じなかった…)

ダメだった。捨牌を見ていたはずなのに気づいたら意識があらぬ方向へと向いてしまっている。今のは自分が振り込んでいてもおかしくない。

衣の仮説通りやはり何らかの力が働いていると考えるのが自然だろう。しかし今のところ打開策が思いつかない。

自分がいюのものなんだが相手の捨牌が見えなかつたら麻雀にならないではないか。

副将戦前半戦終了

南家 風越女子 81400 (18300)

西家 鶴賀学園 88100 (113300)

北家 龍門渕 112900 (+18700)

東家 清澄 117600 (+2900)

『前半戦終了しました。天江選手が追い上げていますが…あの見逃しは一体なんだったんでしょう』

『分からないな。天江が今更あんなミスをするとは思えない』

実況解説席では先程の見逃しについて話し合っていた。

こちらの映像で見る限り違和感のある見逃し。あの時衣は鶴賀の捨牌に視線すら送っていないかった。

もしかするとあの鶴賀の副将もまた特殊な打ち手なのかもしれない。

藤田は後半戦の展開が読めなかった。

(気をつける衣…対策がないとこのままズルズルいつてしまうぞ…)

「お疲れ、モモ。随分早く消えたじゃないか」

「点を減らしちゃって申し訳ないっす。でもここからステルスモモの独壇場つすよ！」

一方鶴賀学園副将東横桃子は大将である加治木ゆみと合流していた。ちなみにモモというのは桃子の愛称である。

しかし嬉しい誤算だったのが予想より早めに選手の視界から消えたことだ。

この東横桃子という雀士、極端に影が薄く対局中に消えることが出来る。もちろん物理的にはない。その証拠にカメラなどではその姿をはつきりと捉えることが出来る。選手たちの意識、視界から消えるということだ。

元々この副将戦は清澄原村と龍門測天江の直接対決とあつてこの二人が目立っていて、その恩恵を受けた形となつた。自分にとっては都合がいい。

「じゃあ後半戦も頑張ってくれ」

「はい！」

(どうする…どうすれば…)

「…衣」

「ひゃー！つて…衣和緒か」

衣がモモのことについて考えていると突然声をかけられた。思わず変な声を上げてしまう。顔を上げると驚巢の姿があつた。なにかアドバイスでもくれるのだろうか。

「抜け道はある」

「…え？」

「…それだけだ」

鷺巢は短い一言を言うのと背中を向けて去ってしまった。歩いていく方向からして控え室に戻るのだろうか。

抜け道とは一体どういうことだろうか。でも鷺巢の言うことだ。なにか意味が有るに違いない。時計を見るともうそろそろ対局が再開される時間だ。衣は対局室へと戻って行った。

「衣和緒！衣は大丈夫でしたか!？」

「うぬ。まあ大丈夫だろう」

鷺巢は控え室に戻ってすぐ透華に詰め寄られた。

元々衣の元には透華が行くつもりだったのだが、鷺巢がそれを押し切ったのである。あんな衣のミスは見たことがない。卓上でなにか起こっているのは明白だった。

それでも透華は心配そうに対局室に戻ってきた衣をテレビ越しに眺めていた。

後半戦が始まって数局…そろそろ南入というところで、ようやく衣は鷺巢の言ったことを理解した。

それは鶴賀学園が衣の上家にいること。つまりリーチさえしなければフリテンはない。

そしてここまでモモの打ち筋を見ていて、ある違和感があったがその正体も分かった。そしてそれこそがステルスモモの弱点となりうる。

後半戦に入つて一度も鳴いていない……

最初は点差もあり、面前で仕上げようとしているのかと思つていたが、どうにも様子が違う。

例えばこの東二局のこの形。この局は誰も和了ることなく流局し、衣とモモのみのテンプайとなりモモが開いた手牌である。

モモ手牌

（二三四456①①③④⑤中中） ドラ （中）

1筒、中のシヤボ待ち。とはいえモモがリーチしていた（流局時に気づいた）十一順目にはすでに中が切れていた。

一枚目はまだしも二枚目は流石に鳴くだろう。ましてその中はドラ。鳴いて満貫を確定させるのが普通だ。対子でなかった可能性もあるが二枚目の中が切られたのは直前の十巡目。その線は薄い。つまり……鳴かないのではなく鳴けないと衣は結論を出した。

よつて残りの対局で心がけることは3つ。

まず鶴賀からの出和了を捨て、積極的に鳴いて素早くテンパイに持ち込むこと。

そして枚数の少ない待ちを避け、なるべく多面帳にすること。

最後に面前でテンパった場合リーチをしないことである。

ここまで考えて衣は我に返り思わず笑った。かつて自分がここまで思考し、打ったことがあつただろうか。今までなら対策など考えず、能力に頼り力押ししていただろう。確かに感じる自分の成長ぶりをうれしく思った。

(衣の打ち筋が変わった…あいつなりに悩んで打っているのか…)

そう思ったのは解説の藤田。かつてプロアマ交流戦で戦った時とは見違えるようだ。

いままで見られなかった衣の柔軟な麻雀。今衣と戦ったら勝てるかどうか分からんな…と藤田は考えていた。もちろん簡単に負けるつもりはないが。

「ツモ。10000・20000」

衣手牌

(234四赤五五五) ツモ (六) 副露 (横867 ③横③③) ドラ (2)

南場は特に大きな和了もなく点数の移動も小さいまま進んでいく。鳴いての早和了勝負となりどうしても打点が低くなる。

衣の予想通りモモは鳴いたら目立つらしい。しかし鳴き場となり一人だけ面前で打つてはとて追いつかない。モモはステルスを捨て、鳴くしかなかった。鳴いた瞬間に捨牌も見えるようになった。

もうすでに南四局オーラス。最後は衣が和了。いつもの衣なら絶対にしないであろう二副露しての喰いタン。清澄を捲り切れなかったが仕方がない。これは団体戦だ。あとは鷲巢に託す。

副将戦終了

清澄 126600 (+11900)

龍門渚 116400 (+22200)

鶴賀学園 81000 (-120400)

風越女子 76000 (-113700)

『これで副将戦が終了…最も稼いだのはやはり龍門渚の天江衣！対して鶴賀学園が大きく後退してしまいました』

『清澄に狙われたな…あとツモ和了が異様に多かった』

『ついに決勝戦は大將戦を残すのみとなりました！まもなく始まります！』

藤田が気になっていたのはやはり龍門渚の五人目。いったいどのような打ち手なのだろうか。見当もつかない。優勝を決めるのはどの高校なのか。大將戦から目が離せないな…と二杯目のカツ丼をたいらげながら思っていた。

副将戦が終わって選手たちは挨拶を済ませる。

鳴き場となり、モモはステルスを捨て自力での勝負を強いられ原村和に軍配が上がっ

た形となった。

衣は対局終了後引き上げようとする原村和に話しかけた。

「ノノカ!」

「私…ですか?」

「今日はなかなか楽しかった。また日を改めて打ちたいんだ。打ってくれるか?」

「…ええ。また打ちましょう」

和は衣を快く受け入れた。衣は満面の笑顔を見せた。そのまま上機嫌で対局室を出て行く。しばらくして廊下で鷺巢とすれ違う。二人は言葉を交わす。

「…ここで負けるつもりは毛頭ない…勝ってくる」

「…うん。衣も全国にもう一度行きたい」

鷺巢は衣の言葉に満足したのか満足げに笑う。そして二人は別れた。衣は控え室へと向かい、鷺巢は対局室へ向かう。すべてが決まる大将戦がいよいよ幕を開けようとしていた。

牽制

清澄高校大将宮永咲は勇みながら通路を歩き対局室へ向かっていた。

この決勝戦を勝てば全国出場が決まる。清澄の皆は頼もしくここまでトップでバトンを渡してくれた。

咲にはどうしても全国に行きたい理由があった。

それは疎遠になってしまった姉、宮永照と再会し仲直りすること。照は団体戦二連覇中の全国ランキング一位の白糸台高校の先鋒を務めている。まず間違いなく予選を抜けてくるだろう。

対局室の入口まで連れてきてくれた副将の和と別れを告げる。

咲は2番目に対局室に着いたらしい。既に卓についていたのは猫耳が似合いそうな黒髪の少女。よろしくと挨拶してきたのは風越の大将池田華菜だ。

卓上には4枚の牌。うち一枚、西がめくられている。咲は残った三枚のうち右側にある牌をめくり、見えたのは東。起家ということになる。

咲は池田の対面の席に座って残り2人を待つ。

(勝つ…モモのためにも…)

そう意気込むのは咲に続いて姿を見せた鶴賀学園大将加治木ゆみ。

先程の副将戦で結果的に鶴賀学園は大きく失点し後退。ゆみとしても計算外のことであつた。モモの唯一の弱点をあれだけの確に突かれるとたまらない。

副将戦後しばらくして姿を見せたモモは泣いていた。ここまでチームが調子のかつただけに水を差してしまった責任を感じていた。

ただただ謝り続けるモモに対してよく頑張つた、相手がうまかつたんだと励まし、その後必ずまくり切つて優勝すると約束してしまつた。

だから…負けられない。

(ラス親か…ついでるな)

ゆみがめくつたのは北。ラス親はいろいろと都合がいい。点数に関係なく上がることででき、飛び終了という例外を除けば逆転不可能という状況にはならない。

対局室には自分を含めて3人。既に座っているのは風越の池田、清澄の宮永のはず。となるとまだ来ていないのは龍門渕のようだ。

対局者について考えていたゆみだったが、それは強制的に遮断される。突然恐ろしい寒気がゆみを襲つた。冷房も大して効いておらず寒くもないのに鳥肌が立つ。

例えるなら心臓を冷えた両手で鷲掴みされたような悪寒。

慌てて辺りを見渡すと咲が僅かに震えていた。どうやら彼女もなにかを感じ取つた

らしい。対して池田は微動だにせずこちらを不思議そうな目で見つめている。何かあったのかと聞こえてくるような目だ。大物なのか、ただ鈍感なだけなのか判断に苦しむ。

「…儂が最後か。そんなに遅れたつもりはないが…」

(こいつが龍門測の大将…か)

いつの間にか白髪の少女が入ってきていた。

恐らく悪寒の元凶がケタケタと笑いながら残された最後の椅子に座る。鷲巢は自動的に南家となった。

その嫌悪感は鷲巢が席に着く頃には収まったがゆみは嫌な予感が拭えず、本人は気がつかなかったが額には冷や汗がすつと流れていた。

(天江…逃げたな！そんな奴とは思わなかったし！)

西家の風越池田華菜は雪辱に燃えていた。昨年天江衣に倍満を振り込んでしまえばいい。転負け。大会後しばらく部に泥を塗ってしまった…と華菜は自責の念にかられていた。

キャプテンこと福路美穂子がいなければ重みに耐えかね、退部してしまっていたかもしれない。今年是天江を倒しキャプテンを全国まで連れて行く。それがキャプテンに対する何よりの恩返しだと思っていた。

しかし蓋を開けてみれば肝心の天江衣は副将。大将には聞いたこともない1年生が

入っていた。最初聞いたときは肩透かしを食らったような気分だった。しばらくして華菜は激昂した。

(清澄と龍門渕の1年坊!悪いが…大将戦は華菜ちゃんの大逆転と決まってるんだし!)

それぞれの思惑が交錯する中、親である清澄宮永がサイコロを回す。配牌も終わり大将戦が始まった。

大将戦前半戦東一局 親・清澄 ドラ・(4)

東家 清澄 126600

南家 龍門渕 116400

西家 風越女子 76000

北家 鶴賀学園 81000

『大将戦スタート!あと半荘2回で全国へ出場できるたつた1校が決まります!清澄高校が逃げ切るのか、はたまた他3校がまくることになるのか!』

『個人的には龍門渕に注目だな。どんな打ち手なのか分からん。ああそうそう…他にも愉快な打ち手があるな…』

それはどういう事でしょう?と実況が聞き返そうとする。しかし藤田は対局の方に目を向けてしまったので聞くことができなかつた。

あなた解説でしょ…と実況が心中で毒づく。ここまで解説中にカツ丼を食べたり、寝たりするのを我慢していたがこれが決め手となった。

来年は違う人を呼んでもらおう…と心に決めた瞬間だった。

七巡目

ゆみ手牌

〔234赤5678八八八⑥⑦⑧〕 ツモ 〔9〕

（張った…打点も高い上に三面待ち）

八萬切りでリーチをすれば高めでメンピン一通ドラ2の跳満。そしてなにより1、4、7索の三面待ち。ツモにも期待できる。

普段ならダメで放出を待つところだがこの点差である。前にでないと勝てないだろう。

「リーチ」打 〔八〕

加治木ゆみからのリーチ。トップを走っている宮永咲としては慎重に打たねばならないところだが…

その直後に咲はカンを宣言し、ツモってきた牌を加えて4枚3筒を晒す。その後咲は自山にある王牌の新ドラ表示牌をめくる。新ドラは6索となった。

これには華菜もゆみも困惑せざるを得なかった。

(カン…? ドラが1枚乗ったのはありがたいが…ツモられるのが怖くないのか?)

普通他家のリーチ後に暗槓をするのはリスクいな事この上ない。上がられた場合、新ドラに合わせ裏ドラも増え相手の打点を引き上げること直結する。

ましてや咲は親。ゆみにツモられでもしたら親かぶりを食らう。しかしこの東一局はゆみの思惑とは別にすぐに終わることとなる。

〔嶺上開花ツモ〕

咲手牌

〔一二三②④赤⑤⑥⑧⑧〕 ツモ 〔②〕 副露 〔■③③■〕

〔3200オールです〕

(…!)

〔嶺上開花だと…〕

(やはり…か)

滅多に見ることのない嶺上開花での和了。3200オールというのも聞きなれない。せいぜい七対子くらいだろう。

この和了を受け、華菜とゆみは薄気味悪い思いをする。その表情から少なからず動揺が見られる。

一方清澄の1回戦を直に見ていた鷺巣は咲にカンをされた時点で嶺上ツモで和了ら

れることを予測していた。その対局でも宮永咲は嶺上開花を何度か決めていた。流石に偶然では片付けられないだろう。

東家 清澄 137200 (+10600)

南家 龍門洩 113200 (-13200)

西家 風越女子 72800 (-13200)

北家 鶴賀学園 76800 (-14200)

大将戦前半戦東一局一本場 親・清澄 ドラ・(9)

「ツモ：500・10000は600・1100だ」

ゆみ手牌

(4赤5八八⑥⑦⑧) ツモ (3) 副露 (横二三四 横⑧⑥⑦)

続く東一局一本場はゆみが鳴きを駆使し、捨牌が二段目にもいかない五巡目にタンヤオドラ1をツモ和了った。

二度両面チーまでしての早和了。トップの清澄の親を流すためとはいえ若干急ぎすぎているとゆみ自身も自覚していた。

面前で打てばいくらでも高くなりそうな手であったのにあえて鳴いていった。それにはある事情があったからである。

鷲巢捨牌

〔34⑧四一〕

（龍門渚の捨牌が不気味すぎる…）

序盤から中張牌のみを切っている。順当に考えたらチャンタ系かピンズの混一色：しかしゆみにはあの役満が頭をよぎった。考えすぎなのかもしれないが、万一ということもある。

よつてこの局は打点ではなく早く和了ることだと決めたのだが：龍門渚に誘導されたのかもしれない。いささか強引な読みだったと少し後悔していた。

（迷いなく和了ってくるか。確か加治木といったか：なかなか鋭い）

鷺巣手牌

（二二九①⑨一九九東北白発中）

『龍門渚鷺巣、国士成就ならず！配牌から十種十牌だったんですが：惜しかったですね』
『イーシャンテンまで進んでいたな。清澄と風越は形になるまで時間のかかる重い手だった。鶴賀が全うに手を進めていれば先に和了れていたかもしれない』

藤田が気になっていたのは鷺巣の様子だ。大物手を逃したというのに一切顔に出さず手牌を伏せた。プロでも役満手を安手で潰されると僅かに顔に出るものだが：藤田はまだ鷺巣という雀士を掴めずにいた。

東家 清澄

136100（11100）

南家 龍門渚 112600 (1600)

西家 風越女子 72200 (1600)

北家 鶴賀学園 79100 (+2300)

大将戦前半戦東二局 親・龍門渚 ドラ・⑧

十巡目

(…：張った！それに高い！ツモれるかもしれないしリーチかけたいところだけどき…
 ここは確実に和了っておきたいね！)

華菜手牌

(三四赤五六七赤577⑤⑥⑦⑧⑧) ツモ (6) 打 (7)

この局は南家である池田華菜に大きい勝負手が入った。ソーズの嵌張が埋まり絶好のテンパイ。二、五、八萬の三面待ち。この流れに乗っていつもの華菜ならリーチと打って出ただろう。

だが華菜はダマを選択。リーチをせずともタンピンドラ4の跳満確定。高めで三色がついて倍満。華菜は和了率など考えるタイプではないがここはダマで和了を狙うのが最善だと考えたようだ。

咲手牌

(78五六七八八③⑤⑦⑧⑨) ツモ (4)

同巡咲もテンパイ…しかし両面待ちにとる五、八萬はどちらも華菜の当たり牌。実況も含め誰もが振り込むと思っていた。

(私の次のツモは…)

「リーチ」打 (7)

咲捨牌

{9西1一三白}

{①⑨4横7}

咲は両面にとらず8索の単騎リーチを選択。8索は捨牌に2枚見えていて、つまり地獄単騎待ち。別に華菜の当たり牌を読んだわけではない。

結果的にそうなっただけだ。それに咲には次巡和することが出来るという確信があった。しかしその直後咲にとって想定外の事態がおこる。

同巡

鷲巣手牌

{二二三三四2467②③④④} ツモ {二}

(4枚目の二萬か…ちようどいい。偶然条件も揃っておるしな…)

「カン」

(…!?)

(またリーチ後にカン!? って高めの筋が死んだし!)

鷲巢は二萬を4枚晒してカンを宣言、嶺上牌へ手を伸ばす。これに慌てたのは咲と華菜。次順ツモるはずだった嶺上牌を搔つ攫われてしまった。

華菜は華菜で高めの当たり牌が一気に4枚も消えてしまった。和了り目はまだ残っているとは言え辛い。

そして新ドラ表示牌は一萬。つまりもろ乗りで親のドラ4確定。

その後の鷲巢の嶺上ツモは8索。有効牌であり切るべき牌ではないが…なにを思ったのか手牌に入れることなくそのままツモ切った。

「ロ…ロンです!」

咲手牌 (8五六七八八③④⑤⑦⑧⑨) ロン (8)

その8索が咲の当たり牌。咲は露骨に安堵した様子で手牌を倒して晒した。裏ドラは六萬と中が見え、1枚乗ってリーチドラ2。5200となる。

鷲巢のこの局の目的は咲の和了系を見ることにあつた。鷲巢は思い通りに事が運んでいることに思わずにやけつつ咲に点棒を支払う。

そしてこの局を裏側から見ていた実況室や観戦室では困惑が広がっていた。観戦室では鷲巢の打牌について野次る者さえいる。鷲巢の真の目的が分かった者は極々少数であつた。

『ど……どうということでしょうか……私には今の局鷺巣選手に少し違和感を感じたんです
が』

『ああ……なるほどな』

どうやら藤田は理解できたらしい。そしてこの困惑は各高校の控え室にも広がって
いた。

せつかくの親番でドラ4が確定したというのに……まるで差し込んだようにも見えた。

しかし差し込みは飛び寸前の相手に対してやったり、大物手を潰す為などにするもの
だ。この局面でトップの清澄に差し込む必要性を感じない。

「なんですのその打牌はー!」

「衣は分かったぞ……衣和緒の狙いが。まさかそんなことをするとは」

「どういうことですよの衣!」

もちろん龍門渕高校も例外ではない。控え室で再び透華が喚いていた。その中で衣
が鷺巣の目的を察していた。当然龍門渕一同が衣に詰め寄る。

衣は少し息苦しそうだつたが落ち着いて説明に入った。

「う、うむ。つまり衣和緒は清澄の嶺上開花が偶然か必然かを見極めにいったのだ」

「……?」

「えーと……例えば……」

その言葉だけでは理解できなかったらしい。透華を始め、一同の頭の上に？マークが浮かぶ。衣は簡単に例を上げることにした。それは東一局、咲が嶺上開花で和了った局である。

「東一局の清澄の和了系はこうだった」

咲手牌

（一 二三 ②④赤⑤⑥ 888） ツモ （②） 副露 （■③③■）

「これを見て透華はどう思う？」

「どうって…ナンセンスですわ！リーチが掛かっているというのに暗槓だなんて…」

前述の通り他家のリーチ後の暗槓はリスキーである。それにこの形暗槓する前から好形で張っていた。

（一 二三 ②③③④赤⑤⑥ 888）

1、2、4、7筒の四面待ち。十分ツモ和了に期待出来る。

しかしここでリーチをかけていたらその後ツモってきた3筒が待ちが変わるため暗槓出来ず、ツモ切りするしかなかった。

つまり近いうちに3筒をツモリ、カンをして2筒単騎を引いてくる確信があったのだろう。だがこれはあくまで想像だ。確実にとは言い切れない。

「確信を持つためにこの局で衣和緒は無理やり暗槓をしたんだ…と思う」

「はあ…」

しかしこのまま鷺巢が和了ってしまったえば咲の手を見ることは出来ない。なので差し込んででも和了らせる必要があった。

「それに次の清澄のツモは衣和緒の山だ。余り褒められた行為ではないが…恐らく覗くだろう」

「覗く…?」

「よし！龍門渕から直撃だ！」

「咲ちゃん絶好調だしえ！」

清澄高校の控え室。ここでは唯一の男子部員、須賀京太郎と独特の語尾で話す先鋒、片岡優希がテレビを見つつ盛り上がっていた。

欲しかった龍門渕からの直撃で差がかなり広がった。しかしそれを遠目に見ていた中堅竹井久と副将原村和は素直に喜べずにいた。

どうにもここまでうまくいきすぎている。

「どう思う?和」

「今の局…明らかにおかしいです。わざと振り込んだようにも見えました」

久は和に尋ねる。すると自分と同じ意見が返ってきた。

まずあの形からカンはいないだろう。あのカンは面子を潰していた。234の三色の可能性も潰している。そして8索切りも普通しない。

まるで咲を値踏みしているかのような打牌だった。

(気をつけなさい咲……何か不吉な予感がするわ……)

(あれ……わしのセリフは……?)

ありません。

対局室では衣の予測通り場の山を崩す際、鷺巢が次の咲のツモを覗き見る。(一八)が転がった。

やはり先程の咲の手牌から考えるに暗槓出来る牌。鷺巢は確信を持った。咲は槓材がどこにあるのかを把握しており、嶺上牌が見えている……と。

(なるほど……確かにその力は強力だが……やはり小娘だ。まだまだ未熟……迂闊過ぎる)

鷺巢から見れば咲は迂闊としかいいようがなかった。自身の力をこんなにも早く露呈してしまった。まだ女子高生なので仕方ないのだが。

特に東一局。あれがなければ鷺巢は確信とまではいかなかっただろう。分かっしまえばこつちのものだ。いくつか対策はある。

(なんだろう……この違和感は)

咲は咲で違和感を感じていた。一番都合がいい龍門洩からの直撃をとり差は3万点を超え、安全圏といつてもいいだろう。順調そのものだ。しかしなにやら嫌な予感がしていた。

北家 清澄 141300 (+5200)

東家 龍門洩 107400 (-15200)

南家 風越女子 72200

西家 鶴賀学園 79100

大将戦前半戦東三局 親・風越 ドラ・〔南〕

七巡目

鷺巣手牌

〔三四五3赤56788③④⑤⑥〕 ツモ (8)

(張^{テン}つたか…待ちはよくないが問題ない…ここはリーチで…)

リーチを掛けようとした鷺巣だったが、千点棒を取り出そうとしたその時手牌からあ
る鼓動を感じ取る。リーチは待てという手牌からの声。

もつと高めが望めるのだろうか。しかしここからの手替わりなど赤ドラの入れ替え
くらいだ。それを待つのは現実的ではないだろう。

(どういうことだ…だががかし…)

ここはリーチを自重。打6筒で3、4索のテンパイにとった。鷺巢自身は理解しきれ
ていなかったが手牌からの声に従う。

『鷺巢選手リーチするような素振りを見せましたが…思いとどまったんでしうか』

『高めで和了りたいんじゃないか…4索なら三色がついて満貫だからな』

藤田が最もらしい事を言う。確かにこの手4索で和了れば、タンヤオ三色ドラ1と満貫。ダメで放出を待つのも正解だろう。しかしこの藤田の解説は実のところ全くの的外れであった。

「ポン」

咲が対面の華菜から切られた2索をポン。鷺巢に再びツモが回ってくる。ツモ牌を盲牌した途端鷺巢は全てを理解した。

(カツカツカ…そういうことか…)

「リーチ…」 打 (5)

(赤切りリーチ!?)

鷺巢手牌 (三四五367888③④⑤■)

ここで鷺巢今日始めてのリーチ。実況席からも何を引き入れてのリーチなのか、鷺巢の手に隠れよく見えない。なぜわざわざ三色を崩してリーチを掛けたのか藤田も解説しようがなかった。

同巡

ゆみ手牌 (南南南⑥⑦⑧1346) ツモ (5) 打 (南) 副露 (七横七七)

(南は…大丈夫か)

ドラの南は序盤に1枚切られている。例外を除けば振り込むことはない。ゆみは(南)暗刻を切り崩し、役なしのテンパイに受けた。

普段なら1を切るべきところだが、ゆみには試してみたい事があった。

そして次巡咲は2索をツモる。槓材であり嶺上開花で和了れると確信していた。

「カン」

咲は加槓を宣言し2索を晒す。嶺上ツモに手を伸ばそうとするがそれを阻むように卓上に槍が降り注ぐ。もちろんイメージである。ゆみは待っていたとばかりに自分の手牌を倒した。

加槓された牌が当たり牌だった場合一つの役がつく。それは…

ゆみ手牌

(南南⑥⑦⑧13456) ロン (2) 副露 (七横七七)

「その嶺上牌取る必要はない」

「え…?」

「…聞こえなかったか。槍槓だ。そのカン成立せず…「クツクツク…」…なに?」

「…お主こそ聞こえておらんかったようじゃの」

「それはどういう…!?!」

鷲巢からの声につられ、ゆみは鷲巢のほうを向く。そして手元を見てある事実に気づいた。

鷲巢手牌

(三四五367888③④⑤1)

鷲巢の手牌も倒れていた。今大会はダブルロンは採用していない。つまりー

「頭ハネ…リーチ一発槍槓…裏3で跳満12000。その和了成立せず…カツカツカツ」

「その手で赤5索切りリーチだと…」

鷲巢の手が裏ドラをめくる…当然のように7索が見えた。そしてゆみをからかうように口上を真似する鷲巢であった。

『なんと珍しいことが起こりましたー! 槍槓のダブルロン! 上家である龍門洩鷲巢選手の和了のみ認められます!』

『2人とも狙っていたな。途轍もない対応力だ。高校生とは思えん』

鷲巢はタンヤオ三色ドラ1を捨てて役なしリーチ。ゆみは自風のドラ暗刻を切り役なしテンパイにとつたことになる。偶然ならそれまでだが明らかに狙っていた。自分

にあれが出来るかと聞かれても難しいと言わざるを得ないだろう。

藤田は思わず身震いする。ここまでレベルの高い打ち合いが地区予選で見られるとは思わなかった。

大将戦前半戦東三局終了時点

西家	清澄	1 2 9 3 0 0	(1 1 2 0 0 0)
北家	龍門洩	1 1 9 4 0 0	(+ 1 2 0 0 0)
東家	風越女子	7 2 2 0 0	
南家	鶴賀学園	7 9 1 0 0	

この和了で清澄と龍門洩との差が1万点を切った。対局はまだまだ始まったばかり。一体この勝負はどこに向かうのだろうか。

激流

(ぐっ…頭ハネだと…)

東三局が終わった対局室はざわついていた。その中でゆみは驚愕を隠せなかった。まさか自分と同じことを考える輩がいるとは。しかもなんの偶然か同じタイミング。

そのせいで清澄の加槓を読みきった会心の和了は認められずに終わってしまった。だが…とゆみは下家に座る清澄宮永咲に視線を移す。やはり目に見えて動揺しているようだ。これでゆみの目論見通りしばらくはおとなしくなってくれるだろう。

この点については結果的によかったといえる。

(こいつら…今のを狙ってやったのか!?理解できないって!)

華菜もその例外には漏れず、今の和了に困惑せざるを得なかった。

そもそも檜積など狙って和了る役ではない。まれに多面待ちなどで偶然起こる程度だ。しかしこの2人の和了系は両方とも好形の待ちを捨てての嵌2ソウ。故に偶然とは思えなかった。自分には到底真似出来ないだろう。

(でもでも…華菜ちゃんには負けられないし!それにここまで手が入っていない訳じゃない…いけるはずだし!)

大将戦前半戦東四局 親・鶴賀学園 ドラ・(七七)

南家 清澄 1 2 9 3 0 0

西家 龍門洩 1 1 9 4 0 0

北家 風越女子 7 2 2 0 0

東家 鶴賀学園 7 9 1 0 0

(さあ…親番だ。ここで稼がなければ…)

ゆみにとつてはようやく回つてきた親番。トップとの差は広がり5万点を超えている。出来ることなら連荘をして差を縮めたいところだ。それにはとにもかくにも配牌に尽きる。

配牌は言うまでもなくその局の行方を決めるものである。字牌等が多く手が重ければ和了ることが困難になるし、逆に中張牌が多いなどの軽い配牌なら早々に張ることができるだろう。こればかりは人の手ではどうする事も出来ず、神に祈るしかない。最もそんな常識を覆す者も少ないながらもいるのだが。

そしてこの局ゆみには後者である軽い手が入ってきた。

ゆみ配牌

(赤五六六七3569②③④⑦中中) 打 (9)

(よし…これなら…)

序盤に中を鳴ければ理想的だ。ドラも2枚ある。中を対子落とししてタンピン三色に向かう手もなくはないがここは確実に上がりた。とりあえず不要牌である9索を切りどちらにでも対応できるように構える。

「リーチだ…」

鷲巢捨牌

〔北119横西〕

しかし五巡目、無情にも卓に供託の千点棒が投げ込まれる。声の発生源は鷲巢。先程の和了で波に乗りかけている事を証明するかのような早々のリーチ宣言。

（早すぎる…）

ゆみ手牌

〔赤五六七2356②③④〕 副露 〔中横中中〕 ツモ 〔白〕 打 〔白〕

一方のゆみ、中を一鳴きしたものの雀頭が定まらずテンパイにはこぎつけていない。しかし有効牌は非常に多く、そこそこ打点も見込めるイーシャンテンなのだが…それ以上に鷲巢が早すぎた。

こちらもテンパイしたいところだったが残念ながら無駄ツモ。ゆみはツモ切りするしかなかった。

「ツモ」

そして一発ツモこそなかったものの、二巡後鷺巢はあつさりと和了牌を引いてきた。鷺巢は一色に染まった手牌を晒す。残念ながらゆみはたった今テンパったところまで一手遅れだった。

鷺巢手牌

（一 一 一 一 二 三 三 四 五 六 七 八 九九） ツモ （四）

（こんな浅い巡目でメンチン!? 高め九蓮宝燈じゃないか…）

一四九萬待ちの高め九蓮宝燈。しかも捨牌がほぼ手出し。つまり自然とこの形にたどり着いた事に他ならない。恵まれた配牌からすすいっと有効牌が入り、和了った経験はあるにはあるがここまでの打点となると珍しい。

そんなゆみの不幸中の幸いなのが、裏ドラに（北）が見えリーツモ清一色ドラ1の倍満止まりだったことだろう。倍満に止まりという表現を使うのもどうかと思うが…裏ドラが乗って三倍満になってもおかしくなかった。それだけの気迫が今の鷺巢にはある。

東三局の槍槓での和了も裏ドラが3枚乗り満貫以下の手が跳満に化けた。事ここに至りゆみは気づいた。

（清澄が怯んでくれれば打ちやすくなると思っていたが違う。この卓の最大の障害は清澄ではない…）

鷺巢は思惑通りに事が進んだことに思わずにやける。これこそ鷺巢が考えた宮永咲の対策の一つである。ただ単純に咲に楯材が揃うまでに和了ってしまえばいい。言ってしまうえば簡単だが、これが割と難しい。

まず前提として素早く和了するには配牌に恵まれていなければならない。そして鳴きを加えなければならぬだろう。だが鳴いた状態から高打点を狙うのは難しい。しかしそんなセオリーなどお構いなしに和了るのが鷺巢という怪物である。

この鷺巢の倍満で龍門洩が先鋒戦以来のトップに立つ。そして東場が終了、南場へと移った。

南家 清澄 1 2 5 3 0 0 (1 4 0 0 0 0)

西家 龍門洩 1 3 5 4 0 0 (+1 6 0 0 0 0)

北家 風越女子 6 8 2 0 0 (1 4 0 0 0 0)

東家 鶴賀学園 7 1 1 0 0 (1 8 0 0 0 0)

大将戦前半戦南一局 親・清澄 ドラ・(6)

十四巡目

(やっとできた…さつきは槍槓されちゃったけど…)

咲手牌

(西西西西④④④赤⑤⑥2346) ツモ (5)

「カ…」

この局は珍しく鳴きも殆ど入らないまま終盤を迎えていた。その中でようやく咲がイーシャンテンに漕ぎ着ける。咲が感じ取った今回の嶺上牌は7索。つまり嶺上開花で和了る準備が整ったということだ。咲は西を四枚晒し槍槓の心配がない暗槓をしようとしたが、その手は寸前のもので止まる。何やら不穏な雰囲気の不意に襲ったからだ。咲は反射的に上家のゆみの捨牌に目を向ける。

ゆみ捨牌

〔④五②4⑨四〕

〔5⑧発七2東〕

〔③〕

隠す気のない国士無双の捨牌。萬子筒子索子と満遍なく切られている。暗槓は槍槓の心配がないといったが厳密に言えば間違っている。この大会では国士無双に限り暗槓での槍槓が認められている。

それに見渡しても4枚切られているヤオチュウ牌が存在しない為、既に張っている可能性がある。振り込んでしまえば役満となり、32000点の大支出。トップ争いから大きく後退してしまうことになる。

（うっ…）

咲の頭に先程の槍槓がよぎる。万一だが張っているかもしれない：振り込むかもしれない：と咲は幻想に囚われていた。少考した後、咲は暗槓をせず4筒を切った。いや暗槓出来なかったというのが正しいかもしれない。この場面で西を暗槓しないという事はすなわちもう和了り目はない。勝負出来ないと考えオリを選択した。

(イーシャンテン変わらずか：)

ゆみ手牌

(一九九①①⑨⑨ 東南北白発中) ツモ (3) 打 (3)

結論を先に言うとうゆみはまだ張ってはいなかった。咲は親番での貴重な和了を逃したことになる。しかし決して咲の判断は間違っていない。この局面で役満に振り込むわけにはいかないし、余計なリスクを背負う必要もない。

結局そのまま流局となる。

「テンパイ」

ゆみ手牌

(一九九①⑨①⑨ 東南北白発中)

テンパイを宣言し、手を倒したのは加治木ゆみ。他の3人は手を伏せる。咲は予想通りゆみが国士無双を張っていて振り込まなかったことに安堵の表情を浮かべる。親が流れてしまったがまだ龍門渕との点差はそう離れてはいない。それに次は龍門渕の親

であり、ツモで親かぶりを食らわせることだってできる。

咲の打ち筋は基本的に嶺上開花を軸としたツモり麻雀である。大明槓の責任払いという例外を除けば、狙った相手から直撃を取る機会は少ない。よって咲にとつてまくりたい相手が親番の時こそがチャンスなのだ。ここは気を引き締めないと…と思ひ直した咲だった。

東家 清澄 1 2 4 3 0 0 (―1 0 0 0)

南家 龍門洩 1 3 4 4 0 0 (―1 0 0 0)

西家 風越女子 6 7 2 0 0 (―1 0 0 0)

北家 鶴賀学園 7 4 1 0 0 (+3 0 0 0)

大将戦前半戦南二局 親・龍門洩 ドラ・(⑥)

鷺巢配牌

(一 二 九 九 六 七 九 九 ⑨ ⑨ ⑨ 北 発) ツモ (5)

『龍門洩鷺巢選手、親番で好配牌！既にイーシャンテンです！他家を突き放し、トップ独走となるでしょうかー』

『ドラはないが三暗刻、三色同刻が狙える。ツモがよければ四暗刻になるかもしれ…』

藤田が言葉を詰まらせたのには訳がある。鷺巢の第一打が異質であったからだ。この手ならまず孤立牌の北や発辺りを切っていくだろう。だが鷺巢が選んだ牌は…

(親番だというのに随分と引け腰だな…小娘…)

鷺巢は咲の打ち筋を見ていて物足りなさを感じていた。まるで全力を出しきれていないように見える。僅かながらも自分と打ち合えるかもしれないと思っただけに残念だと思っていた。

それというのも南一局、鷺巢はゆみの捨牌から早々に国士無双を狙っている事を察知していたが、あえて咲の出方を見ようと様子見に徹していた。しかし危険牌を引いたのか途中から国士無双に対して当たる心配のない中張牌の連打でのベタオリ。

槓をする素振りを見せたことからよほど先程の槍槓を引きずっているようだ。鷺巢はここから7索を切り出していった。鷺巢にはこの手の最終系が見えている。

(いつまでももたついているようでは…儂が和了るぞっ…和了つてしまうぞっ…！)

七巡目

ゆみ手牌

(⑤⑥⑥⑥3567四五六) 副露 (中中横中) ツモ (一)

(く…さっさと鷺巢の親を蹴りたい時に…)

現状トップを走る龍門渕の親。ここで連荘などされたら取り返しのつかないことになる。ゆみは打点度外視で素早く手を作ろうとしていたが、ツモってきたのは全く手牌に絡まない一萬。比較的有効牌も多いイーシャンテンなのだが仕方がない。当然ツモ

切りする…と同時に対面、つまり鷺巢からの声が響く。

「ポン…」

鷺巢手牌（他家視点）

{ ■■■ } 副露 { 二横一一 } 打 { 一二 }

発声後鷺巢の手が無造作にゆみの切った一萬を拾う。同時に二萬を切り出した。この鳴きにゆみは何か違和感を覚える。ヤオチュウ牌のポンはタンヤオなどが消え、役は相当限られてくる。手の内を晒すような真似をなぜしたのか。

この鳴きでまず考えられるのが白などを暗刻で抱え、ドラで打点を稼ぐいわゆる役牌バツク。次点でトイトイだが…捨牌を見るに考えづらい。チャンタ系も考えられるが鳴いてまで作るメリツトがない。ドラ暗刻ならまだ分からなくもないが今回のドラは6筒でありチャンタには絡まない。これもなさそうだ。…というより意味が分からない捨牌となっている。

（龍門涑の鷺巢…）ここまで和了を見るに打点が高い面前派だと思っていたが、何を企んでいる？

鷺巢捨牌

{ 765北発6 }

{ 一一 }

手出しで5、6、7索の順子落とし。その後これも手出しで字牌を切っている。これではどういう手牌なのか分からない。一萬鳴きで二萬が切られるという事は対子手である可能性が濃厚だが…と考えている最中ゆみは場全体の捨牌を見渡し、ある小さな異変に気づく。

いつもなら自分の手牌に気を取られ気がつかなかつたでだろうその異変。一回立ち止まつて考えたからこそ気づくことができた。そしてそれはゆみにいくつかの可能性を提示するものとなった。

ゆみ捨牌

〔東白西発②二〕

華菜捨牌

〔北北12⑧三〕

咲捨牌

〔北白②57〕

自分の手牌や捨牌も含めても殆ほとんど老頭牌ロウトウハイが場に見えない。老頭牌というのは2、3、8を除いた…つまり1、9の数牌のことである。対子しか出来ない字牌と違い順子は作れるものの、言うなれば端っここの牌。使いづらくタンヤオ等の邪魔にもなるため序盤から切られ易い牌と言える。

これらの理由から七巡目で場にほぼ見えないのは少しおかしい。勿論山に眠っている可能性もある。しかしゆみは鷺巢の手に固まっていたとしたら…と最悪の場合を考える。まさかとは思うが、槍槓を頭ハネしたりした規格外のこいつならやりかねない。(その場合の本命は役牌を抱えたトイトイ混老頭…あるいは…)

いやまだ張ってはいないはずだ。それまでに自分が和了ってしまったえばそれで終わり。鷺巢の手は水泡に化す。とにかく今は張ることだ…と思い直した。

結論から言うところのゆみの推理、殆どの中していた。ただ一つ間違っていた事柄がある。それは…

鷺巢手牌

(九九九九⑦⑨⑨⑨) 副露 (一横一一)

鷺巢は既に張っている…高めトイトイ三暗刻三色同刻の親っパネ。変則78筒待ちとなる。

そして同巡に咲が鷺巢の安めの当たり牌8筒を切るが、鷺巢はこれを無視。何事もなかったかのように平然とした様子で次のツモ牌へ手を伸ばす。

当然のこの和了見逃しの意図が掴めなかったのは…

「なんで龍門測今の咲の8筒和了らないんですか？当たってますよね？」

清澄高校の控え室で優希とじゃれあっている清澄高校男子部員の須賀京太郎だった。実はこの男麻雀を始めてから間もない為セオリーなどを知らない。ある意味場違いな男であつた。

「当たつてはいるわよ？でも8筒じゃ和了つても鳴き純チャンのみ。満貫にすら届かないわ。トツプの親とは言えうまみがないのよ」

対面のソファーに座る久が説明に入るが、和がそれに…と継ぎ足すように喋る。

「この手…一手挟むだけで爆発的に打点が上がります。私でも見逃しますね。高めの7筒なら和了りしますが」

「あれか…私も和了つたことがないじえ…ちなみに私なら7筒でも見逃すじよ」

和と優希の言うことが理解出来ないのか右往左往する京太郎。そんな姿を横目で見つつ、久はテーブルの片隅に注いであつた紅茶を口にするがすっかり冷め切つていた。

「どうやらすっかり忘れてしまつていたらしい。そこまでこの対局に見入つているという事だ。」

（笑い事じゃないわ…もし龍門渕にあの牌が入つてきたら…咲が振り込む可能性が高い…）

久は自然と胸の前で手を組み祈るような姿勢を取る。どうか鷲巢がツモらないでくれ…と。この局が何事もなく無事に終わつてくれ…と。心のどこかでは無駄な行為だ

と分かっていった。しかし今の久には神に祈る事くらいしか出来なかったのである。

(じゃからわしのセリフは…?)

ありませんって。

場所は戻って絶賛闘牌中の対局室。竹井久の祈りも虚しく鷺巢はツモ牌を盲牌し、思いつきの理想の牌を引いたことに口角が吊り上がる。やはり神は自分に味方しているようだ。

鷺巢手牌

(九九九九⑦⑨⑨⑨) 副露 (一横一一) ツモ (①)

(儂なら当然のツモ……イーピンっ……!)

鷺巢、ノータイムで7筒切り。つまり鷺巢の手、跳満どころではない。

鷺巢手牌

(九九九九①⑨⑨⑨) 副露 (一横一一)

『龍門瀏鷺巢選手なんと1筒待ちの清老頭テンパイ!これを和了れば大きく差を広げることにあります!』

『殆ど無駄ツモなしでのテンパイ…配牌からの順子落としも結果的に見れば正解と言わざるを得ない。字牌から切っていたら風越に6索あたりを鳴かれてツモ順が変わって

いただろう。まるで鷺巢に牌が吸い寄せられていくようだった』

『そんなオカルトな…』

実況は笑っているが藤田は決して冗談で言ったわけではない。鷺巢には常人にはない何かを持っているように見える。そして見ただけで分かる運の良さ。

この手を鷺巢が和了りでもしたら、一気に波…それも途方もない大波に乗るだろう。藤田は直感的に察していた。

(…)は合わせ打ちだし…) 打 (⑦)

池田華菜は鷺巢に合わせて7筒切り。この7筒に下家であるゆみが反応する。鳴いてドラ切りでテンパイとなる。なるが…問題はドラが通るかどうか。ゆみの考えはあくまで想像の枠を出ない。鷺巢が平凡な役牌バツクの可能性も十分ある。

(…)で怯んでいては…結局和了られてしまう)
「チー…」

ゆみは5筒6筒を晒してチー。捨牌にはドラである6筒が切られた。他家から見れば2副露してドラ切り。殆どテンパイを宣言しているようなものである。

そして図らずしもこのたった一つの鳴きがこの局の命運を決めることとなった。(鳴いてドラ切り…テンパイか。じゃが…儂の方が早い)

順番を迎えた鷺巢はツモ牌に手を伸ばす。鷺巢は盲牌をし、思わず顔を歪める。感じ

取ったのは1筒ではなく隣の2筒。ツモれると殆ど確信していた鷺巢は内心荒れながらも顔には出さず2筒をツモ切りする。

鷺巢の道家である華菜のツモは1筒。華菜の手牌には絡まない。華菜はまず捨牌に目を向ける。2筒は鷺巢が直前に切ったのを加え、既に3枚見えていてワンチャンス。(見たところ問題なさそうだし…もう手牌に使えないだろうし)

華菜はそのまま1筒をツモ切り。鷺巢は切られた1筒を見た瞬間、目をぎらつかせて手牌を勢いよくガラツ…と倒した。

「ロン…」

鷺巢手牌

(九九九九①⑨⑨⑨) 副露 (一横一一) ロン (①)

(トイトイ…いや…チ…清老頭…?)

「ククク…48000て…」

鷺巢は言いかけていた点数を止めざるを得なかった。対面から手牌の倒される音が聞こえたからだ。鷺巢は何事か…と視線を加治木ゆみの方へ向ける。ゆみは手牌を倒しつつ、少し疲弊した表情を浮かべていた。

「悪いな…その1筒、私も当たっている…中ドラ1。頭ハネだ」

ゆみ手牌

〔①567四五六〕 副露 〔横⑦⑤⑥〕 中中横中 ロン 〔①〕

『会心の清老頭は本日2度目の頭ハネ！和了は認められません！残念ながら水泡と化しましたー！』

『私も役満が安い手で流されたことはあるが…あれは腹が立つな。思わず手牌を相手に投げつけそうになってしまったな…』

『完全にマナー違反じゃないですかそれ…』

『冗談だ冗談…』

（た…助かったし…）

九死に一生を得た華菜は素早くゆみに千点棒2本を差し出す。一方和了ることができたゆみはその点棒を受け取る。安堵の様子は見られず、人知れず冷や汗を流していた。今の和了が余りにもストレスだったことに気づいていたからだ。先程の池田華菜が切った1筒は確かツモ切り。これが意味するものは…

（私が鳴かなければツモられていた…清老頭を…）

ゆみは知る由もないことだがあと一つ危なかつた事項があつた。それは顔を若干青くしている咲のみが理解していた。

咲手牌

〔四①②③③③2388南南南〕

一見すると何の変哲もない手牌だが…咲が感じ取っていた次のツモは3筒。つまり槓材である。さて3筒を槓材とみなした咲が次に取る行動はなにか。答えは簡単、1筒2筒の辺張払いである。

華菜が振り込まず自分にツモ番が回ってきていたならば、ほぼ確実に自分が振り込んでいただろう。そして席順で鷺巢の和了が認められる。親の役満48000点。余りに大きいダメージとなっていた。

この確固たる事実が咲をさらに萎縮させることになってしまった。

(やってくれる…こうでなくては面白くない…)

そしてこの手をものに出来なかつた鷺巢。さぞかし荒れているのかと思つたが、ゆみに対して手応えを感じていた。思い返せばこの加治木ゆみ、なかなかうまい麻雀を打ってくる。そしてなかなか感覚も優れている。鷺巢の興味が咲からゆみに移ろうとしていた。

(しかしその中ドラ1といい、ドラの6筒といい、役満を潰されたといい…あの時と共通点が多すぎる。ちつ…気に食わん)

…訂正しよう。あの時の苦い記憶が蘇り、多少は堪えているようだ。

北家 清澄 1 2 4 3 0 0

東家 龍門測 1 3 4 4 0 0

南家 風越女子 65200 (12000)

西家 鶴賀学園 76100 (+2000)

大将戦前半戦南三局 親・風越女子 ドラ・〔北〕

(とにもかくにも鷺巢の親は流せた……ここから稼がなくては……)

ゆみが決意を新たに奮起する。しかしそれをあざ笑うかのように鷺巢から耳を疑う声が聞こえた。鷺巢の第一打である4索は捨牌に縦に切られず横向き。同時に卓上に千点棒が投げ込まれる。

「リーチ！」

鷺巢捨牌

〔横4〕

(ダブルリーチだと……さっき役満を蹴ったばかりじゃないか……)

流れの話になるが大きな手を和了り損ねた後の配牌は一般的には落ちると言われている。デジタル派は真つ向から否定するだろうが。しかし鷺巢はそんな事知らないと言わんばかりに手を引き寄せてくる。

華菜はこのダブルリーを恐れたのか比較的 안전한字牌を切っていく。

(振り込みが怖いのは分かるが……せめて鳴けるところを切って欲しいものだ……)

ゆみ配牌

（二三六七23669⑦南白白） ツモ （中）

（ここあたりか…）

ゆみは孤立しており尚且つ他家が鳴きやすいであろう7筒を切る。しかし鳴きの宣言は聞こえてこない。咲は少考の後、鷺巢の唯一の現物である4索を切り出していった。ゆみにとって咲は下家であるため鳴くことは出来ない。

（く…まずい…鳴きが入らないまま鷺巢のツモ…）

ゆみが危惧していた通り、鷺巢はツモ牌を切らず卓に軽く叩きつけ、手牌を倒す。そしてはつきりした声でツモったことを告げる。

鷺巢手牌

（二三三四四五12377北北） ツモ （北）

「裏が西…3枚乗って三倍満…」

（高い上に裏まで乗せてくるのか…）

かつちり裏ドラも暗刻で乗せ、ダブリー一発ツモ北ドラ6。きつちり11翻で三倍満。早すぎる和了りにたまらないのは華菜。何も出来ずに三倍満の親かぶり。そんな馬鹿な話があるかと卓に突っ伏す。誰もがその気持ちがかかるため攻める者はいなかった。

西家 清澄 118300（16000）

北家	龍門湊	158400	(+24000)
東家	風越女子	53200	(-112000)
南家	鶴賀学園	70100	(-16000)

「さあ南^{オラ}四局だ。鶴賀の。賽を振れ」

(くっ……このままでは飲み込まれるぞ……激流に……)

鷺巣がペースを握ったまま前半戦南^{オラ}四局を迎える。他3校はどう対処していくか。そこが勝負の観点になっていた。

異端

『さあいよいよ前半戦南四局オーラスを迎えます！藤田プロはどう見ますか？』

『まあ流れは間違いなく龍門渕にあるな。他3校はそれにどう対応するかが勝負のポイントになるだろう。それにしてもさっきの頭ハネは見事だった。鶴賀の部長……うまいな』

清老頭を蹴られたのにも関わらず次局配牌時点でテンパリすぐさま和了ったことが何よりの証明である。このままでは間違いなくこのオーラス、龍門渕が制するだろう。

龍門渕鷲巢のツモを鳴いて飛ばすなど清澄、風越、鶴賀の共闘があれば多少は揺らぐかもしれないが難しいと藤田は見ていた。風越池田華菜はそういうタイプではないし、清澄の宮永咲も何やら怯えたような表情を浮かべている。あれでは気の利いた打ち方は期待できない。

『鶴賀学園の部長は中堅の蒲原です。さてその鶴賀学園の親で南四局オーラスの賽が回されました！』

『え……あいつが部長!?マジ!?』

大将戦前半戦南四局 親・鶴賀学園 ドラ・(5)

南家	清澄	118300
西家	龍門渕	158400
北家	風越女子	53200
東家	鶴賀学園	70100
ゆみ配牌		

(①①三赤五八九六白白発発中西) ツモ (中) 打 (西)

(なんだこの配牌は…この流れで来るものなのか…いやいや何を考えているんだ私は)

ゆみには役満手である大三元の種…三元牌の対子。それが三つとも入ってきた。あまりの好配牌に逆に薄気味悪いものを感じてしまう。何か落とし穴でもあるのではなにか…などとしばらく深読みしていたゆみだったがいやいや…と思いつ返した。

自分でも考えすぎだと思う。これは素直に喜ぶべき事である。まして親番で大三元…三元牌のどれか一つを暗刻にしたいところだが…役満を狙えるのは大きい。そうではなくとも小三元ドラ2などの跳満は固い。序盤に鳴ける事を期待してゆみは唯一浮いている字牌である西を切り、改めて周囲の様子を伺う。

上家である池田華菜は露骨に苦い表情を浮かべており、見ただけで配牌が悪いのだからと判断できる。下家に座っている宮永咲は心ここにあらずといった様子で配牌に目

を向けていた。そして問題は対面に座っている鷺巢。対局が始まってからというもの何かを企んでいるかのような邪悪な笑みを崩さず、手がいいのかどうかすら分からない。

『加治木選手に大三元を匂わせる配牌が入ってきましたー！これは大チャンス！』

『万一大三元ともなれば48000点でさらに連荘になる。一気に勝負が分からなくなるな。問題は残りの三元牌の在処だがどこにあるのや…なんだと!?!』

『えー鷺巢選手…先程からセオリーに反した不可解な打牌をしています…どういこうとでしようか』

その問いに解説である藤田は答えることが出来なかった。柄にもなく藤田が叫んでしまったのは龍門洩、鷺巢の配牌と第一打にある。鷺巢の第一打は白。役牌とはいえず牌であり違和感はない。鷺巢の配牌を見るに切られる訳がない牌。百人が百人とも捨牌候補にすら挙げない牌だ。それゆえに実況はもちろん藤田でさえ鷺巢の狙いが読めなかった。

この打牌にも何か理由があるのだろうか。そして当然この白をゆみが見逃すはずもない。

(一打目で出るとは幸先がいいな)

「ポン」 打 (九)

(役牌を一鳴きか…連荘させるわけにはいかないし!)

(特急券…早和了かな…)

ゆみは白を鳴き、九萬切りして辺張払いを選択。役牌を一鳴きしたこの時点で池田華菜と宮永咲の2人は早和了りしての連荘狙いだと思っており、まだ警戒はしていない。そして鷺巣は次巡も白を切った。それから考えられる役はタンピン三色などがあるが…ゆみはある一抹の不安に駆られていた。

それは鷺巣の手が出来上がりつつあるかもしれないということ。これまでの和了りも早かったこともあり十分にありうる。トップの龍門渕と大差ということもありこの勝負手を逃すのは辛すぎる。ゆみは手が進む牌…贅沢を言えば三元牌の残り牌をツモっておきたかったが、そう都合よく事は進まない。

ゆみがツモってきたのは北。残念ながら手牌には使えそうもない無駄ツモである。

(仕方ないか…) 打 (北)

手牌に入れるはずもなくツモ切り。…と同時に鷺巣から響く発声。ゆみが反射的に視線を向けると鷺巣の手牌から2枚の北が倒されていた。

「…ボンだ」

鷺巣手牌 (他家視点)

{ ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ } 副露 (北横北北) 打 (発)

(タンヤオ系じゃない…と発か…これで小三元確定)

役牌を落としておいてオタ風である北を鳴くこれまた不可解な鳴きであるが、ともかく三元牌の2枚目である発が鷲巢から切られた。流石に警戒されるだろうが、現状残り1枚の発がどこにあるのか分からない。

山の奥深くに眠っているかもしれないし王牌にあつたらどうしようもない。それに大三元を意識させることで他家の手を束縛する事が出来るメリットがある。ゆみは発声する前に思わず鷲巢が切った発に手を伸ばした。気持ちの前めりになっている証拠である。役満がかかったこの状況では仕方ないことではあるが。

「ポーン！」

ゆみ手牌

(①①三赤五八6中中) 副露 (発横発発 白横白白) 打 (八)

(まさか大三元!? そんな手が入ってきたっていうのか!?)

鷲巢とゆみの空中戦となり鳴きの応酬が続く。そしてゆみが白発と立て続けに晒した為、必然的に他家からのマークは厳しくなった。中を握られてしまえばもう切られることはないだろう。だがそんな事はゆみも百も承知だ。

四巡目

華菜手牌

(二四五七八②③④⑧⑨135) ツモ (⑥)

(なかなか手が進まないし…)

ゆみの目算通り華菜の配牌はてんでバラバラだった。そしてツモもいまいち噛み合わず、雀頭がないいわゆる塔子^{タツ}オーバーに陥っていた。嵌張系も多い。せめてもの救いは234の三色が見えることだろう。

ここから華菜はタンピン三色を目指し9筒を切った。6筒を引いたことで7筒がカバーできるため妥当な打牌と言える。

それに万が一ゆみが既に大三元をテンパイしていたとしても自分からロン和了りする事はないだろう。鶴賀学園は出来れば龍門^{リウモン}か清澄から直撃を奪いたいはず。自分から和了ってしまったえば風越は1万点を切り、飛び寸前となる。

鶴賀の大将はなかなか賢明だ。そんな自らの首を絞める真似はしない…はず。それに大三元でなく連荘狙いならば仕切り直しとなるため振り込んでもよしと考えていた。

だが華菜が9筒を河に切つてすぐ、待ったの声^{マッタ}が掛かる。

「カン」

「…は？」

「…聞こえなかったか…貴様が切ったその9筒…カんだ」

(…！私の嶺上牌が…)

鷺巢手牌（他家視点）

〔■■■■■■■■■■〕 副露 〔⑨⑨⑨横⑨ 北横北北〕 打 〔九〕

鷺巢が華菜の切った9筒に対してカン：つまり大明槓を宣言。新ドラは4筒となった。華菜はもちろんゆみでさえわざわざ暗刻を崩し、カンをした鷺巢の狙いが分からなかった。

そもそも大明槓には欠点が多い。まず面前が崩れ、和了るのに役が必須となる。まあ今回は元から鳴きを入れていたので関係はない。そして手牌が少なくなる為、どうしても防御が甘くなる。

しいて利点を上げるとしたらドラとツモ回数が増えることくらいだろう。しかし現状鷺巢は大差のトップでありドラを乗せる必要がない。やはりメリットとデメリットが釣り合わないと思うのだが…

しかしこの大明槓、大いに意味があった。ゆみたちがそれを理解するのはもう少し後のことになる。

またこのカンでツモ番が変わる。再度華菜がツモるがあえなく無駄ツモ。一瞬間をしかめ9索をツモ切りした。

（よし。入ってきた…）

五巡目

ゆみ手牌

①①三赤五6中中} ツモ {6} 副露 {発横発発 白横白白} 打 {二三}

対照的にゆみはイーシャンテンとなる6索ツモ。三萬か赤五萬切りの選択だったが順当にドラである赤五萬を残す。しかしゆみが三萬を切った瞬間再び鷺巢が動く。

「それもカンだ…」

(また大明槓!?)

鷺巢手牌 (他家視点)

{■■■■■■■■} 副露 {三三三横三三} ⑨⑨⑨横⑨ 北横北北} 打 {中}

鷺巢捨牌

{白発}

(三萬…?もうトイトイしかないじゃないか)

鷺巢、再びの大明槓。新ドラは1索。三萬が晒されたことで鷺巢の手牌から混一色や混老頭の可能性が消え、残る役はトイトイのみ。打点もドラを抱えての満貫程度としか思えない。大明槓をしたのは新ドラを乗せたかったからだろうか。というよりもうそうとしか考えられない。

鷺巢は嶺上牌をツモったあと、なんとゆみの大三元のキー牌である中を切り出した。この暴牌に対局室はもちろん実況解説室、観戦室、各校の控え室までもが凍りつく。一

見すると血迷ったかのようにしか見えない打牌。

(この局面で中切り? 気味が悪いが…遠慮なく鳴かせてもらおうぞ…)

「ポン!」

ゆみ手牌

(①①赤五66) 副露 (中横中中 発横発発 白横白白) 打 (赤五)

当然ゆみは鳴き、これで大三元確定。その後赤五萬を切り出し1筒、6索のシャボ待ちにとる。そしてこの大三元、鷺巢に強烈な一撃を加えるかもしれない可能性を秘めている。それは最後の三元牌である中を鷺巢から鳴いて大三元を確定させたこと。

鷺巢は当然その事について責任を負わなければならない。麻雀にはそのルールがある。

『だ、大三元確定! 龍門洩鷺巢選手の包パオ…責任払いです! 他家の放銃でも半額である24000点の支払い、もし加治木選手がツモれば鷺巢選手の全額…48000点の支払いとなります!…それにしてもなぜあの手牌から中が出るんでしょうか? 藤田プロ』

『なんだその中打ちは…ありえないだろうが…』

『…ぐだつてないで解説をお願いします』

『あれにか? 出来るわけないだろ…』

役満の責任払いとなるケースが少ないのか実況が丁寧に説明する中、藤田はまさかの解説放棄。それもしょうがないのかもれない。実況もそれは分かっているのか藤田を責めるようなことは言わなかった。それだけ説明のしようがない打ち筋である。

なにせ配牌から三元牌が3種とも対子で揃っていたにも関わらず、それらから切つていったのだ。しかしこの鷺巢、南二局では今回のように常人ではまずしない打牌から清老頭を張った。藤田には鷺巢が意味のない事をするようにには思えなかった。

そして次巡鷺巢が中を手出しで切つた事でその事実には3人が気づく。

(ここいつのする事なす事は訳が分からん…)

(そう言えばここまで全て手出し…まさかこいつ、配牌から三元牌の対子を落としたのか!? 何考えてるんだし!)

(私の麻雀を打たせてもらえない…この子…怖いよ…)

鷺巢手牌 (他家視点)

〔■■■■〕 副露 (三三三横三三) ⑨⑨⑨横⑨ 北横北北

(ククク…凡人には分からんだろうの…この手の終着点が…)

鷺巢は手を安く仕上げるつもりはさらさらなかった。この手はまだ伸びる余地がある…そう確信していた。

鷺巢の手牌が見えない卓上の3人は鷺巢の狙いに気づくはずもなく、観戦室にも訝え

た人間はいないのか驚巢がみすみす他家の大三元のアシストをしたことを野次る声しか聞こえない。

「龍門淵の大將の子……まさか！」

「うわ……どうしたんですかキャプテン？」

(……)

真つ先にその危険性に気づいたのは控え室で観戦していた洞察力に優れている風越女子キャプテン、福路美穂子。思わず叫んでソファから立ち上がってしまう。

福路の突然の行動に隣に座っていた文堂の肩がピクつと上がり心底驚いた様子を見せる。そしてこんなキャプテンは初めてみるな……と思った深堀。周囲の部員たちも福路を見つめていた。

あつ……ごめんなさいねと文堂に一言謝り、福路は卓上の4人の手牌と捨て牌に素早く目を通していく。出来れば自分の思い過ごしであつてほしい……と思つていたが目の前の現実はそう告げていなかった。

ゆみ（鶴賀）捨て牌

〔西九八赤五②〕

咲（清澄）捨て牌

〔南4①二〕

鷲巢（龍門淵）捨牌

〔白発九中9〕

華菜（風越）捨牌

〔東9南5〕

（ない…あの2牌が場に見えていない…まだ山の中にいる…）

神妙な表情を浮かべ、何かを呟きつつ考え続ける福路にコーチである久保が怪訝に思ったのかどうしたと声をかける。

こういった手牌の読みには疎い久保。福路の心中が理解できなかつた。

福路はあくまでも私の推測なんですが…と最初に前置きを付け加えてから鷲巢が思っているかもしれない可能性について説明し始めた。

「…さすがにありえないだろ…それはもう人間業じゃない…」

「そ、そうですよ。それにそんな都合よく引けるはずないじゃないですか」

「考えすぎですよキャプテン！」

正直福路が語った事はあまりにも現実離れしていた。説明し終えた後辺りを包むのはコーチである久保を始め、信じられないといった空気である。

部員たちはこぞつてありえない…と口にしていたが、福路には皆が現実から目を背け

てしまっているように見えた。つまるところありえないなんてことはありえないのだ。推測だとしても、僅かでも可能性がある以上はそれを考慮しなければならないだろう。

「華菜…気をつけて…」

声は届かないと分かっているにもかかわらず画面越しに華菜に語りかける。不安は大きくなっていく一方だった。

八巡目

ゆみ手牌

①①①66 ツモ 一 副露 中横中 発横発発 白横白白

(違う…まあそう簡単にはツモれないか)

場所は戻り対局室。ゆみはツモ牌を指で舐める。その指から感じ取ったのはなにやら複雑な凶柄の凹凸…完璧な盲牌など出来やしないがこれは間違いなく萬子だろう。

となると当たり牌ではない…などと考えていたが、その通り一萬であった。無駄ツモでありノータイムでツモ切り。この一萬に咲が僅かに体を揺らし反応する。

咲手牌

一 一 一 五 六 二 四 八 八 ③ ④ ⑧ ⑧ }

(カンでできる…でも…)

咲が感じ取った嶺上牌は北。すでに3枚見えていて手牌に使う事は出来ない。振り込みたくないゆみに対しての安牌として使えるが、一萬が現物となり通ることが分かったのだ。というよりそもそも和了を目指していないのに3巡凌げる一萬を捨ててカンをする必要がない。咲はここではカンをせず、8筒ツモの後、セオリー通り一萬を切り暗刻落としをする。

華菜手牌

{二四七①②③④⑥⑦⑧①35} ツモ {八} 打 {八}

(八萬か…助かったし！)

華菜は鷲巢の大三元の包が決まってから咲と同じくベタオリに徹していた。ここまですみでゆみの現物の連打である。理由としては鶴賀にツモってもらえば龍門渕の責任払いとなり場が平らになるし、何より責任払いとなり放銃できなくなった。先程とは状況が変わり、放銃で24000点ずつの折半となったことで鶴賀は自分から当たり牌が出ても和了ってくるだろう。これらから華菜はベタオリを決めこみ現物である八萬をツモ切りする。

十一巡目

ゆみ手牌

〔①①66〕 ツモ 〔赤5〕 副露 〔中横中中 発横発発 白横白白〕 打 〔6〕
 (よし…これでさらに和了りやすくなった)

さてしばらく動きのないまま十一巡目まで進んでいたが、ここでゆみが当たり牌ではなかったものの絶好の牌をツモってくる。好形となりうる赤5索を持つてきた。これで4、7索の両面待ちに切り替えることが出来る。

シャボ待ちでは、1筒が咲の捨牌に1枚見えているため都合3枚残っていることになる。いやオリているであろう咲や華菜が抱えているかもしれない事を考えると、山には殆ど残っていないかもしれない。

その反面両面待ちは4索が2枚、咲の捨牌とドラ表示牌に見えているだけであり7索に至っては生牌である。よって6枚残っているので単純に計算すれば倍。ツモにも十分期待できる。

ダブドラを切りづらいこともありここは迷わず6索を切っていくゆみ。しかしその直後ゆみを始め、咲や華菜すら予測していなかったことが起きてしまう。

ツモ牌を確認した鷺巣はその手で手牌からツモ牌を含み4枚牌を倒した。

「…カン！」

鷺巣手牌 (他家視点)

〔■7777〕 副露 〔三三横三三〕 ⑨⑨⑨横⑨ 北横北北

(馬鹿な…7索が全枯れだと…)

(つてまさか三槓子!? ドラも乗ってる…流石に考慮してないし!)

無慈悲にもゆみの当たり牌の片筋を殺す7索の暗カン。普段どちらかという顔に感情が出ないゆみもこれには流石に表情を歪める。そしてこのカンにより三槓子が成立。新ドラ表示牌にも二萬が見え鷺巢が晒している三萬がそっくりそのまま新ドラとなりドラ4となる。先程までやつと満貫に手が届くかの手であったが、現状では見えてるだけで三槓子トイトイドラ4となり最低でも倍満以上が確定。しかし今の鷺巢には倍満など頭がない。続く嶺上ツモこそが豪運の真骨頂であった。

「ククク…そうかそうか…ここにいたか…」

(なんだし?)

(ツモられたか…)

(え? いやあの嶺上牌は北のはず…北!?)

獯猛な笑みを浮かべつつ思わず声をあげた鷺巢に首を傾げる華菜にツモられた事を悟るゆみ。そして事ここに至りようやく咲が気づくもそれは余りにも遅すぎた。最早どうする事もできず、鷺巢が牌を倒すのを見ていることしか出来ない。

鷺巢手牌 (他家視点)

〔■〕 ツモ 〔北〕 副露 〔■77■〕 三三横三三 ⑨⑨⑨横⑨ 北横北北

『…あつ！これはもしかして…』

『これか…やつの狙いは…』

3枚目の嶺上牌は咲の予測通り北。他3人からしたら北は既に3枚見えている字牌でいわゆるポンカス。前述の通り手牌に使える余地はなく、ただの無駄ツモに過ぎない。

しかしこの北、むしろ鷺巢にとつては当たり牌以上に待ち焦がれていた牌である。間髪入れず鷺巢は北を晒す。

「カンっ…！」

そのまま北を加槓しこの局4回目のカン。これで鷺巢の手牌は16枚もの牌が右端に並べられた。その状況となる役は一つしかない。それは…

鷺巢手牌（他家視点）

〔■〕 副露 〔■77■〕 三三横三三 ⑨⑨⑨横⑨ 北北横北北（加槓）

「ス…四槓子…？」

その声は誰が漏らしたものだっただか。いやもうそれを気にする者はこの場にはいなかった。そして対局室を始め、各校の控え室、観戦室までもが鷺巢の打ち筋に戦慄を覚え静まり返っていた。誰もが目の前の事実を理解が追いつかない様子である。その中で鷺巢のみが口元を吊り上げ笑っていた。

卓上に晒された16の光…鷺巢、
再びの役満…四槓子テンパイ…

危惧

『龍門渕鷺巣選手なんとまた役満…それも四槓子テンパイです…』

『1半荘の間に役満を何回か張ることは確かにある…あるが…四槓子ともなるとさすがに別だ。私も初めて見た』

(四槓子だと…狙っていたとでもいうのか!?)

(これで龍門渕も無視できなくなったし…)

(どうしよう…四槓子だなんて…)

なぜこの状況をここまで掘り下げて話しているのか…ゆみを始め卓についている3人が驚愕しているのか…それは四槓子が役満の中でも格段に難しいとされるからだ。その要因はいくつかある。

まず一つに単純に4回槓をするのが相当難しいといえる。全て明槓でも4つの暗刻…最低12枚は自力で揃える必要がある。それがどれ程困難なことか。

また計4回槓が発生すれば流局となる四開槓スリーカイカンというルールがある以上他家から1回でも槓をされれば四槓子成就への僅かな可能性は完全に潰える。

そもそも四槓子は狙って和了る役ではない。例えば序盤手の中に暗刻があり他家

から4枚目が切られた場合まず大多数が見逃す。その理由は言うまでもないだろう。

そして張ったとしても手牌は必然的に裸単騎となり、他家からは張っていることが筒抜けである。…となれば警戒されるのは当然であり、出和了が期待できなくなってしまう。その他防御が弱い、無駄にドラが増えるなど同じ役満である四暗刻と比べ四槓子はデメリットが目立つ。故にテンパイすら滅多に見れず、幻の役満とも言われているのだ。

十一 巡目

鷲巢手牌（他家視点）

〔■〕 副露 〔■77■〕 三三横三三 ⑨⑨⑨横⑨ 北北横北北（加槓） ツモ 〔西〕

打 〔西〕

鷲巢はその勢いそのまま嶺上ツモとはならず、最後の嶺上牌である西を手牌に加えることなくツモ切りした。

ツモられてもおかしくない流れだっただけにゆみはほっと胸を撫で下ろす。しかし安心してばかりもいられない。鷲巢の暗槓で当たり牌である7索が枯れた。しかもそれだけではない。ゆみは王牌：正確にいうとドラ表示牌に目を向ける。

ドラ表示牌

〔4③9二4〕

(3枚目の4索も見えてしまった…)

最後の新ドラはダブドラとなる5索。必然的に4索がドラ表示牌であるため一気に5枚も当たり牌が消えた。

そのため残っているゆみの当たり牌は4索1枚のみの苦しい状況となっている。他家が既に持っているなら余程危険牌だらけの切羽詰まった手牌にならなければ出ないだろう。手牌が少ないが故に手替わりも余り望めず、現状山に残っているのを祈るしかなかった。

そしてこの状況に困り果てたのは既に勝負から降りている華菜と咲。まだ巡目は中盤を少し過ぎたあたりだ。つまり後6、7回は牌を切らなければならぬ。

ゆみと鷺巢の役満を掻い潜ることは並大抵のことではない。都合よく安牌を引き続けることが出来るわけでもないのです、近いうちに危険牌を切らざるを得なくなるだろう。

十一巡目

華菜手牌

(四七①③④④⑦⑧12355) ツモ (3)

(3索…切れる牌がないし…)

華菜(風越)捨牌

〔東9南5⑤九〕

〔二八⑥②東〕

ゆみ（鶴賀）捨牌

〔西九八赤五②赤⑤〕

〔東一⑥6⑥〕

咲（清澄）捨牌

〔南4①二九五〕

〔南東一一一五〕

鷺巢（龍門淵）捨牌

〔白発九中9②〕

〔二南⑥②西〕

そしてその直後、華菜の安牌が尽きた。手牌は既に危険牌で溢れかえっており、ひたすら安牌をツモることを願っていたが引いてきたのは双方に通っていない3索。

しかし1枚切らねばならない。この中から切れるとしたら1筒だろうか。2筒が捨牌に4枚見えているためであるとすれば単騎かシャボ待ち。ゆみと鷺巢は2筒をツモ切りしているので当たり牌である可能性は低い。下手に欲張って対子を落とすよりはよっぽどいいだろう。それに1巡回せば安牌が増えるかもしれない。大丈夫：必ず通

る…と華奈は意を決して1筒を切った。これに反応したのは下家に座る加治木ゆみ。

(1筒…：シャボ待ちなら討ち取っていたか。だが鳴けば単騎にとれる…)

ゆみにとつては事実上テンパイ復活…僥倖の1筒。余りにも見込みがない4、7索待ちから単騎待ちに切り替えることが出来る。数少ない手替わりのチャンスにゆみは反射的に牌を倒していた。

「ポン！」

ゆみ手牌

(赤56) 副露 (横①①①) 中横中 発横発発 白横白白

(…：し、心臓に悪いし…：ていうか張ってなかったのか!?)

一瞬振り込んでしまったかと思つた華菜。ゆみからのポンの発声と分かり胸に手を当てほ…と息を吐く。これがあと数回続くなかと思うと胃が痛くなる。

一刻も早くゆみにツモってほしいものだが、気になるのはこの局面で鳴いたこと。ここまでツモ切りを続けておいてテンパイしていなかったのか…

事實は違つたものの華菜はそう解釈した。

(さて問題はどちらを切るかだが…)

一方ゆみは赤5索と6索、どちらを切るかの選択を迫られていた。ゆみはもう一度場の捨牌を確認する。5索は生牌であり、6索は自分の捨牌に1枚。

この土壇場でフリテンにはしたくない。それに6索は一巡前に通したばかりであるため、ここは6索切りが妥当であるといえる。

よし：と6索を手に切ろうとしたその瞬間、ゆみに電流が走る：頭によぎるは先程驚巢が見せた、整った顔を崩した獣のような獰猛な笑み。そして浮かび上がってきたのは1つの疑問：ゆみは牌を切る直前だった右手を止め手牌に戻す。他家から見れば奇行としか思えない行動に当然他3人の視線はゆみに集まる。

(こいつ…なぜ嶺上牌の西をツモ切りしたんだ…?)

西はゆみが1巡目に切ったきり場に見えていない。それから誰も合わせ打ちをしていないのを見ると誰の配牌にも西がなかった可能性が高い。

そして完全に降りている華菜と咲は西をツモればゆみの現物のためすぐに切るだろう。特に華菜はノーチャンスに頼って1筒を切るくらいだ：確実に手牌にはない。以上の理由から西はまだ2枚とも山に眠っているはず。和了を狙うならこれ以上ない好条件が揃った牌なのだ。

それを切ったということは残った単騎がゆみに対しての危険牌なのだろうか。ゆみの脳内ではそれ以外にも様々な可能性が浮かんでは消えていく。やがて1つの仮説に辿り着いた。それは余りにも現実的ではなく麻雀のセオリーに反するもの。しかし絡まっていた糸が1本に戻るかのように全て辻褃があつた。ゆみは隣の赤5索を手に

取った。

(まさか……よし……直感を信じるっ……!) 打 (赤5)

……こいつならやりかねない……と寸前で心変わりしたゆみはフリテンとなる6索待ちとなる赤5索を切る。ダブルならぬトリプルドラの強打。言うまでもなく危険牌である。引く気のない真つ向勝負に周囲は固唾を飲みこみ、しばらくの間沈黙が場を支配する。ゆみの右頬を汗が伝い、ポタツ……と卓上に落ちる音がやたら大きく響いた。

「……どうした清澄……早くツモらんか」

「……あつーは……、はい……」

(通ったか……だが6索は切れん。山に残っていればいいが)

5索は通し……その沈黙は時間にして僅か数秒であつたがゆみには数十秒……いやそれ以上に感じられた。

うっかり手を止めていた咲が驚巢に急かされ、慌ててツモ牌へと手を伸ばす。咲はツモ牌を手牌にしまいこみ手出して5索を合わせ打ちした。ゆみはひとまず5索が通ったことに胸をなで下ろすが、ゆみの中に1度芽生えた疑念は消えない。今後6索を切るつもりはなかった。

(……止めるか……これは予想外だっ……)

驚巢手牌

(6) 副露 (■77■ 三三横三三 ⑨⑨⑨横⑨) 北北横北北(加横)

フリテンにしてまで6索を止めたゆみの判断は正に英断だった。鷺巢、まさかの6索単騎待ち。

ゆみは鷺巢の思惑を見事に読み切り、絶壁の1歩手前で踏みとどまる……この神がかりの振込み回避に実況解説も間違いなく振り込むと思っただけに大いに盛り上がる。

『加治木選手、鷺巢選手の当たり牌である6索を止めましたー！超好判断です！』

『なんだ……なぜ生牌のドラを切ってまで6索が止まる……？』

藤田には分からなかった。……なぜここでフリテンに受けることができるのか。判断材料などあっただろうか。自分だったらフリテンを嫌い、間違いなく振り込んでいただろう。全くもって今日は驚かさねばなしである。ちなみに本人は気づいていなかったが手で口を覆い考える姿は、若干薄目になっておりテレビ映りがかなり悪かった。

「さすがっす先輩ー！最高っす！」

「うむ。さすが……ってまた藤田プロか……」

「ワハハ……ゆみちゃんよく躲したなあ……」

「で、でもこれフリテン……だよね……大丈夫……？」

同じく盛り上がったのは4人しかない鶴賀学園控え室。先程ようやく立ち直

りテレビで観戦していた副将東横桃子が歓喜の声をあげる。僅かに右袖が霞がかかっているのは気のせいだろうか。

先鋒を務めた津山睦月はせんべい片手に応援している。もちろん会場に持ち込んだプロ麻雀せんべい（ードース）である。どうやら引きは強くないらしく今日3回目の藤田との顔合わせにカードをまるで親の敵を見るような目で睨みつけている。藤田に罪はないのだが……

一応部長である蒲原はいつもの調子である。自分には到底できない所業だ。あの読みはゆみならではだろう。

ただその中でゆみの心配をしているのが次鋒の妹尾佳織。彼女は蒲原からフリテンをしてはいけなさと何度も言われてきた。初心者であるが故にその刷り込みが強クチョンボのように絶対にやってはいけないことと思っっているらしい。その言葉に蒲原はテレビ……対局から一旦意識を逸らし佳織に手短に説明する。

「いや、佳織……フリテンでもツモ和了は出来るんだぞ」
「えっ……そうだった……」

驚く佳織の様子に教えたはずなんだけどなーワハハと苦笑いする。蒲原は厳しい状況だがゆみなら何とかしてくれるだろうと信じていた。最もゆみに対して態度に示したことはないが。このあたりが少し不器用な蒲原であった。

十二巡目

鷺巢手牌

〔6〕 副露 〔■77■ 三三横三三 ⑨⑨⑨横⑨ 北北横北北（加槓）〕 ツモ 〔③〕

打 〔③〕

（鶴賀の小娘…なかなかやってくれるっ…！）

手前から役満和了がスルツ…と溢れ落ちる。鷺巢も討ち取れると思っていただけに僅かに眉間に皺しわをよせる。もうゆみの待ちは6索で間違いないだろう。となれば在り処どころが分からない6索はあと1枚。

引き合いになるが、負けるつもりは毛頭ない。間違はなくツモることが出来ると確信していた。ただしそれはツモ山に残っていたらの場合。すでに華菜、咲に流れていればもう切られる可能性は限りなく低い。

しかし手元にある6索を簡単に切るわけにはいかない。切ってしまったらゆみはその巡目中に待ち不明の単騎に切り変えるだろう。などと考えつつほぼ無意識に当然ツモ切りした。

その後鷺巢、ゆみ共に卓に強くツモ切りし続ける。その間華菜と咲はその2人の打ち合いで増えた安牌を切って何とか凌いでいた。そしてこの巡目までくるとある希望が

うつすらと見えてくる。そう、流局という名の希望が。

もういつそのままだま流れてほしいと心底思っていた。だが流局まであと2巡というところで鷺巢が遂に掴む。牌を手にした瞬間、直感的に察したのか盲牌すらせずそのまま強く牌を卓に打ちつける。鷺巢だからこそ出来る芸当と言えるだろう。

引かれたか…と、ゆみは観念したように目を瞑つむり軽く俯き、たった1枚の手牌を伏せた。

鷺巢手牌

〔6〕 副露 〔■77■ 三三横三三 ⑨⑨⑨横⑨ 北北横北北（加槓）〕 ツモ 〔6〕
 「ツモ…80000・160000」

（…いややはり6索…）

（こんなの勝てるわけないよ…）

叩きつけられたのはゆみが危惧していた6索…結果的に役満直撃を躲した形となつたゆみだが安堵の表情は見られない。それもそのはずオナテンの引き合いに競り負け、これ以上ない勝負手…大三元を和了れなかった。しかし何より辛いのは四槓子…役満の親かぶりを食らったことだろう。それが現状断トツの龍門渕なのだからなおさらである。

16000点…子の倍満分の点棒を渡し終え、随分と中身が少なくなってしまった点

棒箱を眺める。余りにも厳しい…その一言に尽きるだろう。心が折れかけていたゆみだがその時頭に浮かび上がるは先程見てしまったモモの泣き顔。もう2度と見たくはないし、させるつもりもない。そうだ、まだ負けたわけではない…確かに勝機は薄い。まだ後半戦がある…と気を引き締めた。

『龍門瀏鷺巣選手の四槓子が炸裂ー！そしてこれで前半戦が終了です！30分の休憩の後後半戦を開始します…』

『完全に鷺巣の独壇場だったな。このまま突っ走ってしまうのかそれとも対抗馬が出てくるのか…楽しみだ』

「あ…あの…ト…おトイレ行ってきます！」

対局室に前半戦終了のアナウンスが流れたと同時に、目にうつすら涙を見せている咲が身震いした後立ち上がる。突然尿意が襲ってきたのかそのまま足早に対局室を出て行ってしまった。

ただ一番悲惨なのは風越だろう。件の華奈は点棒を払い終わってから目の焦点が合っておらず、魂が抜けたかのように少しも動く素振りを見せない。なにせ前半戦殆ど見せ場を作ることができずただただ点を失い、挙げ句の果てには焼き鳥…1回も和了れなかつた。確かに長く麻雀を打っていれば和了れない半荘もある。だがチームの命運を賭けた大切な決勝戦でやってしまうなんて。

そして本当の計算違いが鷺巢の存在である。去年いいようにやられた天江衣もたいがいがだが、この鷺巢は天江衣以上に理解不能な打ち筋である。もちろんこんな雀士と打ったことがないため対抗法が見えてこない。

そして今の華菜はキャプテン福路美穂子を始め4人の意思……いやレギュラーになれなかつた部員たちの分まで背負っている。その責任感に押しつぶされそうになつていた。

その姿を一目した後、ゆみもゆつくりと立ち上がり外の自販機へ向かう。なぜかやたらと喉が渴いていた。幸い休憩時間も長いためゆつくり休めそうだ。

大将戦前半戦終了

南家	清澄	110300 (18000)
西家	龍門洩	190400 (+32000)
北家	風越女子	45200 (18000)
東家	鶴賀学園	54100 (116000)
各個人収支		
	鷺巢 (龍門洩)	+74000
	宮永 (清澄)	116100
	加治木 (鶴賀学園)	126900

池田（風越女子） 130800

『…ところでなぜ30分の休憩なんだ？長すぎないか？』

藤田の疑問は最もである。ここまでの合間合間に挟まれた休憩時間はせいぜい10分。30分は長いといえる。

これに実はですね…と実況が相槌を打って話し出す。何でも先程のオーラスの鷲巢の打牌が余りにも常識の範疇を超えていたのか、テレビの視聴者から解説してくれとの問い合わせが殺到しているらしい。

同時にまともな解説せず、放棄までした藤田にも苦情が入っている。これに対しテレビ局は大会本部に掛け合い、急遽休憩時間を伸ばしその間に藤田に解説させる心積もりらしい。

それを聞いた藤田は流石にまずいとようやく気づく。プロ雀団から派遣されて来ている以上解説として最低限の仕事をしなければならぬことを忘れていた。ただ面倒臭いと内心毒づいてはいたが。

『…私の推測になるんだが…いいか？』

『ええ…お願いします』

「…なあ頼むから説明してくれよ」

一方控え室に戻ってきていた鷺巢も智紀を除いた部員にオーラスの件で詰め寄られていた。その中で一番聞きたがっているのは意外なことに透華であった。いつもながらデジタル派の自分から見ればありえない打ち筋。それ故に話を聞いてみたいと思つたのだ。

しかし鷺巢も藤田と同じく説明を面倒くさがる。元来鷺巢という人間は自分の利にならない事には興味すら向けない。以前と比べ多少はましになつたとは言え、今の局の説明などはもつてのほかだろう。

仕方ありませんわね…と透華は切り札を切ることに決め、端に控えていた自身の執事であるハギヨシとアイコンタクトを取る。

(ハギヨシ…アレですわ！アレを使いなさい！)

(…かしこまりました)

2人の間で意思が行き来しあつて成立した。ハギヨシは僅かに頷き、まだ言い合つている鷺巢の元に静かに近づく。右手にはあるものが握られていた。

「…面倒だ。和了る過程などどうでも…」衣和緒緒…「こちらをどうぞ」…ぬ…すまん…まあそこまでいうなら話してやらんでもない」

鷺巢に差し出されたハギヨシの右手…その手には一般的な大きさのどら焼きが乗つ

ていた。ただのどら焼きではない。奈良県にある和菓子店、高鴨堂のどら焼きである。

鷺巢はこれが大層気に入っている。受け取った途端に機嫌が良くなっただけでなく露骨に態度を改めたその様子に透華はここまで変わるものか…と内心ため息を吐いた。わざわざ取り寄せておいたのは正解だったようだ。隠れたファインプレーである。そして事行はどうあれ話は聞けるのだ。一言一句聞き逃すつもりはなかった。

こうして藤田と鷺巢はほぼ同じタイミングに解説を始めた。オーラス何が起こったのか…鷺巢は何を考えて打牌していたのかを…

策略

団体戦決勝も残る大将戦後半の1半荘のみ。各校の大将はこの長い休憩時間をどう活かすかが後半戦の勝負の鍵となるだろう。

その中で現在トツプを走っている龍門渚高校大将鷺巢衣和緒は…

「やふ^やあり^はうふ^りあい^う…モグモグ…」

早速どら焼きを味わっていた。

場所は変わらず龍門渚高校控え室。高鴨堂のどら焼きに屈した鷺巢は片手で頬張りながら手近のソファに腰を掛ける。それと同時に部屋のほか中央にあるテーブルを囲うように皆が座った。そのテーブルにはいつの間にか麻雀牌が1セット置いてある。鷺巢が説明しやすいようにと透華がハギヨシに命じ、どこからか調達させたものである。それに純が手を伸ばした。

「それじゃ説明してもらおうか…お前の配牌はこうだったよな？」

鷺巢配牌

〔三三三三九⑨⑨⑨白白発発中中〕 ツモ 〔北〕 打 〔白〕

「うむ…ま^間ひ^違いふ^いあい^なふ^いあい…モグモグ…」

「…まず飲み込みなよ…行儀悪いよ。にしてもとてつもない配牌だよね…」
(やつぱりわかりませせんわ…なぜここから白切り…?)

乱雑に牌を取出しガラガラと一枚ずつ並べて、鷺巢に確かめる。なにセツモ牌を含めて14枚もあるのだ…1枚くらい思い違いをしているかもしれない。しかしどうやら自分の記憶力は確かだったらしく杞憂だったようだ。

これに対して鷺巢はどら焼きを口に含んだまま答えるが、当然聞き取れないので一が咎める。

それを尻目に透華は思考を始める。しかし改めて見ても鷺巢の豪運を象徴するかのような凄まじい配牌だ。既に大三元四暗刻と2種の役満が見えている。普通ここからオタ風の北をツモ切り…次点で孤立牌である九萬、9索に手が伸びるはず。しかし鷺巢はここから百人中百人が切らないであろう白を切っていた。常人ですら理解不能なものにましてガチガチのデジタル打ちの透華から見れば、確率などを無視した意味不明の打牌…なおさら理解できない。

「…で、なんでここから白切りなんだ…?」

これについて気になっていたのは透華だけではないようで、そんな透華の疑問を純が代弁してくれた。皆鷺巢の口から納得できる答えを聞きたかった。それを受け、ゆつくりどら焼きを味わっていた鷺巢がようやく飲み込み話し始める。

「ま……直感というやつかの……」

「直感……どういふこと……?」

それは透華を始め、皆が呆気にとられるような短い理由だった。少なくとも透華が求めていた理論的な答えではなく感覚的な答えである。しかしそれも仕方がない。理論……確率論では透華の思考通りオタ風を切っていくのが定石であるとしか説明出来ない。となれば直感などの感覚的な理由となるだろう。

それに全国に目を向けるととても理論では説明出来ない打ち筋をしている者も少なからずいる。そういえば身近にすぎで忘れていたが、今ソファアの右端に座り美味しそうにオレンジジュースを飲んでる衣もその内の1人であった。

割り切らざるを得ない……か。そう気づいた透華は内心で今日何度目か分からないため息を吐いた。どこぞのピンク髪は頑なに否定するだろうが、このあたりは柔軟な透華であった。

そして思わずオウム返ししてしまった智紀に鷲巢が詳しく説明する。

なんでも第一ツモで北をツモった瞬間にある直感……確信を持つたらしい。ここで自分が引けないという事は既に山には三元牌が残っていない……他家の配牌に流れてしまった……と。しかし切られるのを待つのは絞られればいずれ手詰まりになるし、切らなければ七対子しか和了り目がなくなる。

しかし見方を変えればこの手、七対子イーシャンテンでもありその選択も決して間違いいではない。ただ鷺巢にはそんな安い手を和了るつもりは毛頭なかった。だから白を切った：らしい。

「…分かった。じゃあ次はこれだな…」

どことなく釈然としない顔だが純は一応納得したらしい。彼女も鷺巢と同じ感覚派の打ち手だからだろう。鷺巢の目の前の牌を崩し、新しい手牌を作り上げる。状況をより把握する為に鷺巢の対面：鶴賀学園加治木の手牌も組み上げることにする。純は覚えきれいなかったが智紀がノートパソコンで牌譜をとっていた為、捨牌を含めて難なく再現することが出来た。

鷺巢手牌（六巡目）

〔77中中〕 副露 〔三三横三三〕 ⑨⑨⑨横⑨ 北横北北〕 嶺上ツモ 〔6〕 打

〔中〕

ゆみ手牌（六巡目）

〔①①赤五66中中〕 副露 〔発横発発〕 白横白白〕

「無理矢理大明槓をしたのは何とか理解出来る：清澄の妨害が狙いだろうか？東場でもやってたからな…ただ…なんで…ここで中が出る？」

東場で確認した通り清澄の宮永咲は嶺上牌を察知出来る力を持っている可能性が高

い。する必要のない大明槓は咲に対する牽制と見て間違いないだろう。

しかしゆみの手牌を見るに中だけは切つてはいけない場面である。鳴かれれば大三元の責任払いとなつてしまうし可能性は低いものの既に手が出来上がっているやもしれない。というよりかは切る必要がない。この手7索、中のシャボ待ちで張つているためここは誰がどう考えてもツモ切りである。

だがここでも鷲巢はセオリーを無視して、一旦テンパイを崩す中切り。藤田でさえ匙を投げたくらいだ。これが本当に分からない。

「儂としては別に鳴かれてもよかつた…というより鳴いてもらいたかつたといつてもいい」

「鳴いてもらいたかつた…？」

「どういう事…？」

『…風越を完全に勝負からおろしたかつたんだらうな』

『風越をですか…？』

時間をかけながらも藤田は何とか解説を続けており、そして案外的を得ていた。ほぼほぼ正解に近い辺りプロ麻雀選手の端くれと言えるだろう。

藤田の考えは鷲巢が風越の池田に横槍を入れられない為にゆみに大三元確定の中を

鳴かせた…というものだった。しかしここで池田をおろしたところで余りにも釣り合っていないのだ。ゆみは役満テンパイ、それに対し鷺巣はテンパイすらしていないこの形。

鷺巣手牌

〔677中〕 副露 〔三三三横三三〕 ⑨⑨⑨横⑨ 北横北北

鷺巣手牌（次巡）

〔6777〕 副露 〔三三三横三三〕 ⑨⑨⑨横⑨ 北横北北 ツモ 〔7〕 打 〔中〕

しかし鷺巣は次巡7索を引いて中を切り、早々にテンパイを復活させる。3面待ちとはいえ役がつくのは6索のみ。それもトイトイのみの安い手である。

そしてその直後ゆみがシャボ待ちから両面待ちに切り替えた際に切った6索を信じられないことに見逃している。それも表情1つ…眉すら動かさずに。確かに7索か北さえ引き入れれば三槓子が成立するが僅か2枚であり余りにも望み薄。圧倒的な大差をつけられていて和了ることができないわけでもない。むしろ2位以下に大差をつけているのだ。この見逃しもセオリーを反している。

そしてまだ最後の大きな疑問が残っている。

『鷺巣選手…なぜ西単騎に取らなかつたんでしようか…？』

『…それはだな…』

鷺巢が四槓子の裸単騎を西ではなく6索にとつた理由。藤田には1つだけ心当たりがあった。自分の推測がほとんどで合っているかも分からないものだがその点については最初に断つた。ならば堂々と話しても問題ないだろう。藤田は軽く咳払いをしてから話し出す。

『…鷺巢が7索を暗槓したときだ。鶴賀の加治木の表情が露骨に歪んだだろう。見ていたか?』

『そっういえば…』

実況は先程の光景を思い浮かべる。鷺巢の手牌に集中していたため、加治木の表情まではよく見ていなかったが珍しく歪んでいたような。それもその筈、待ちを切り替えた直後に当たり牌の片筋である7索を殺されたのだ。

『あれは加治木のミスだった。まあ役満を張っていたんだ…しようがないところもあるが』

『…? どういうことですか?』

『あれでは7索が当たり牌だと言っているようなものだな…鷺巢も恐らく気づいていたはずだ』

7索が当たり牌だと仮定するとゆみの手牌の中身が以下の3通りに透けてくる。

{ ①①⑤⑥ }

{①①68}

{①①89}

上から4、7索の両面待ち、7索の嵌張待ち、7索の辺張待ち。つまり高確率…3分の2で6索が手牌にあることになる。だがこの場面に限っては加治木が6索を確実に持っていると言い切れる判断要素が捨牌にある。

『辺7索ならここから6索を切ったことになるんだが…』

仮想ゆみ手牌

{①①689}

鷲巢（龍門淵）捨牌

{白発九中9②}

{二南⑥②}

『あつ…これならわざわざ6索を切る必要がありませんね…』

ゆみの最後の手出し牌である6索だ。鷲巢にトイトイドラ4など振り込むリスクが少しでもある以上、この場面では待ちも変わらない鷲巢の現物である9索切りだろう。

つまり6索切りはシャボ待ちから両面待ちに切り替えたもの…同時にゆみの手牌の中に高確率で6索が残っていることだと考えることができる。

そして当たり牌が全く…もしくは殆どなくなつたゆみが次に出来る行動が手替わり

を待つことである。

『ただ…加治木の手牌だところから手替わりがあまり望めない』

『確かに少ないですね…3副露しているわけですし…』

今更言うまでもなく手牌は少なくなればなるほど窮屈になってしまう。副露の弱点の代表的な1つである。それは必然的にそのチャンスが少なくなることであり…

ここからの手替わりはせいぜい2つしかない。

(①①赤56) ツモ (①) か ツモ (5)

1筒を自力でツモるか鳴いて単騎待ちに切り替えるか、5索を引きシャボ待ちに受けなおすかである。

そしてこれらの共通点が、どちらにせよ6索が切られるということだ。

そう考えると辻褃が合ってくる。6索が1回通っているため鷲巢がツモ切りをし続ける限り手替わりはない。当たり牌とは思わないだろう。さらにもう1枚は5索。初期のドラであり切りづらい。そして6索はフリテン。

正に悪魔のような罠だ。どこまでも余念がない。

『しかし加治木選手は6索を止めましたよね…』

『ああ…私も完全に振り込むかと思ったが…』

だがゆみは池田華菜から1筒を鳴いた後6索を切らなかった。切る直前だった右手

を止めたという事は突然閃いたという事に他ならない。

それらを思い浮かべ、藤田は苦々しい表情を隠しきれなかった。自分が同じ状況に立っていたら間違いなく振り込んでいた。勝利から限りなく遠のく四槓子に。

結局鷺巣は流局寸前に自力でツモってきたのであるが。

『まっ、こんな所だな…あー疲れた…』

『丁寧な解説ありがとうございました』

解説を締めた藤田はまず脇に置いていたペットボトルに手を伸ばす。久々にまともな解説をしたせいかわりなく喉が渇き、疲れも感じる。だがようやく終わった。これでやっと休めると椅子に背を預け、背伸びをしつつ欠伸をかく。そんな藤田に実況が申し訳なさそうに話しかける。

『すいませんが藤田プロ…そろそろ休憩開けますよ』

『うそ!』

…予想外に時間を使いすぎていたようだ。

(…それにしてもまさか躲されるとはな…)

鷺巣は最初は他3人を甘く見ていた節があった。確かに対局前には清澄の宮永咲に僅かに手応えを感じていたが、いくら見込みがあるうと所詮15、6歳の女子高生。メ

ンタル：精神面に難があるように見え、自分に言わせればまだまだ経験が足りない。流石にそこまで求めるのは酷であろうが：

その点については少しずるいようだが、鷺巢には75年もの経験がある。そしてその75年は決して順風満帆とは言えないものだった。麻雀に命を託したことも数え切れない程あるが、その度に圧倒的な勝利を収めてきた。だが年：衰えには流石の鷺巢も勝てなかった。自身が若い頃北海道の炭鉱で戦った、退屈を持て余した拳句狂った龍神の心中が痛いほど理解できた。そんな折に出会った人生最大最悪の敵：ああ自分はこの男を下す為に生を授かったのかもしれない：そこまで思わせる程の敵。死闘の未敗北したが、神のいたずらかあるはずのない再び戦う機会を得た。地方大会は通過点であると思っていたが：ただ一人鷺巢の中で加治木ゆみの株が上がっていた。読み、閃きに関してかなり光るものがあるし、メンタルもかなり強い。後半戦何か仕掛けてくるのは間違いない。

「…おい！…おい！衣和緒！」

「…ん？」

「なに考え込んでんだ。放送流れてるだろ。行ってこい」

いつの間にか思考の海に飲まれていたらしい。純から声をかけられ、意識を再浮上させスピーカーに耳を傾ける。確かに休憩が開けるとの放送が流れていた。鷺巢は腰を

上げゆつくりと立ち上がる。

「衣和緒！麤殺だー！」

「あなたならよほどのことがない限り大丈夫だと思いますが…お気をつけて」

「うん。決めてきてよ」

「頑張って…」

（まあ頼られるというのも…悪くないか）

頼られる…誰かの為に麻雀を打つことがない鷺巢にとつては新鮮なことである。衣たちからの激励を受け、控え室を出て対局室へと歩き出した鷺巢。その背中はやけにおおきく見えた。

奇襲

鷺巢が独特の空気が立ち込める対局室に戻ると既に加治木ゆみ、池田華菜の両名が卓についていた。

ゆみはともかく華菜はあれだけ落ち込んでいたのにどういふ訳か立ち直って抜けかけていた魂が戻ってきている。休憩時間に何かあったのは明白だろう。

それからしばらくして原村和に連れられ、最後の1人である宮永咲が時間ギリギリに姿を見せる。トイレに行くと言っていたはずだがどこか迷ってでもいたのだろうか。ちなみにここから1番近いトイレは往復して10分もかからない。

そして鷺巢はすぐに咲の変化に気づく。

(ほう…:そうでなくては面白くない…)

前半戦終了後真つ先に出ていった時は目に涙を浮かべていたものの、今となつてはその面影はなく顔を引き締めており、むしろ時折笑っているようにも見える。部員たちに発破をかけられたのか自信を取り戻したようだ。

鷺巢もこのまま手応えなく終わってしまうことなど望んではない。勝負は相手に張り合いがないとつまらないものだ。

(上等上等っ…完膚なきまでに叩きのめすまでのこと…)

起家である咲の手が雀卓の中央に伸びる。最後の半荘の開始を告げるサイコロが回り始めた。

大将戦後半戦東一局 親・清澄 ドラ・(七)

東家 清澄 110300

南家 龍門洩 190400

西家 風越女子 45200

北家 鶴賀学園 54100

『さあ泣いても笑ってもこれが最後の半荘です！全国に駒を進める事が出来るのはたった1校のみ！ここまでは龍門洩の圧倒的なリードとなっていますが…どうでしょうか？』

『2位につけている清澄でも8万点差か…私もまくりの女王だなんだと呼ばれてはいるが…鷲巢からはまくれる気がしないな…』

まして1半荘でひっくり返す必要があるならなおさらだ…と藤田は呟く。

藤田の言うとおり8万点というのは簡単に詰められる点差ではない。なにせ一気に逆転しようと思うのなら親の役満直撃しがなく、それも早々あるものではない。

ならばコツコツ…といきたいところだがここであと1半荘という時間制限が効いて

くる。なんにせよ他3校は連荘できる親番を大切にしなければならぬ。

前半戦は鷺巣が完全に掌握しきっていた。休憩を挟んで後半戦となったことで情勢が変わるのが重点となるだろう。

(うむ…絶好…)

五巡目

鷺巣手牌

(二三四234②③④④七七八) ツモ (七)

しかし後半戦真つ先にテンパったのはやはり鷺巣。受け入れの広いイーシャンテンからドラ…七萬を引いてくる。4筒切りでドラ3枚を抱えた3面待ちの高めタンピン三色テンパイ。

ダマでも十分な打点だが鷺巣は基本的にダマで待つことは少ない。自らの豪運に絶対の自信を持っているからだ。供託の千点棒を取り出し、卓に放りこむ。河に切られた4筒が曲げられた。

「リーチだ…」 打 (④)

鷺巣捨牌

(東北8四横④)

『トップ目の龍門瀏鷺巣選手からリーチがかかりましたー！畳み掛けにかかります！』

『早いリーチで安牌が少ない上に打点も申し分ないし待ちもいい。これが決定打になるかもな…』

(リーチか…キャプテンの言う通りなら…)

一方で現在最下位の華菜は先程の休憩時間でのキャプテンこと福路美穂子の助言：アドバイスを思い返していた。

休憩時間に入り、1人しか残っていない対局室。風越女子大将池田華菜は目に見えて落ち込んでいた。大将戦前の威勢もすっかり消え去っている。余りにも不甲斐ない結果に終わり、控え室に戻ってメンバーと顔向けする勇気が出ない。それもその筈…この半荘、龍門測、清澄の1年生にやられたい放題で一切和了れず焼き鳥状態。

龍門測に振り込んだ清老頭も鶴賀が頭ハネしてくれなかつたら

大きく点を失ってしまいトップの龍門測との差は絶望的なほど広がってしまった。もうどうすればいいのか分からない。1年前と同じ状況に陥っている彼女は自分の無力さを呪っていた。

(どうして自分はいつもこうなんだ…何がいけないんだ…)

いくら考えても答えは出てこないし、教えてくれる人もいない。そんな華菜の背中から近づくと人影が一つ。

「華菜……ごめんなさい……来てしまつて」

「キャプテン……」

華菜が振り返つた先にいたのは福路美穂子。実は華菜から会いに来ないように言われていたのだが、約束を破り思わず控え室を飛び出してしまつた。目にはこらえきれなかつたのだらうかうつすらと涙を浮かんでいる。

「謝るのは私の方です、キャプテン……みんなの点棒が……」

「大丈夫……あと伝えたいことがあつて……龍門測の子の事で……」

「龍門測ですか……?」

ああ……またこの人を心配させてしまつた……そう悔やむも今はキャプテンの優しさに身を委ねて楽になりたい。

……それにしても龍門測の事とはなんなのだろうか。自分が見たところ途轍もない打ち手としか感じなかつたが、なにかついている隙を見つけてくれたのだろうか。

「あの子にちよつと気になる打牌があつて……これ……」

「え……」

美穂子は制服のポケットから手帳を取り出して華奈に差し出す。そこには簡単に書かれた手牌が書かれていた。

〔三四五13赤567888③④⑤〕 打 (赤5) リーチ

「これって……」

華菜には見覚えがあった。確か前半戦で槍槓のダブロンで鷲巢が和了った手であつたはず。しかしこの手のどこが……

そう思った華奈であつたがすぐに美穂子の言いたいことが分かつた。

あの時は槍槓のダブロンなどというありえぬ出来事にそこまで思考が回らなかつたが、改めて見ると少しおかしい。

（あれ……なんで赤5索切りリーチ……？）

リーチをかけるなら定石は8索切りだろう。わざわざ1翻落ちる赤ドラを切る必要がない。

結局この手は裏ドラが8索となり3枚乗つて跳満……結果論だが赤5索切りでも8索切りでも結局打点は変わらなかつた。まるで裏ドラが何か把握しているかのような打牌である。……そういうえば鷲巢の手にドラが乗ることが多かつたような……

「まさか……」

「ええ……だからあの子のリーチには気をつけて。他家に差し込んででも蹴つた方がいいかもしれないわ……」

（全く……卑怯にも程があるし！）

新ドラ裏ドラが把握できる…乗りやすい…言葉にすれば簡単だがそれは凶悪の一言に尽きる。

例えばリーチのみの手でも裏ドラが暗刻に乗れば満貫にまで化ける。もし今の鷺巢の手に暗刻があれば、跳満か倍満…もしくはそれ以上もあり得る…考えただけでも鳥肌が立つ。

華菜手牌

〔一三四赤568①①②④⑥⑥西〕 ツモ 〔北〕

鷺巢のリーチ直後、華菜が引いてきたのは鷺巢の数少ない現物である北。華菜の手はテンパイには程遠く、普通なら北をツモ切りして一旦様子を見る場面である。

最も理想的なのは親である清澄に差し込み、連荘してもらおうことだが肝心要の咲の表情は浮かない。どうやら自分と同じくまだまだ手牌が出来上がっていないようだ。

じゃあどうするか…と、場況を確認していた華菜は脳内に一つの考えが浮かんだ。

ゆみ捨牌

〔北⑧26〕

華菜が注目したのはゆみの捨牌。字牌処理もそこそこに早々に中張牌を切り出しており、手が早そうだ。しかしまだ張つてはいないだろう。この点差で親番でもないのにダメにするはずがない。

悩んだ挙句華菜は北をツモ切りせず、赤5索を中抜きして河に切った。鷺巢からの発声は…ない。

ゆみ手牌

〔二二二赤五六八67③赤⑤⑥⑦〕

〔赤5索切り!?!〕

鷺巢にとつての片筋とはいえ、ど真ん中の赤ドラ切り。鳴けばテンパイだがゆみは一且考え込む。回し打ちするにせよ、オリるにせよリーチ一発目に切られる牌ではないだろう。

余りにも異質な打牌…何かしらの意図があるのではないか…と思わず華菜に視線を移す。その華菜の目は何かを訴えるようだった。その目を見た瞬間、華菜の思惑を理解した。

出来れば面前で進めたい手だったが鷺巢からのリーチが入ってしまった以上致し方ないだろう。

〔なるほど…そういうことか…〕

「チー!」

ゆみ手牌

〔二二二赤五六八③赤⑤⑥⑦〕

副露

〔横赤567〕

打

〔③〕

ゆみは華菜の切った赤5索を鳴き、3筒を打つ。この3筒もリーチ宣言牌のまたぎ筋だったがなんとか通る。

そしてこの鳴きでゆみも高め跳満のテンパイに漕ぎ着けると同時にツモ番がズレた。このズレが直後重大な意味を持つことになった。

咲は無難に字牌を切っていき、迎えた鷺巢のツモ。

(ぐ…：よりもよって…)

六巡目

鷺巢手牌

(二三四234②③④七七七八) ツモ (七)

鷺巢が引いてきたのは4枚目の七萬^{ドラ}。普段の鷺巢なら迷わず暗槓だろうがこの場合はリーチ後で待ちが変わってしまう為暗槓出来ず、ツモ切りする他ない。

これが鷺巢麻雀であつたなら、ツモ番をずらされようがどうとでも出来た。しかしこれは普通の麻雀。ツモ番がずれたら引く牌も必然的に変わる。これは流石の鷺巢もどうしようもない。

七萬をツモ切りしたと同時にゆみが発声と同時に手牌を倒す。

「ロン…：タンヤオ三色ドラ4で12000」

ゆみ手牌

〔二二二赤五六八八赤⑤⑥⑦〕 副露 〔横赤567〕 ロン 〔七〕

『トツプから跳満直撃ー！これは大きい！』

『風越池田のアシストがあつてこそその和了りだ。本来ならまた鷲巢が和了つていたはずだがセオリーを無視することで強引に捻じ曲げた。ツモが良すぎるといふのも考えも
のだな』

（よしーうまくいった…）

（すまないな…風越）

始めて龍門洩に直撃らしい直撃を食らわせた。露骨な協力はタブーとされているので会話せず、目線のみで意思疎通する2人。これで少しは追い風になってくれるだろうという確かな手応えがあつた。

東家 清澄 110300

南家 龍門洩 177400 〔113000〕

西家 風越女子 45200

北家 鶴賀学園 67100 〔+13000〕

大将戦後半戦東二局 親・龍門洩 ドラ・〔発〕

華菜手牌

〔一三九①268東東南北発中〕 ツモ 〔9〕 打 〔2〕

(これは…いける！)

鷲巢のリーチはなんとか蹴った直後の配牌は九種十牌。当然流したりはしない。何よりこれなら役満…国士無双を狙えそうだ。一番の懸念は捨牌から見破りやすい国士無双が鷲巢に察知されて流されることだが…

この時の鷲巢は現状最下位でここまで焼き鳥の華菜から警戒を怠っていた。加えてゆみから直撃を食らった直後でゆみに強い敵対心に向けており、華菜を一瞥もしておらず注意さえ向けていない。

この手が成就することを信じて2索を切り出していった。

(ふん…龍門渕め…吠え面かかせてやるし！)

二巡目

ツモ (6) 打 (6)

三巡目

ツモ (1) 打 (三)

四巡目

ツモ (3) 打 (3)

五巡目

ツモ (西) 打 (8)

六巡目

ツモ 〔⑨〕 打 〔6〕

(きたきたー！)

華菜手牌

(一九①⑨一九東東南西北発中)

『風越の池田、国士無双をテンパイ！当たり牌の白はまだ2枚山に残っています』
 『絵に描いたような国士の捨牌だからな。他家に流れたらまず切られないだろう』

華菜は次々と要所牌を引き瞬く間にテンパイ。白は咲の捨牌に1枚、ドラ表示牌に1枚見えている。まだまだツモにも期待できるだろう。

六巡目

華菜捨牌

(2⑥三③86)

(風越の捨牌…国士か?)

(国士無双…)

六巡目ともなると流石に萬子、索子、筒子の中張牌が満遍なく切られた違和感が目立つ捨牌となり、ゆみ、咲共に手牌の中のヤオチュウ牌を絞り出す。

その中で鷲巢だけは手牌の孤立しているであろう牌を切っているのだが。…しかし

それは華奈も百も承知だ。もとより鶴賀、清澄から直撃を取るつもりはない。

…特に大きな動きもなく、巡目は進んで九巡目、華菜がツモ牌に手を伸ばして盲牌…
 なにも刻まれていない感触を確認して卓に叩きつけた。

「ふっ…きたし、ぬるりと…ツモ！」

華菜手牌

〔一九一九①⑨東東南西北発中〕 ツモ 〔白〕

〔国士無双…80000・160000!〕

〔国士無双…役満の和了りを許すとは…〕

鷲巢にとつては正に死角からの刃…やいば完全に警戒を怠っていた。しかしそれも必然かもしれない…ここまで全く和了っておらず、目立っていないかった華菜である。

点棒を若干乱暴に渡しつつ、鷲巢は華菜に照準を合わせる事を決めた。

『持ってきたー！風越池田選手の今日始めての和了は役満、国士無双！正に息を吹き返す和了りです！』

『これで風越が3位浮上…この流れで親番を迎えるんだ…ひよつとしたらひよつとするぞ』

北家 清澄 102300 (18000)

東家 龍門測 161400 (116000)

南家 風越女子 77200 (+32000)

西家 鶴賀学園 59100 (18000)

大将戦後半戦東三局 親・風越女子 ドラ・(7)

華菜配牌

(二二三五七七②③③東北北) ツモ (西)

(ドラ暗刻!好配牌だし!)

今の華菜の流れを象徴するかのような配牌。三暗刻やトイトイ…ツモがよければ四暗刻まで伸びるかもしれない。

第一ツモは残念ながら無駄ツモだったがこの好配牌に期待に胸を膨らます。この手を物に出来れば大きく差が縮まることになるだろう。

(さあ…和了るぞ親倍満!そして…華菜ちゃん奇跡の逆転優勝だし!)

西をツモ切りした華菜の髪が猫の耳のように持ち上がる。その目はいつも以上に活気に満ち、輝いていた。

本気

観戦席は前局の華菜の役満和了でにわかには盛り上がっていた。やっと出てきたか……ここから巻き返すか……などとあちらこちらから聞こえてくる。

去年全国出場を逃した風越女子だがその人気ぶりはまだまだ健在のようだ。会場全体が華菜を後押しするような空気になっていた。

『多少差が縮まったものの依然龍門渕の大量リードには変わりありません。藤田プロはどう見ますか?』

『……だな……この手を風越が生かせるかどうかで戦況が大きく変わってくる』

藤田の言う通り、正にここが分水嶺ぶんすいれいといえる。

親番で華菜に舞い降りた好配牌……確実に場の流れが変わりつつある。もしも大物手に仕上げ、龍門渕鷺巢から直撃でも取れれば一気に差が詰まり、龍門渕、清澄、風越の三つ巴の様相を見せることとなる。

しかしそれはもちろん逆にも言える……この配牌はさながら竿にかかった大魚……釣り上げるか否かで今後が大きく左右される事になるだろう。

大将戦後半戦東三局 親・風越女子 ドラ・(7)

南家 清澄 1 0 2 3 0 0

北家 龍門湊 1 6 1 4 0 0

東家 風越女子 7 7 2 0 0

南家 鶴賀学園 5 9 1 0 0

(張ったか…)

六巡目

鷲巢手牌

(四五⑥⑦⑧⑨発発中) 副露 (白横白白) ツモ (中) 打 (⑨)

二巡目にゆみから切られた白を鳴いた鷲巢は六巡目で三、六萬待ちの小三元…満貫をテンパイ。本来トツブの鷲巢に求められるのは、早々に和了って華菜の親を流し場を進めることだろう。しかしこの時の鷲巢は華菜以外は眼中になかった。ゆみ、咲から当たり牌が出て、見逃し…いや気づきすらしないかもしれない。

同巡

華菜手牌

(二二三五七七②③③北北北) ツモ (③)

(テンパイ…でも跳満くらいで和了ってられないし！)

その直後華菜もテンパイに至る。2筒切りで嵌四萬待ちの三暗刻ドラ3。鷲巢と同

じく満貫：リーチかつモ和了りで跳満となる。親つパネでも十分な打点だが、華菜は2筒を曲げなかった。

華菜にはある確信めいたものがあつた。今の自分なら手を伸ばす事ができる。それに跳満程度で和了つてしまえば逆に流れを逃す事になる…と直感的に察していた。

『風越池田選手リーチとはいきませんでした。一旦ダメテンにとります』

『冷静な判断だ。手替わりのチャンスも十分にあるし待ちの四萬は驚巢に1枚、宮永に暗刻で純カラだ：それに四暗刻イーシャンテンだ』

『役満といえは驚巢選手も大三元まであと1手ですね。両者とも満貫ですし：これはほぼ五分ですかね？』

『いや…』

確かにほぼ五分のようだが、藤田は風越池田の方が優位と見ていた。役満テンパイになる牌の数こそほぼ同じなものの問題はその後。

驚巢は発が手牌に入らなければどうあがいても満貫止まりだ。だが発は既に1枚咲の捨牌に見えているため残るは1枚。咲が発を切った直後に重なった為、僅かに間に合わなかった。

対して池田は四暗刻単騎スツタになれば最高だがツモリ四暗刻スの形でもリーチをかければロン和了りでも倍満以上が確定し、なおかつ柔軟な対応がしやすい。

しかしこれは役満を和了る前提での話。大差をつけられている池田はともかく両面待ちの好形で張っている鷺巣は無理矢理狙う必要はない。

ゆみ手牌

（二一五②④④⑤⑦⑨1378） ツモ （西） 打 （④）

（手が重いな…この局は厳しいか）

ゆみの配牌は良いとは言えずツモもいまいちしまらない。この局での和了りは難しいと判断し、後々危険牌になりそうな4筒を処理。早くもオリる準備を始めていた。

大した打点が望めないこの手で中途半端に突っ張って振り込んではそのこそ目も当てられない。それにまだ親番が2回残っている…ここは無理をする場面ではない。このあたりの割り切りの良さもゆみの長所といえるだろう。

咲手牌

（三四四七八①①①②南南南） ツモ （六）

（よかった。これで和了れる…）

咲の手は順調に伸びていき2筒切りで3面待ちとなる絶好のテンパイ。普通なら2筒切りリーチだろう。だがここで咲は上家であるゆみの前の牌山…正確にいうと次の自分のツモに一瞬目を向ける。咲が感じ取った次のツモは1筒…つまり槓材。そして嶺上ツモは南と2筒。三萬を切って2、3筒待ちに受ければ次巡この形で和了ることが

できる。

咲仮想手牌

(四四四六七八②) 副露 (■南南■) (①①■) ツモ (②)

嶺上ツモ三暗刻の満貫確定手。2枚の新ドラが絡めば打点も伸びるが、どういう訳か手牌に新ドラが乗った事はほとんど記憶にない為、咲は最初から期待していない。とはいえ満貫の和了りでも逆転の口火を切るのには十分だろう。

前半戦の東場を最後に和了りから遠のいている咲はツモってきた六萬を手牌に引き入れ、迷わず三萬を手にとった。暗槓に備え牌は曲げずリーチはしない。

咲 打 (三)

『あつ…出ましたね』

『なんで3面待ちに取らなかつたのかは…まあ大体予想がつくが。ともかく鷺巢への放銃だ。池田は残念だったな…』

『…いやちよつと待つてくください…鷺巢選手牌を倒す素振りを全く見せません!』
『おいおい見逃すのか…発はあと1枚しかないんだぞ…』

自身の当たり牌が切られたのにも関わらず、まるで眼中にすら入っていないかのように無造作に牌山へと手を伸ばす鷺巢。まさかの見逃しに実況を始め、藤田も独り言のように呟く。この場面でなぜ和了らないのか。考えられる要因は2つ。

1つは役満である大三元狙い。しかしこれは藤田の言う通り、余りにも可能性が低すぎる。他家に握りつぶされているかもしれないし、山の深い所に眠っているかもしれない。ましてや王牌などにいたらもう手詰まりだ。

まあまだ六巡目で巡目も浅い：両面待ちの為一旦様子見の見逃しも考えられる。そしてもう1つは清澄からの出和了を良しとしていないかだ。しかし2位につけている清澄からの直取りは理想的のはずだが：

：藤田は鷺巢の本質についてまだ見誤っていた。引ける引けない：ではない。鷺巢は牌を引き寄せてくる。故に：

七巡目

鷺巢手牌

〔四五⑥⑦⑧発発中中中〕 副露 〔白横白白〕 ツモ 〔発〕

必然の発引き：鷺巢大三元テンパイに至るラス発引き。この神がかりとも言える引きの強さに観戦席を含め実況解説すらも言葉を失い、辺りに奇妙な静けさが漂う。

しばらくした後その静寂を破ったのは我に帰った興奮気味の実況であった。

『…その発を一発で引いてきたー！大三元確定です！』

『何なんだあいつの引きは…』

手広さより手の高さを優先する：もちろんそのような打ち手は山ほどいる。しかし

鷺巢はその中でも異質の存在だ。

なにより驚かされるのは驚異のツモ。少ない有効牌を的確に引いてくるその様子は最早運がいいという言葉では片付けられないだろう：それほどまでに軽々と大物手を作り上げていく。

当然この場面はノータイムで四萬か五萬を切って大三元テンパイに受けるだろう。しかし鷺巢はここで少考：手が止まる。

(大三元：いや違う…)

鷺巢再びの直感：いや天啓が舞い降りる。大三元に構えていては和了れない：となれば…

鷺巢はツモってきた発を手牌にすら入れずそのままツモ切った。実況が絶叫とも言える声を上げていたが無論対局室には届かない。

鷺巢 打 (発)

同巡

華菜手牌

(二二三五七七③③③北北北) ツモ (赤五)

(やった…四暗刻テンパイだし！)

結果的に華菜は即リーしなかったことが吉と出る。赤五萬を引き当て、三萬切りで

四暗刻ツモスーテンパイ…とはいえ安めのロン和了りでも三暗刻トイトイドラ4で最低でも親倍満と十分の打点を持つており、そこに裏でも乗れば数え役満もあるかもしれない大物手…いやがおうでも高揚する。

待ちが二、五萬と筋シャンポンだが、さして気にするほどでもないだろう。それにと華奈は清澄咲の河に視線を向ける。三萬はさつき清澄が切ったばかりの牌。龍門洩もツモ切りだったため振り込むことはない…これだけの好条件が揃っている。

華奈はこれがこの手の完成形と見て、迷うことなくリー棒を取り出した。

「リーチせずにはいられな…ロン」にやつ!？」

…しかし満を持してのリーチ宣言は鷺巣からの発声により遮られた。予期せぬ放銃に思わず変な声が漏れ、一瞬何が起こったのか分からず状況を把握するのに幾ばくかの時間がかかった。

(ふ、振り込んだのか…?なんで…?)

「小三元…満貫8000点…」

鷺巣手牌

(四五⑥⑦⑧発発中中中) 副露 (白横白白) ロン (三)

(そこから発切り!?)

本来通るはずの牌で振り込んだ。なんで山越し…なんで私から…などと答えの出る

はずのない疑問が頭の中で渦巻く華菜だったが、鷲巢の和了形を確認しそれはますます強くなる。逃した魚は余りに大きい。華菜は体の中の燃えたぎる闘志が急速に冷めていくのを感じた。

西家 清澄 102300

北家 龍門洩 169400 (+8000)

東家 風越女子 69200 (-18000)

南家 鶴賀学園 59100

「惜しかったわね。この局は咲が和了っていたのに…」

「…どういうことじゃ？」

久がボソッと独り言のように呟いたのをまこは聞き逃さなかった。まるで咲が近いうちに和了ることが分かっていたように聞こえる。確かに咲もテンパイしていたが…

周りも聞きたそうな顔をしていることに気づいた久はアハハ…と苦笑いしつつ皆に説明する。

「あの子ちよつとした癖があつてね…ツモる予定の槓材が近づくと僅かに視線を泳がせるのよ。次のツモにでも槓材があつたんじゃないかしら」

「なるほど…そういうことですか…大丈夫なんですか…それ」

今の話で皆が思ったであろう事を代弁する京太郎。槓材のタイミングがバレてしまいかねない癖である。見抜かれてしまったら、鳴かれてツモがずらされてしまうかもしれない。

しかし久は問題ない問題ないと手を振る。

「大丈夫：そもそも癖自体は本当に小さいものだから：今のもたまたま咲がアップで映ったから気づいただけだしね。現にあなたたちも今まで気づいてなかったでしょう？」

「そうじゃの…」

彼女たちは咲と何回、何十回と対局している。咲のスタイルも熟知している彼女たちでさえ気付かなかったのだ：気づかれる可能性はゼロに近い。

それに咲にこのことを妙に意識させてしまうとこれ以上に厄介な癖がついてしまうかもしれない。手癖なら少々問題だが顔：表情の癖だ。対局中に相手の顔を見続ける打ち手などないだろう。

これらの理由からこのままのほうがいいと久は判断したわけである。

「まあそれでも…たつた数回の対局、映像から気づく人がいたら：恐ろしい観察眼よね。人間の所業じゃないわ。龍門渕が咲の当たりを見逃したからもらったと思っただけど…」

「あの場面での見逃しはありえません…大三元テンパイに取らないなら尚更です…」
「あればつかりは分からないわね…本人から聞きたいくらいだわ」

デジタル打ちの和から見れば鷺巢の打ち筋は理解に苦しむものだった。非効率極まりないものだがなぜかそれが成立している。

和のみに関わらず清澄高校の面々は皆、鷺巢という雀士の底が知れなかった。

同時刻南大阪のとある会場…ここでも麻雀のインターハイ予選…決勝が繰り広げられていた。

「クシユン！」

「なんや恭子…夏風邪でも引いたんかいな」

「体調崩されたらたまらないのよー」

「いやそんなはずないんですけどね…ちよつと…噂でもされとんかな…」

「ほーん…と、絹が倍満ツモ…おっ！裏も乗って三倍満や！」

「いやー絹ちゃん調子いいですねえ！もう決まるんやないですか…」

その言葉に恭子と呼ばれた少女はテレビの対局に意識を戻す。

そこには彼女の所属する姫松高校の副将が映っており、三倍満を和了したためか小さく笑みを浮かべつつ他家から点棒を受け取っている。

この和了りで現在4位の高校が飛び寸前となり、次局に決着がついてもおかしくなくなった。それは同時に大将である彼女の順番がなくなることの意味する。

…というより彼女はこの予選ではほとんど打っていない。全国から見ても5本の指には入る激戦区：強豪校がひしめき合う南大阪地区。当然出場校は多くそれに比例して対局数も多い。その中であつてここまでほぼ大将に回すことなく勝ち上がってきた姫松高校：主に目の前にいる中堅を打っている主将の調子が良すぎたからなのだが：その激戦区から頭一つ抜け出していると見えよう。

「まつ…出んでええなら別にええけどな…手の内見せんですむし」

この姫松高校の参謀とも言つていい彼女は既に全国大会を見据えている。全国屈指の強豪校の大将を任されているだけの事はある。

場所は長野に戻つて龍門渕高校の控え室…

「仕返し…ですわね。全く衣和緒の悪い癖ですわ!」

「あいつめちやくちや負けず嫌いだからな…親番で役満和了られたのがよつぽど効いたんだらうな」

「この局に限つて和了りやすさを優先させてるのが悪質だよ。割と子供っぽいんだよなあ…」

「ぬ…衣たちの中でも衣和緒は一番年下だからな…仕方あるまい！それも衣和緒らしいからな」

結局鷺巢の目論見を理解していたのは龍門淵高校のメンバーだけだった。本人がいない中、言いたい放題である。鷺巢が聞いていたら激昂する事は間違いないだろう。

今までの対局で鷺巢が負けず嫌い…根に持つ性格だというのは重々承知している。

透華はまたため息を吐き、呆れている。

「まあ、今の和了り全く意味がないわけじゃない…いや意識はしてないだろうけどな」
「ん？」

「去年もあの風越の大将を見たが…波に乗られたら面倒くさいタイプだ。で常套手段として波に乗らせないよう立ち回るわけだが…」

その中で鷺巢を擁護する声があがる。場の流れに敏感な純は自分が有利になるように打つのではなく、相手を妨害するように打つ。

純が見るに先程の池田は波に乗る寸前だった。そんな純が流れを奪うのに最も効果的だというのは…

「どんなに安くてもいい…そいつから直撃を取るのが手っ取り早いんだよ」

この振り込みで風越に流れ…勢いはなくなつた。少なくとも次の配牌はかなり悪くなるだろうなと純は見ていた。

(私の三萬は見逃したんだ…)

強い…今まで対局してきた誰よりも強い…咲はそう感じざるを得なかった。挙句の果てには自分が視界に入っていないような見逃しをされた。それは耐え難い屈辱。穏やかな性格の咲でも悔しさを感じ下唇を僅かに噛んだ。

対抗しなければ…でもどうやって?どうやったら龍門渕に勝てる…?とここまできて咲は昔…小学生の時同じような体験をしたことを思い出す。あの時は…曖昧だった記憶がはつきりと蘇った時、咲は静かに手を上げ審判にこう告げていた。

「あの…脱いでもいいですか?…靴下」

『おや…清澄宮永選手が靴を脱ぎ始めました。これには一体何の意味があるのでしょうか?』

『あれだ。自然体ってやつだな』

『…というと?』

『例えてみよう…お前が雀荘でボロ勝ちしていたとする…頭も冴えて正に絶好調だ』

『はあ…』

私雀荘自体滅多に行かないんですけど…と言いたくなつたがこれはあくまで例えだ。話の骨を折らず聞き役に徹する。

『で、余りにも勝ちすぎてしまったため、いちやもんをつけられてしまった。周りにいた怖いお兄さんに絡まれている…この状況でさつきと同じように打てるか？』

『いや…絶対無理ですよ。動揺してミスもすると思います…』

『そういうことだ。麻雀を打つにあたって自然体は割と大切なんだよ…』

『…例え極端すぎませんか?!』

余りにも下手な例えに実況は思わず突っ込むが、正直なかなかい例えが思いつかなかつた藤田は対局に視線を戻しごまかす。都合がいいことに咲が靴下を脱ぎ終え、試合が再開されるようだ。

(さあ、これでどう変わるかだな…)

大将戦後半戦東四局 親・鶴賀学園 ドラ・(白)

(うつ…)

華菜配牌

(一六⑧⑨1579東西発中中) ツモ (四) 打 (西)

華奈は純の危惧通り手牌からドラが消え、目に見えて配牌が悪くなった。覚悟はしていたがここまで酷くなるとは思っても見なかった。特急券の中が対子で揃っているもの、中は既にドラ表示に一枚見えてしまっており、他もてんでバラバラ。

余程ツモが良くない限り和了る事は出来ないだろう。…そもそも高打点になりそう

もない配牌だが諦めることなくセオリー通りオタ風である西から落としていく。

(よし…いい形になった…)

五巡目

ゆみ手牌

〔二二赤五六七④赤⑤⑦⑧6789〕 ツモ 〔二二 打 〔9〕〕

ゆみは前局と打って変わって好調。タンピンドラ2などが見込める手格好となった。親であるため決して無理をする必要はないがやはり面前で進めたいと思ってしまう。

この手は和了りきりたい…そう思いつつ9索を打つ。

同巡

華菜手牌

〔四六⑥⑧⑨579白発中中〕 ツモ 〔西〕

(西…駄目か…)

一巡目に切った西を引き直してしまった。配牌から手も殆ど進んでおらず、これだけで今の自分にどれだけ流れがないか痛感させられてしまう。

ここで華菜は自分の和了りを諦め、親であるゆみに上がってもらおうと考え直す。幸いゆみの河は典型的なタンヤオ系で必要そうな牌は読みやすい。ここら辺りか…と6筒を切り出していく。

華菜 打 (6)

そしてこの6筒ゆみにとっては喉から手が出るほど欲しい牌。鳴けばタンヤオが確定し、テンパイに取れる。華菜の絶妙なアシストであった。

(6筒は2度受け…鳴いてテンパイに取るか…)

「チ「ポン」」

(邪魔。ポン!?)

しかしそこに思わぬ横槍が入る。ゆみと華菜は咲の方に視線を向けるときつちり2枚の6筒が晒されており、華菜の切った6筒を拾っていた。

(く…6筒が3枚見えてしまったか…)

ここでテンパイ出来なかつたゆみは苦しい。残り少ない有効牌を持ってこれるか…などと考えていたが、それは悪い意味で杞憂に終わる。

「カン!」

咲は鳴いた直後に6筒をツモり加槓。新ドラ表示牌には3筒が見えた。つまり4筒が新ドラとなる。咲の手が嶺上牌に伸び、そしてそのまま手牌の横に打ち付けられた。

「ツモ! 嶺上開花! 500・1000です」

咲手牌

(六七八八八23456) ツモ (7) 副露 (66横66) (加槓)

「り…嶺上開花タンヤオ…だけ？」

ゆみが声に出してしまうのも無理はない。この局面で満貫にも届かない手を和了るなんて考えられない。そもそも面前で打てばもつと高打点が狙えていた手なのに…

親番が流れてしまったことに危機感を感じながらも咲に少ない点棒を支払う。

『清澄宮永選手前半戦以来の和了り！2回目の嶺上開花です！しかしこの場面でこの和了は…』

『なにか考えがあつてやっていると思いたいが…』

流石に藤田もこれは擁護できない。分かりきっていることだが各校と龍門渕高校とは圧倒的な大差がついている。つまり和了ったら局が進む子番で求められるのはただ一つ、大物手のみなのだ。しかし咲は余りにも安い手で和了った。和了ってしまった。そしてこの時点でこの和了の意図を理解しているのは和了った本人である咲と鷺巢のみであつた。

(和了れた…大丈夫和了れるんだ…)

(そうかそうか…そういう事をしてくるか…面白いっ…)

詰まるころ咲は1回和了つておきたかつたのだ。自身の力が通用するのだろうか。そして和了つて最後の親番を迎えたかつたのだ。流れを作るために。

南家 清澄 104300 (+2000)

西家	龍門渚	168900	(1500)
北家	風越女子	68700	(1500)
東家	鶴賀学園	58100	(11000)

大将戦はついに大詰め…後半戦南場を迎える…

猛追

(そうか……この小娘の親番か)

宮永咲……高打点を望める手牌にも関わらず鳴きを入れて、安手をしてまで強引に和了ってきた。それもこれも自身にとつての良い流れ……直後に迎える親番のために追い風を作るためだろう。そしてそれはこの状況を正確に掴んでいる事にほかならない。

また先程から明らかに彼女の周囲を纏う空気が一変した。いや正確に言えば靴下を脱いで裸足となったその瞬間……ようやく枷を外し本気で逆転を狙ってくる構えだ。驚巢は僅かに口角を吊り上げる。やはり対局は相手に張り合いがなければ面白くない。

大将戦後半戦南一局 親・清澄 ドラ・(三)

東家 清澄 104300

南家 龍門洩 168900

西家 風越女子 68700

北家 鶴賀学園 58100

咲配牌

(1289 四赤五六七八九東北白) 打 (北)

さて肝心の配牌だが槓をして手を進める咲としては珍しく順子系の手。しかしなかなかの好配牌をもらっている。ソーズの辺張がネックだがツモに恵まれればメンピン一通などが狙える。

どうやら前局での和了りで少しずつだが流れが来ているらしい：この最後の親番での配牌が何れ程重要か分かっている咲は内心安心しつつ浮いている字牌である北から切っていく。

鷺巣配牌

（一 一 三 五 一 一 四 七 九 ① ③ ⑥ ⑧） ツモ 〔一〕 打 〔⑥〕

（さて……これはどう打つか……）

対する鷺巣の配牌はチャンタ系……ただ嵌張の形が目立つ。面前で仕上げればそれなりの打点は期待できるであろうが、鳴きを入れなければ早々に和了る事は難しい手格好。

咲の親番を流しておきたい鷺巣としては良くはない配牌と言える。だが鷺巣はこの場面で……いやこの場面だからこそ6筒を打ち、チャンタ……あわよくば純チャンの決め打ちを選択。ここで大物手の直撃を取り、咲に僅かに残っている逆転の芽を完全に摘み取るつもりでいた。

「ボン」

六巡目

咲手牌

（123二四赤五六七八九九白白） 打（白）

場は進み六巡目。順調に手を伸ばし、イーシャンテンとしていた咲だったが、ここで華菜から切られた九萬にすぐさま飛びつく。そして対子となっていた白を切り出した。

『えっ……この形から九萬を鳴くんですか!?それに白切り……』

『普通はありえない鳴きだが……』

どこか含みのある言い方をしたが藤田の言うとおりのこの九萬鳴きは一見すると愚行としか思えない。

みすみす三、六、九萬の三面張形を捨て、白切りした事で完全に役なし……雀頭アタマもなくなってしまう。それに手が進んでいるわけでもなくイーシャンテンから変わっていない。

しかし嶺上牌を常に把握している咲にとってこれは当然の鳴き……和了りへと近づく重要な鳴きである。

（嶺上……ならば……）

（また加槓か……?）

（また!?!）

卓上では三人が咲の思惑に気づいていた。しかし気づいた所でどうすることもできない。ゆみは自身の手牌を見下ろすがそれはまだテンパイには程遠く、形も悪い。

前半戦で咲の加槓を槍槓で討ち取れたのは牌勢に恵まれた故の偶然にすぎず、あれをもう一度やれと言われればゆみは迷わず無理だと答える。しかし鷲巢は何かを閃いたようでツモる手に力が入り始めていた。

七巡目

咲手牌

〔123二四赤五六七八白〕 副露 〔九横九九〕 ツモ 〔三〕 打 〔白〕

『清澄宮永選手、ドラの三萬を引きテンパイですが…』

『…役なしだな』

『そうですね…これでは和了れな…『いや、そんな事はないさ』…』

次順の咲のツモは好都合な事にドラである三萬。これで嵌張が埋まる形で二、五、八萬のノベタン待ちのテンパイへと漕ぎ着ける。だがこれは形だけ…役がない為当然これでは和了れない。

なぜ白の対子を落としたのか…などと疑問を感じた実況がその辺りを藤田へ尋ねようとしたが目さえ合わせないまま軽くあしらわれてしまう。

実況は諦めたように内心でため息を吐き対局に視線を戻す。いずれにせよこの後の

清澄を見ていれば自ずと咲の思惑が見えてくるはずだ。

(引いた…これで嶺上ツモ…!?)

十巡目

咲手牌

{123234赤五六七八} ツモ (九) 副露 (九横九九)

さて誰も鳴かないまま数巡が過ぎ十巡目。咲は待望の九萬…槓材を引いてくる。咲が感じ取った嶺上牌によればこれでまた嶺上開花で和了る事ができる。

九萬を手牌に加えることなくそのまま加槓しようとする咲だったがその瞬間チリツ…と頭をかすめる僅かな違和感がして再び思い留まった。まるで大きな…致命的ななにかを見落としているような…

咲は何事かと素早く場況を見渡し下家である鷺巢の河を確認し、心臓が飛び跳ねそうになった。

鷺巢捨牌

{6中4西3五}

{879}

序盤から中張牌が連打されている不自然すぎる捨牌。まず真つ先に疑われるのは国士無双。ただ国士でなくともあの捨牌ではヤオチュウ牌付近が怪しいだろう。この局

は自分の手を気にしすぎていたが為に他家に対する警戒が疎かになっていた咲だが、それでも寸前の所で気が付けたのは大きな要因があった。

それは前半戦で槍槓による振り込みをしていたこと……あの時和了りのみを見据え無警戒に加槓を行い、結果的に鷲巢とゆみに放銃……頭ハネにより鷲巢のみの和了りとなつたがルールがルールならダブロンを食らつていた。その強烈な出来事が咲に加槓が秘めている危険性を認識させたのだ。

(でも……は勝負にいくしかない……)

だがだからといって九萬を抱えてしまつてはこの手は死んでしまう。ソーズの順子を崩して混一色に向かう、改めて一通を狙うなどというのもなくはないが、そのソーズがまた切りにくい……それにテンパイを崩して張り直し和了るまでに最低でも三、四巡はかかる。最早その猶予は残されていないだろう。となれば危険を承知で加槓するしかない……咲はそう腹をくくり、改めて手にしていた九萬を晒し力強く宣言する。

「カン！」

『……まさか……』

咲は九萬を加槓する。ここでようやく実況も感づいたようだ。

咲は問題の鷲巢に視線を移すが和了る素振りは見られず、手先すら微動だにしない。何とか放銃しなかつた事に安堵しながら嶺上牌に手を伸ばして手牌を倒した。

「ツモ！」

咲手牌

〔123二三四赤五六七八〕 ツモ (五) 副露 (九九横九九) (加槓)

「2600オールです！」

『なんと再び嶺上開花だー！なんだこの和了はー!?』

新ドラは中となり満貫には届かなかったもののリンシャンツモドラ2となり2600オール。決して小さくない和了りとなつて連荘となる。

この全てを見透かしていたかのような和了りに実況も興奮気味にマイク越しに叫ぶ。ここまでやられては最早偶然とは言い難いだろう。この少女もまた異質であることに清澄を除く三校の選手たちも薄々感づいていた。

鷺巣手牌

〔一一一一二三一①①①七〕

『しかし惜しかったものの凄まじい手を張っていたのは鷺巣選手…あの配牌からここまですべて仕上げていました』

『清澄が一通にこだわっていれば和了目はなかったな。それに鷺巣も策を講じていた』

この局の分岐点となつたのは六巡目。この時点で既に鷺巣は一萬を4枚抑えていた。咲が九萬を鳴いていなければツモ番はずれず、直後の三萬は上家のゆみに入っていた。

となれば咲はテンパイすらままならず、そのまま鷺巢の和了りとなっていた可能性が高い。

結果論だがあの局面で九萬を鳴くことこそが咲の和了りのために残された道だった。

と、ここで実況が藤田の解説の中で気になるワードがあったことに気づく。藤田が言う鷺巢の策とは一体なんなのだろうか。考えてもいまいちピンと来なかったように直接尋ねることにしようだ。

『あの…先程おっしゃっていた鷺巢選手の策とは…』

『ああそのことか…あいつ…明らかに清澄の加槓を狙った打ち回しだった』

『え!?!』

『でないと直前の9索切りの説明がつかんだろ』

鷺巢は八巡目に9索待ちの純チャン三暗刻三色同刻ドラ1：ほぼ完成形であるダマ倍満をテンパイしていた。しかしその後ツモってきた七萬を確認するやいなや9索と入れ替え：純チャンが消える七萬単騎へと待ちを変えた。萬子の混一色気味だった咲の河に対する対応ともとれるが、本命は咲から直撃を取る準備だと藤田は睨んでいた。

事実ここから八萬をツモり、1筒辺りを落とせば三暗刻と三色同刻が消えるものの六、九萬待ちに取ることが出来る。しかしこれは余りにも都合がいい話だ。当然山からピンポイントで八萬を引くのは困難である。

ただあの少女なら…鷺巢衣和緒なら次巡にでも張っていたのではないか…とあり得なかつたタラレバを考えてしまう藤田であつた。

(読みは当たつていたが…一手違いか)

結論から言えば藤田の読みはほぼ正しかつた。ほぼ…といつたのには理由がある。鷺巢は次のツモが八萬であると確信していた。ただ一巡…もう後一巡届かなかつた。

鷺巢は成就しなかつた大物手を伏せ、ガラガラと崩す。その顔にまだ焦りの色は見られない。

東家 清澄 112100 (+7800)

南家 龍門洩 166300 (12600)

西家 風越女子 66100 (12600)

北家 鶴賀学園 55500 (12600)

大将戦後半戦南一局一本場 親・清澄 ドラ・④

五巡目

華菜手牌

(1112246789東南南) ツモ (赤5)

(おお…ド嵌張の赤引きでテンパイ…)

この局も誰も鳴くことなく淡々と進んでいたがなんと早々に華菜が高め面前混一色

南ドラ一の満貫：リーチかつモれば跳萬のテンパイ。

華菜の配牌は形は悪かったもののソーズが多く強引に混一色か清一色を狙っていたが、なんと辺張、嵌張が次々埋まりほぼ無駄ツモなしのテンパイと相成った。

華菜としては突然巡ってきた好機に乗りたい所：しかしこの勢いのままリーチとは打って出れなかつた。待ちとなる2索、南が殆ど河に切られているからだ。

2索は既に種切れ：南も1枚切られているため、残るは南1枚のみ。その1枚に運命を託すくらいならまだ手を伸ばしにいった方がいいだろう。幸いまだ巡目も浅い。

3索を引いてくれば一通が確定し、9索なら九蓮宝燈のイーシャンテンとなる。他のソーズでも南を落とし清一色に向かえば、打点も見込める上に多面張のテンパイとなりやすい。

(よし。この手を伸ばす!) 打 (東)

「カン」

(な…また!?)

華菜が手牌から東を切ったその瞬間響いた発声：それは咲からのもの。そもそもカンなど滅多に見るものではないはずだ。だと言うのに今日の対局でのカンは何回目だろうか。ここまでの事を考えるとまた嶺上開花で和了ってくる可能性が極めて高い。余りにも理不尽な展開に華奈は齒を強く食いしばった。

咲手牌

①①①②③678白白 ツモ (①) 副露 (東横東東東)

「嶺上牌は1筒！なんとまた嶺上開花だーっ！」

「…もいつこカン」

「えっ…」

「嶺上ツモを放棄して暗槓…か」

咲は華菜からの大明槓で1筒を引き嶺上開花ツモ。当然誰もがこれで手牌を倒すと思っていたが予想に反し咲は1筒を4枚晒して暗槓を宣言。再び嶺上牌へと手を伸ばす。

「ツモ」

咲手牌

③③②③678 ツモ (④) 副露 (■①①■ 東横東東東)

「嶺上開花東ドラ1…70符3翻で12300点です」

「宮永選手なんと親満…高めのドラをツモり直しましたー！」

(え…というかこれって…あたしの責任払い!?)

責任払い…通常は役満の包などに適応されるルールだが、この大会では大明槓からの嶺上ツモでも責任払いとなる。

ただ大明槓をするケース自体がどうしてもドラが欲しい場面など限られている上、そのまま嶺上開花で和了ることが滅多にないため半ば形骸化されたものである。

今回は華菜が切った東で咲が大明槓し、暗槓を挟んでツモ和了ったため華菜がその責任を取り、12300点全てを支払わなければならない。

華菜の手はうまく伸びれば倍満、三倍満まであった。しかしその手を逃したばかりか放銃もしていないのに一方的に点棒を吐き出すこととなった。そして元々絶望的だった点差が更に広がり、最下位に転落。

普通の打ち手ならもう勝負を諦めて自暴自棄になつてもおかしくない。

(まだまだ…わたしの親番は残っているじゃないか…まだ逆転できる！)

だが強靱な華菜の心は折れなかった。勝てる可能性が少しでも残っているなら全力で戦う。またチャンスは来ると信じ打ち続ける。

東家 清澄 124400 (+12300)

南家 龍門測 166300

西家 風越女子 53800 (112300)

北家 鶴賀学園 55500

「符ハネ満貫か…珍しいなあ」

「ふはね…なんですかそれ」

「…んーとなー」

場所は変わり鶴賀学園控え室。蒲原が漏らしたふはねと言う聞きなれない単語に戸惑う佳織。

符計算は極めて複雑であり、下手をすれば役さえなかなか覚えられない佳織の頭がパニックしかねないと考えたゆみが敢えて教えていない。故に満貫以下の点の計算はまだ自分たちがフォローしていた。説明してしまってもいいものかと考えたがまあいつかと簡単に結論を出して説明する。

「大前提として麻雀の点は翻と符で計算してる。翻は役を作れば上がっていくけど符は手の形そのものに加算されていくんだ」

「う…うん…」

「で、70符以上だと3翻でも満貫扱いになるんだな。えつと…今回の清澄の手は…」

咲手牌

〔三三三〕②③⑥⑦⑧ ツモ 〔④〕 副露 〔■①①■〕 東横東東東

この形だと東の明槓で16符、1筒の暗槓で32符、ツモ和了りで2符…これに基本20符を加えてぴったたり70符。

「うえ…難しそうです…皆さんいつも計算してるんですか？」

説明を聞き終わっても佳織はいまいちピンと来ていないようだ。目に見えて混乱しており、頭の中では数字が浮かんでは消えて、また浮かんでは消えていく。あの様子だと頭はショート寸前。

ただ佳織がこうなるのも当然だ。麻雀の初心者いきなり符計算を理解しろという指導者はまずいない。それこそ小学生に因数分解を教えるようなものだ。

「うむ…私は考えながらは打っていないな…和了ってから計算している」
 「…私も気にしてないっすね」

「まあ今は無理して覚える必要はないな。余裕が出来ればって感じだな」
 「わ…分かった…」

非常に頼りなさそうな声で答える佳織に対し、いつものようにワハハ…と笑う蒲原。実はいつまでかかるかなーなどと考えていたのだが、周りにそれを感じられることはなかった。

大将戦後半戦南一局二本場 親・清澄 ドラ・〔北〕

「ロン…北ドラ3で8000は8900」

「はい…」

ゆみ手牌

(①②三四五九北北北) ロン (③) 副露 (横六五七)

続く二本場は河が二列目に入った直後にゆみが咲からロン和了りし、これでようやく咲の親番が流れた。形は自風のドラ暗刻を抱えたインスタント満貫。

混一色に移る前の仮テンであったがこのままだと咲に和了られることを危惧し、直撃を取れるならと和了った。これが華菜から出ていれば見逃していただろう。

(こ)はしかたがない……このまま清澄に連荘され続けるのも良くない……)

むしろ重要なのは次：南二局の鷲巢の親番だ。確かに大ピンチだが見方を変えればチャンスでもある。ツモ和了り出来れば親かぶりを食らわせられるからだ。

ここでもし役満をツモ和了りすれば鷲巢との差は48000点縮まり、その後の親番を逆転が現実的な点差で迎えることが出来る。それにはともかく配牌だ。目も覆いたくなるような駄配牌が来てしまつては話にならない。

ゆみはこのために和了して流れを引き込み、次局少しでもよい配牌がくる事を刹那に願う。

東家 清澄 115500 (18900)

南家 龍門洩 166300

西家 風越女子 53800

北家 鶴賀学園 64400 (+8900)

大将戦後半戦南二局 親・龍門渕 ドラ・(三)

ゆみ配牌

(一二三三七九478④赤⑤発中) ツモ (発) 打 (中)

(…厳しいな…)

しかしゆみの願いも虚しく、手は順子系の平凡な手。発の対子があるため早和了りは狙えるものの、鳴いてもせいぜい発ドラドラ止まり…この局面で和了るべき手ではない。と言つてもここから大三元を狙うのも無謀すぎる。

ただ幸いにも両面形が多く有効牌さえ入ればテンパイは早そうだ。ならば基本面前で進め、リーチ一発など偶然役に頼るしかない…そう考えたゆみは中から切り出す。

六巡目

咲手牌

(四四四六六2227②③④⑥) ツモ (六) 打 (⑥)

この局真つ先にテンパイしたのは咲。六萬を暗刻にしてのタンヤオ三暗刻。リーチをかければ満貫確定だが咲は一旦6筒を切り7索待ちに取る。

『宮永選手テンパイ！三暗刻確定…ダメテンに構えます！』

『当然の仮テンだ…6筒も7索も単騎で待つには無謀すぎる。いい待ちになるまで待つのがセオリーだ。』

中央の数牌は手牌の中で使われやすく、河に切られにくい。そのため単騎待ちには向いていない。せめて暗刻にくつつけての二面待ちにしたいところだ。

またここから強引に四暗刻を狙いにいくのも面白い。

七巡目

咲手牌

〔四四四六六六2227②③④〕 ツモ 〔五〕 打 〔7〕

『あつと宮永選手絶好の所を引いてきた！えつと…これは五面張…ですよ？』

『ああ五面待ちで合っている。考えられる限りでの最高形だな』

次咲、五萬を引き三々七萬のどれでも和了れる五面張となる。これならリーチをかけた一発ツモなども期待出来るし、安めでも裏ドラ次第では跳満もある。

しかし咲はここでもリーチをかけず7索を曲げない。そして咲が切った7索に反応したのは下家の鷺巣。

〔7索か…〕

鷺巣手牌

〔二二三三七八九3489⑦⑧⑨〕

鷺巣の手は高打点が狙えるイーシャンテン。咲から切られた7索は三色が確定する急所牌。辺張形のためここは鳴いてテンパイに取るのが定石である。

鷺巢も反射的にこの7索を手に取ろうとしたが、その動きはすぐに止まった。

(ちっ…儂としたことが血迷ったか…鳴いてテンパイをとるなど…)

鷺巢は鳴くことを一瞬でも考えてしまった…ジリジリと詰め寄る咲のプレッシャーが無意識のうちに逃げる者の思考となつていた自分に苛つく。この手は面前で打ち、親つパネ、親倍を和了り突き放すべきだろう。

そう結論を出し、咲の7索は見逃し…一瞥しただけでツモ山へと手を伸ばす。自身の豪運を絶対的なものと信じる鷺巢だからこそ出来る判断である。

同巡

鷺巢手牌

(二三三七八九3489⑦⑧⑨) ツモ (7)

(そうだ…っ！これこそ鷺巢の麻雀…)

その直後7索を自力でツモリテンパイに至る。平和三色ドラ2とダメでもツモれば跳満。役もありリーチをかける必要がない場面だが鷺巢は迷うことなく点棒箱を開く。その動作に対局室全体に緊張が走り抜ける。千点棒が投げられ、二萬が河に叩きつけられた。

「リーチ…！」

(うっ…)

(やはり来たか…)

『来ました親リーチ！メンピン三色ドラ2で跳満確定です！』

『威嚇の意味合いもこめたりーチだな…これでもう迂闊に動けなくなつた』

皆が一番避けたかつた展開。それは言うまでもなく鷺巢のリーチ。放銃は問題外…。親の鷺巢に放銃してしまえばただでさえ果てしない鷺巢との差が更に大きくなる。

だからといって手をこまねいてはいずれツモられてしまう。となればこのリーチを掻い潜つて和了るしかないのだが…それには地雷原を通るように危険牌を切らなければならぬ。正に至難の業である。

同巡

華菜手牌

(一一八45778③④⑤東東) ツモ (②)

(とても振り込めないし…とりあえず現物を…) 打 (東)

役もドラもなく打点が期待できないリャンシャンテンの華菜はこの時点で自分の和了りを諦める。無理に攻めた所でやはり明らかにメリットとデメリットが釣り合っていない。

また美穂子の言いつけ通り再度鶴賀と共闘したいところだが、鷺巢への一発放銃は絶対に出来ない為ここは一旦保留せざるを得ない…とりあえず現物である東の対子から

切り出し、2巡の間他家の出方を伺う姿勢を取る。

同巡

ゆみ手牌

（一二三七八六七八④赤⑤⑦発発） ツモ （②）

（く…東は鳴けない…）

ゆみにはある確信があった。このままツモ番を回してはまずい…鷺巣ならまた一発でツモってくるに違いない、と。となれば鷺巣に振り込まないように鳴きやすい牌を切る必要がある…と鷺巣の河に視線を送る。

鷺巣捨牌

（東白⑦北九七）

（横二）

手牌の中で確実に通る現物は二萬、七萬、7筒の3枚。このうち二萬、七萬は切れば実質和了放棄となってしまう。二萬は中抜きとなるし、七萬を切れば今度は八萬の処理に困る。この八萬は裏スジとなる本命牌…到底切れる牌ではない。よってゆみは残された7筒を手にとって切り出す。誰かがこの意図を理解して鳴いてくれることを期待しての打牌。しかし残念ながら発声はかからず、暫くの静寂の後咲がツモ牌に手を伸ばした。

(駄目か……こうなつては清澄に期待するしか……)

七巡目

咲手牌

(四四四五六六六②③④) ツモ (2)

『宮永選手ツモってきたのは2索!』

『槓材……だな』

「カン」

(……片筋が死んだ……いや……儂にツモすら回さぬか……)

咲は2索の暗槓を宣言し、慣れた手つきで嶺上牌へと手を伸ばす。凶らずして鷺巢の当たり牌を潰す形となった。

鷺巢は咲の和了を感覚的に感じ取り、静かに手を伏せる。自分の……それも親リーチに對して暗槓するというのは普通なら自らの首を絞める行為に等しい。しかし、この少女だけは例外だ。既に和了る目処がついているのだろう……終始笑顔を崩さない。

咲手牌

(四四四五六六六②③④) ツモ (六) 副露 (■22■)

『嶺上牌は六萬……本来は嶺上開花ですが……』

新ドラが乗らなかつたため、和了つても嶺上開花ツモタンヤオ……満貫にも満たない。

…となれば前局見せたようにここから手を高めに動くはずだ。現に咲はツモった六萬をそのまま牌を倒す素振りを見せない。

「もいつこ…カン」

咲手牌

〔四四四五②③④〕 ツモ 〔四〕 副露 〔■六六■ ■22■〕

『な…三枚目の嶺上牌は四萬です…』

『…これは…』

予測通り咲はここでは和了らず六萬を四枚晒して連槓。これで三、五萬の二面待ちに変化する。しかしツモってきた牌は4枚目の四萬…これも槓材。これは流石に藤田も予想外だったようで一瞬言葉を失った。

「カンツ…ツモ！」

咲手牌

〔五②③④〕 ツモ 〔赤五〕 副露 〔■四四■ ■六六■ ■22■〕

〔嶺上開花ツモタンヤオ三暗刻三槓子赤1：4000、8000です〕

北家 清澄 132500 (+17000)

東家 龍門洩 157300 (19000)

南家 風越女子 49800 (14000)

西家 鶴賀学園 60400 (14000)

『清澄高校宮永選手、なんと倍満ツモー! 6400が16000と化けたー!』
『きつちり赤を引いて倍満か…これでえーと…30000点差を切ったか?』

ここに来て遂に咲が鷲巢を射程圏内に捉える。点差が詰まったことで逆転が現実的となり、観客席も再び盛り上がり始める。もとより人間は奇跡の逆転劇を望むものである。

それに無名校清澄が優勝の大本命である龍門渕を大逆転で下す…これ以上のドラマはない。結果会場全体が自然に清澄の応援をする空気となっていた。そして対局室でも。咲が逆転勝利に向けて確実に吹いている風…確かな手応えを感じていた。

ー決着まであと2局。

決着

「ぬう…あの清澄の打ち手、なかなか奇怪…衣が打ちたかつたぞー！」

「…幾分と差が縮まってしまいましたわね…大丈夫でしょうか…」

「おいおい今更何言ってるんだよ」

衣は確かに咲からは何かしらの底知れぬ物を感じ取っていた。しかしそれは鷲巢と比べれば些細なものであったし、事実序盤は鷲巢の前にペースを掴めずに失点を重ねていた。その姿に一度は失望仕掛けたものの、後半戦に入ってから鷲巢を紙一重で躲しつつ和了り続ける咲に評価を一転、ソファアから身を乗り出し目を輝かせる。同じ卓で打ってみたいと心の底から思っていた。

その一方透華は確実に縮まっていく点差に焦りを隠せていない。しかしそれもしようがない…一時の大量リードは見る影もなく今や3万点もない。大物手ならば一度の和了りで逆転できる点差だ。

この状況を前についつい漏らしてしまった弱音に対して、先程まで無言のまま戦況を眺めていた純が口を挟んだ。

「あいつなら心配するまでもない…リードを守るどころか広げて帰ってくるさ」

「純……？」

「堂々と見守るべきだろうが……一応部長なんだからよ」

その一言を聞き、一応は余計ですわ！などとのたまう透華。確かに鷲巢は衣ですら凌駕する途轍もない打ち手である。だが後半戦に入ってから清澄の和了りが目立ち始め、正直鷲巢は押されているようにしか見えない。

しかし純は何も問題はないと考えていた。これは純だからこそその見解である。実は衣に次いで鷲巢との対局回数が多い純……当然鷲巢の打ち筋や強みなども熟知している。その中で純が最も脅威に感じたのは他人の流れなどを分断するかのように強引に大物手を和了りてくることだ。そのくせして一度流れに乗らせてしまえば怒濤のような和了りが続く。場の流れを操る純とは最悪の相性と言つていいだろう。

それに前半戦のように清澄より先にカンをして妨害を仕掛けるなど対応策がないわけではない。ここらで流石に動いてくるはずだ。

「……全くもって恐ろしい奴だよお前は……敵だったらと思うとゾツとするな……」
純のその小さな呟きは誰の耳にも届かなかつた。

「ク……クク……」

(ひっ……)

(にや!?)

(なんだ…なにがおかしい…?)

一方対局室では鷺巢が奇怪な笑い声を上げていた。比較的広い部屋であるがその声は不思議と響き渡る。

当然卓上の三人は声の発生源へと視線を向けるが当の鷺巢は手で目を覆い隠している為、表情は何えない。そしてそれが気味の悪さを増長させている。

(なるほど…どうやら詫びねばならぬようだっ…)

その鷺巢は咲を甘く見ていたことに悔いていた。

そもそも鷺巢の照準はあくまで全国大会インターハイ…そしてアカギとの再戦に漕ぎ着けること。それらの通過点でしかない県予選では、ただただ退屈な麻雀を打たなければならないだろう…と考えていた。だがその予想はいい意味で裏切られる。

決勝戦前に清澄の宮永咲からだならぬオーラ…力を感じたからだ。しかしいざ対局が始まってみれば、確かにその力は凄まじいものの経験が足りないのか所々にボロ…致命的な隙が見受けられた。例えば加槓に対する警戒心の欠如などが挙げられる。

その惨状を見て恐るるに足らずと咲へのマークを緩めてしまった。それが結果として吹っ切れた咲の猛追を許してしまったというわけだ。

今の自分は衣や透華たちの思いを背負っている。ならばこれ以上差を縮められる訳

にはいくまい…何ふり構わず叩き潰す。そう決めた刹那、鷺巢にある変化が起こった。

(ん…?)

(なんだ…気のせいかな…?)

それには三人がほぼ同時に気づいた。華菜に至っては訝しげに何度も目をこすっている。しかし余りにも非現実的…そして僅かであったため会場の光源のせいだと深く考えず鷺巢から目を逸らし、各自次局の配牌を取っていく。

…普段打っている部屋であれば間違いなくその小さな変化に気づいていた。しかしここは普段と違う環境である対局室。また徐々に外が暗くなってきたこともあり部屋の照明も強くなっている。偶然にもこれらの要因が組み合わさったことで見過ごしてしまった…鷺巢を中心に微かな光が纏っていることに。

大将戦後半戦南三局 親・風越女子 ドラ・〔北〕

西家 清澄 132500

北家 龍門洩 157300

東家 風越女子 49800

南家 鶴賀学園 60400

華菜配牌

〔224五赤五六九①赤⑤⑥西中中中〕 打 〔西〕

(ここ)だ……(ここ)が最後のチャンス……)

この局親番の華菜は改めて意気込んでいた。しかしそれも当然であろう。なぜなら彼女にとってこの南三局が事実上のオーラスだからだ。

鷲巢と大差をつけられている今、この連荘できる親番は細い細い逆転への活路……希望の光。しかしこれは逆にも言えるため、もし親番をあつさり流されてしまえば終戦……。優勝はほぼ不可能となってしまう。

よつてここがまごう事なき勝負どころ……重要な局面。華菜は手牌を見下ろし、とりあえず安堵のため息を吐く。幸いにも配牌は良好……中の暗刻があり速攻も狙える上にドラも2枚あるため打点にも期待できる。ここは迷うことなくオタ風である西から切り出し、ツモの伸びに期待する。

ゆみ配牌

(五六七2赤5669④④赤⑤⑦東) ツモ (③)

(これは三色……か……?)

一方ゆみもタンヤオや三色が見える形の好配牌。ラス親が残っているとは言えこの局も面前で高い手を和了っておきたいゆみにとつては上々である。あらかじめ右端に寄せていた東に手を伸ばしそのまま切り出す、それを遮るかのように響く発声。

「ポンっ……」

鷲巣手牌（他家視点）

〔■■■■■■■■■■〕 副露〔東横東東〕 打〔⑥〕

（第一打のオタ風をポン…？）

ここまで暴れた鷲巣が今更無駄な行為をするとは到底思えないゆみは何が狙いかと思考を張り巡らせる。まずチャンタやトイトイ、役牌バックなどが本線だろう。

そして鷲巣にとってこの局清澄に和了られることはなるべく避けたいはずだ。現状25000点差と逆転には少々苦しいが、点差が縮まってしまえばオーラスでの逆転条件が幾分か緩くなってしまふ。逆に最良は自身が和了り、他家を更に突き放すことだが…とここまで考えこんでまもなく、辻褄が合う一つの仮説に辿り着いた。

（そういうことか…）

二巡目

華菜手牌

〔2245赤五六九①赤⑤⑥中中中〕 ツモ〔3〕 打〔九〕

（よし！ナイスポンだし！）

鷲巣が鳴いたことで再び華菜のツモ。華菜はここでネックだった嵌張が埋まる3索を引いてきて早くもリャンシャンテン。どうやら喰いずれたことが功を奏したようだ。

有効牌の数も非常に多く、手を進めやすい形である。この局はもらった…と期待が確

信に変わった華菜であつた。

同巡

ゆみ手牌

〔五六七2赤5669③④④赤⑤⑦〕 ツモ 〔7〕 打 〔9〕

〔駄目…九萬は鳴けない…〕

鷺巢に危機感を覚えたため、鳴いてでも手を進めようと思つていたゆみだが華菜から切られたのは九萬…これでは鳴けない。

しかしツモつてきたのは567の三色が明確となる有効牌の7索。これ幸いとタンヤオを狙うにあたつて不要となる9索を切り出すが、ここで再び鷺巢が動いた。

「カンつ…」

（う…またつ…？）

鷺巢手牌（他家視点）

〔■■■■■■■■〕 副露 〔9横999〕 〔東横東東〕 ツモ 〔■〕 打 〔⑤〕

鷺巢は切られた9索を大明槓。このカンにより咲は二巡続けてツモを飛ばされたことになり、また先にカンをされたことで顔から余裕が消え、動揺が見え始めた。

これこそが鷺巢の狙い。麻雀の大前提としてどんなに優れた打ち手でもツモが出来なければ手牌は変わらず進まない。そのツモをさせない為には鳴いてしまえばいいの

だ。手の進みは明らかに周囲に比べて遅くなるため、圧倒的なハンディを抱えさせる事ができる。

なんの因果かこれは鷺巢巖として打った最期の局で対面の悪魔が使ってきた戦法でもある。使ってみて改めて確かに効果的だ…と感じる。ただ鷺巢の恐ろしいところはコンビ打ちでもないのにこれをやつてのけることだ。

鷺巢は嶺上牌をツモリ僅かに笑みを浮かべた…：どうやら有効牌を引き入れたらしい。ゆつくりと流れるような手つきで手の内に入れ、その手で7筒↑5筒を切ってきた。そしてこの直後、局面がひっくり返す致命的な事が起こってしまう。

(と…：とりあえずカンドラだし！)

カンが入ったということは必然、新ドラが発生する。この局王牌が目の前にある華菜が手を伸ばし新ドラ表示牌を人差し指一本で捲る。

願わくば自分の手にごっさり乗ることを期待していたが、現実是非情であった。そこに見えたのは…：8索。よって新ドラは鷺巢がたった今4枚晒した9索。

「乗ってくれたか…：クククっ…：カカカ…」

(ドラ4だと…)

満貫以上が確定するドラ4…：これでは迂闊に甘い牌を打ち込めず、どうしても消極的になってしまう。たかが二巡目とはいえ順子を落としてきたのだ…：相当手がまとまっ

ていると見ていいだろう。現にゆみと咲は怯んでしまっている…この局は下り気味に
ならざるを得ない。

(ドラ4なんて関係ないし！先に張って先に和了る…それだけだ！)

しかしその中で唯一華菜だけが手なりに真つ直ぐ打つと決意を固める。

そもそも鷲巢が張っているという確信もない…せいぜいイーシャンテン程度だ…そ
うそう都合よく手が入ってこないだろうと自分に都合のいい全く根拠のない決めつけ
…

だが元々後がない華菜に退くという選択肢はない。その先がたとえ奈落の底であつ
ても走り続けるしかないのだ。

二巡後

華菜手牌

(2234赤⑤⑥⑦中中中) 副露 (横七赤五六)

(2ー5索…引け…)

華菜は四巡目に鷲巢から七萬を鳴き2、5索待ちのテンパイとしていた。ただ懸念の
鷲巢はこの二巡とも手出し…張っているかいないかの判別がつかない。

そしてソーズ待ちのため下り気味である鶴賀や清澄からの差し込みも期待できない
…だが今の華菜はそんな事思ってもいなかった。他人なんて関係ない…先に引けばい

いだけ：そう感覚を麻痺させていた。しかしこの巡目のツモで一気に肝を冷やすことになる。

五巡目

華菜手牌

〔2 2 3 4 赤⑤⑥⑦中中中〕 副露 〔横七赤五六〕 ツモ 〔北〕

（な…）

よりにもよって生牌のドラである北を掴んでしまった。普段ならドラ引きは喜ぶべきことだが、今の華菜の手牌では北が完全に浮いている。しかしツモ切ろうにもこれだけは厳しい。

鷲巢の手がトイトイにせよ混一色にせよチャンタにせよ：北はその全てのキー牌。さらに北は鷲巢の自風であるため、言わずもがな超危険牌である。なんでこんな土壇場で持ってきてしまうのかとやり場のない苛立ちを覚える。だが切らなければ2索切りで北の単騎待ちにするしかないのだ：とても出和了には期待できない。

悩む必要なし：と華菜は北に右手をかけるが、なかなか河に動いてくれない。視線を右手に送ると僅かに右手が震えていた。無論武者震いなどではない：無意識の恐怖心からきた震えである。

清老頭を振込みかけた：いや実質振り込んだ局面が脳裏によぎり始める。それを皮

切りはこのドラを鳴かれました。…いやいや振り込んでしまったら…などと一度持ってしまった疑念は消えるどころかどんどん大きくなっていった。

(…なに考えてるんだし私は！切れ！切れ！)

華菜は懸命に自分に言い聞かし、その疑念を拭いさろうとするが一向に手は固まっていて動く素振りすら見せない。華菜は北を切ることが出来ず、代わりに手にとった2索を卓に打ちつける。この2索もなかなかの危険牌であったが無事に通ってくれた。結局己の恐怖心に打ち勝つ事が出来なかった華菜は深く沈み、自分を責めていた。

(なんで…手広く取るところだろ…ここは…)

嫌でも分かる…いや分かってしまった。ここで切れなかった北はもう二度と切るこゝとができない…と。つくづく後一步踏み出せなかった自分に腹が立つ。

この局和了ることが出来なければ駄目だというのは重々理解しているのに…

(助かった…2索は通しか…)

同巡

ゆみ手牌

(五六2赤5667③④④⑦南発) ツモ (一) 打 (二)

危険牌ばかりを引き安牌が尽きかけていた所だったゆみにとつて、2索が安牌となつたのはありがたい。今引いた一萬も切りづらい牌だった為、ノータイムで2索を切り出

した。

これを見た華菜の表情が歪む。合わせ打ちだとは分かっているが、北を押ししていれば……とついつい後悔してしまう。そしてまもなく……

「ツモ……」

上家の鷺巣からの和了り宣言が華菜の親番の終わりを告げた。

鷺巣手牌

〔23九九北北北〕 副露 (9横999) (東横東東) ツモ (4)

〔北ドラ7…40000・80000…〕

(北は通っていたのか…いや…)

北は当たり牌ではなかった…なら切るべきだったんじゃないか…そう考えたが華菜はあることに気づく。もし北を切っていたら鷺巣がどう動いていたか…

反射的に目の前の嶺上牌に視線が移る。見てもなんの意味もないことは分かっている。だが純粋な好奇心には抗うことが出来ず、そつと手を伸ばし牌をひっくり返した。

(なんだ…どつちにしろ駄目なんじゃないか…)

そこには力なく1索が転がっていた…北を切るか切らないかなどと葛藤していたあの時点で自分の和了りはなかったと思ひ知らされる。

北を切らずとも暗刻で持たれていては和了り目がないではないか……こんな理不尽があるのか……その目に涙が浮かんだ。

西家 清澄 128500 (14000)

北家 龍門洩 173300 (+16000)

東家 風越女子 41800 (18000)

南家 鶴賀学園 56400 (14000)

『……龍門洩鷲巣選手貫禄の倍満！再び他三校を突き放したー！』

『一気に流れを引き戻したな……』

『さあ県予選団体戦もついにオーラスを迎えます！長かった決勝戦もいよいよ最終局面ですー！』

『……さあ、どうなるかな……』

目の前で繰り広げられている応酬に次ぐ応酬はとも地方大会クラスのものとは思えない。圧倒的な力、それに対する対応力、策略などは圧巻の一言に尽きる。ただまだオーラスが残っている……まだ対局は終わったわけではない。

大将戦後半戦南四局 親・鶴賀学園 ドラ・(2)

ゆみ配牌

{一四九九279①②⑨東北白中}

(…九種十牌…か)

なんともため息をつきたくなるような配牌であったがよくよく数えてみれば九種十牌…見方を変えれば国士無双サンシャンテンである。

しかし九種十牌の形から国士を和了れる可能性はせいぜい3%…33回に1回の確率と言われている。役の性質上鳴くことが出来ずツモに全てが懸かる上に、捨牌がどうしても派手になり警戒されるためだ。よって一般的には流すのがセオリーと言われているが、この局面では話が変わってくる。

(和了ることが出来れば…)

和了り続ける限り負けはない…言葉にするのは簡単だが、この卓で連荘を続けるのがどれほどの奇跡か…重々承知している。

なにせ13万点差だ。何回和了ればまくることが出来るのかとても見当がつかない。だがこの手を和了れば一気に差が詰まり、龍門測を射程圏内に捉えることが出来る。

そして点差の関係上、清澄と風越に振り込むことはない…これが大きいアドバンテージとなる。これらからゆみは流さず、2筒を打つ。まさに一蓮托生…この手に賭ける。

咲配牌

一四三①②②③③④⑦南発 { ツモ ⑥ } 打 { 一 }

(…)

鷲巢からの直撃…それも三倍満以上が要求される咲。先程までの風は完全に消えてしまい、向かい風となつていているような気さえする。しかしこの手を仕上げる他に道はない。咲はここから打一萬とする。

華菜配牌

〔三五八八22579⑦⑧⑧北〕

（考えるんだ…ここからどう打つか…）

華奈は既に勝ち目がない…流局が何十回と繰り返されれば逆転できなくもないがそれはもう天文学的確率である。

だが華奈は最後まで勝負を捨てない。勝つ可能性が残っている限り、諦めない。これが華菜の長所であり短所でもあるずうずうしさだ。

様々な思いが駆け巡る対局室は独特な雰囲気にも包まれている。各校の控え室はもちろん、観戦室やそして実況解説ですら固唾を飲みこみ見守っていた。

「…長かった…なかなか楽しめた…」

が…その静寂を破つたのは理牌を終えた鷲巢。ボソツ…と呟いた声だったがその声はやたらと響いたため3人の視線が鷲巢に集まる。

まるで対局が終わったかのような発言であるため、その目は一体なにを言っているのかと訝しむものに変わる。

(またこいつは…)

(なにを…)

「まあ待て…!」

その視線の意味合いに気づいた鷺巢が顔を隠そうともせず、山に又つと手を伸ばす。ツモ牌を一目した鷺巢は奇妙な笑い声を上げ始めた。口角が吊り上がり、白い歯が丸見えとなつて下唇に涎よだれが伝う。

その余りにも異常な光景に卓全体に圧倒的な悪寒が走る…それは人間を始め動物が皆持っているもの…決して叶わぬ者を目の前にした時、脳より発せられる生存本能である。

鷺巢はツモってきた牌をそのまま手牌に加えることなく卓に打ち付け、手牌を力強く倒した。

「ツモツ…! ツモだ…!」

鷺巢手牌

(二二二七七七一一⑥⑥西西西) ツモ (七七)

「地和、四暗刻…ダブルはなかったか…80000・160000…」

鷺巢、理外の和了…地和四暗刻——

団体戦終局

南家	清澄	120500 (18000)
西家	龍門渕	205300 (+32000)
北家	風越女子	33800 (18000)
東家	鶴賀学園	40400 (116000)

会場がまるで時が止まったかのように静まり返った。唐突な終局に誰しもが起こつたのか理解できない。

ゆつくりと波を打つように一人、また一人と事態を飲み込んでいく。やがて会場全体が地鳴りのような歓声で埋め尽くされた。

『な…なんと地和が出ましたー！なんとという幕切れ！県予選決勝はこれで完全決着です！』

『地和とはな…末恐ろしいやつが出てきたもんだ…』

『そして優勝は龍門渕高校！昨年に続き全国大会に駒を進めることになりました！』
『…』

興奮している実況を尻目に藤田は考える。龍門渕は昨年全国ベスト8まで勝ち上がっている。昨年の時点で既に少数精鋭の完成されたチームだった。

だが今年はそのに驚巢を加えたことで攻撃力を中心に大幅に力を増している。他の三校も健闘したものの終わってみれば龍門渕の大勝だ。さらに他の高校にとっての辛

い現実は、来年もこのメンバーがまるまる残るといふ事だ。当然経験を積み、強くなっているはず…よほどの事がない限り、来年も長野は龍門渕が制するに違いない。

長野のレベルが上がっていることは地元のプロチーム所属の藤田にとつては喜ばしいことだが…敗戦した悪友ともいえる清澄、竹井久のことを考えると少し胸が痛んだ。

「じゃえ…終わってしまつたじよ…」

「こんな事つてあるのかよ…」

清澄高校控え室では皆が項垂れていた。全国の壁を打ち破る事は出来なかつた。去年までの龍門渕ならデータを駆使して勝てていたかもしれない。だが鷲巢衣和緒という理不尽が全てを狂わせた。

途中までは明らかに咲の流れになりかけていただけに敗戦を受け入れることができなかつた。

「あれ…和は…」

さつきまでソファアに座っていた和がいなくなっている。一体どこに行つてしまつたのだろうか。京太郎のその言葉にすっかりぬるくなつた飲みかけの紅茶を一口啜り久が答える。

「…須賀君…少し考えれば分かるでしょうが…」

その声自体はいつも京太郎をからかっている久の様子と何ら変わらない。だがいつもの活気ではないことに付き合いが長いまこだけが気づいた。

(久…お前これからどうするんじや…)

その言葉は辛うじて口に出さなかった。口にしてしまえば何もかもが壊れてしまいそうになったから。

久は団体戦での全国大会出場のためにこれまで個人戦にも出場しなかった。まこはこの場にいる誰よりもその思いが大きいことを知っている。

その目標が敗れてしまった今、個人戦こそエントリーしているものの今年の夏は終わったと言っている。久はもう麻雀を辞めるかもしれない…そう思ってしまった。

「ほら…咲さんあなたのせいじゃありません…私たちはまだ力不足だったんです…」

「でも…うっ…」

対局が終了してすぐさま部屋に飛び込んできたのは原村和。息切れを起こしているところを見るにどうやらチームメイトである宮永咲が気がかりで走ってきたようだ。

和を見た咲は皆に対する罪悪感から泣き崩れてしまい、和に肩を借りつつその場を後にする。今日の敗戦を糧に成長するかどうか…彼女次第だ。

「わ…私は楽しかったし！」

次に立ち上がったのは華菜。その目にもう涙はなく、満面の笑みを浮かべている。押されっぱなしで和了りも少なかったのに前向きに物事を考えるその姿はとても眩しい。個人戦でリベンジだ！と捨て台詞を吐いて去っていった。その勢いに押され、自分は個人戦に出ないことを伝え忘れたことに気づくのはもう少し後のことである。

(国士の和了り目はなかったのか…)

後ろに控えていた審判もいつの間にか姿を消していたため、対局室に残ったのは鷺巢とゆみのみとなった。

ゆみは1索が鷺巢の手に暗刻…そしてドラ表示牌を含めて4枚使われていたことに気づいた後、手牌を伏せ軽く笑いゆつくりと立ち上がって鷺巢に握手を求める。

「こんな麻雀もあるんだな…勉強させてもらったよ」

鷺巢は少し呆気にとられたが鼻息を漏らしつつ、握手に応じる。

この小娘とはどこかで再戦の時が来るだろう。当然今より力をつけて、だ。何となくそんな気がした…と、ここで別の用事を思い出した鷺巢は去ろうとしていたゆみに声を掛ける。

「なんだ？まだ何か用か？」

「いや貴様自身に用はない…貴様のところの次鋒だ」

(貴様って…)

龍門渕の新入生の教育はどうなっているんだ…とゆみ内心思うが、他校生であるためトラブルを起こすつもりはない。

「…妹尾のことか？」

「ああ確かそんな名前だったか…貸せ」

「は…？」

鷺巢のとんでもない発言に啞然とするゆみ。…この突拍子もない行動が1週間後の個人戦に大波乱を巻き起こすことになる。

特訓

「い……いきなり何を……」

鷺巢からの理不尽な要求に対して、一瞬思考が停止していたがしばらくしてゆみは戸惑いの声を上げる。

脈絡もなくチームメイトを貸せと言われて、どういう事か理解する方が無茶だろう。それを見た鷺巢は軽いため息を吐きつつ話し始めた。

「……少しあの小娘に興味が沸いてな。特にあの強運……儂にかかれば磨きがかかる……なに悪いようにはせん」

「……」

どうやら自分の聞き間違えではなかったことにゆみは軽く頭を抱える。

それは彼女にとつて到底聞き入れられないもの。考慮にも値しない。鷺巢の態度や余りにも一方的な言い分が気に食わないのもあるが、何よりも自分たちでは佳織を生かすきれていないと言われているようで少ししゃくに触った。

「……悪いがそれは「いいんじゃないかゆみちゃん」……蒲原!？」

「ワハハ……話し込んでるみたいだったから……」

当然断ろうとしたが、ゆみにとつては聞き慣れた間延びした声が遮った。その声はいつの間にか対局室に姿を見せていた鶴賀学園の部長である蒲原智美。

「どうやらある程度話を聞いていたらしい蒲原は意外なことに鷺巢の提案に乗り気味であつた。」

「いやー佳織にはやっぱり経験が足りないからなー。いい機会じゃないか」

「だからといってだな…」

確かに蒲原の言うことも分かる。むしろゆみ自身もそのことについて話していたくらいだ。だからといってこの鷺巢に預けるのはリスクが高すぎる。

磨きをかけるというくらいだ。何をするのかは分からないが、最悪何度も対局して実力差に自信を失つて個人戦に影響が出かねない。

「一応個人戦までには返して欲しいなー」

「…一週間…まあ十分か」

「お…お…お…」

話が早いと見た鷺巢は、ゆみを無視して蒲原と具体的な話をし始める。もしここに佳織がいれば全力で拒否するであろうが当の本人はこの場に行かない為、止める者がいない。この場に居合わせなかったことは彼女にとつてこの日初めての大きな不運である。ともかくこうして本人の承諾を得ないまま、話はとんとん拍子に進んでいった。

(あわわ…なんで…)

「ロン！16000だ佳織！」

「ぬ…間に合わなんだか…」

「お見事です衣様。佳織様も気を落とさずに…」

(私…ここにいますらう…)

その翌日。佳織は見知らぬ屋敷に招かれ、麻雀を打っていた。それ自体は麻雀部に所属している彼女にとっては珍しくもない。しかしここまで困惑しているのには確固たる理由がある。まずこの場になんの説明もなく連れてこられたことだ。

いつも通りの朝、いつも通りに学校に行くはずだった。しかし目の前に見たこともないような高級車が止まり、有無を言わずに乗せられた。それだけで混乱するには十分だが、その車の中に天江衣がいた事が混乱に拍車をかける。

その衣は佳織に対しやれ麻雀は強いかだの、やれ友達になつて欲しいだのと一時間程質問攻めにして屋敷に着く頃には佳織はクタクタとなつていた。

さらに卓を囲っているのが佳織にとつて馴染み深い鶴賀学園のチームメイトではないからである。そしてその面子は余りに異様で凶悪だった。

先程車の中にいた天江衣と龍門渕高校大将の鷲巢衣和緒。既に各メディアから注目

を浴びており、全国での活躍も期待されている。そして車の運転をしていたハギヨシと名乗った執事も人数合わせか卓についている。

一体なぜ自分はこのような状況におかれているのか。佳織は答えなど出るはずもない疑問を考え続けるのであった。

…ちなみにこの倍満振込みで3回連続3回目の飛び終了である。

「あの2人がいないと静かですわね…」

「そりや俺たちしかいないからな。…にしても透華、学校休ませてよかったのか?」

授業が終わり、龍門洩高校麻雀部室にはいつものように牌を打ち付ける音が響いている。だがここ最近では衣が鷺巢にじやれあい、鷺巢がそれを訝しみながらも受け入れるという光景がよく見られた為、物寂しきを感じてしまう。

さて純は透華が他校生を巻き込んだの特打ちなどという無茶をあつさりと許したことを不思議に思っていた。ハギヨシをつけるという条件付きではあるがそれでも異例である。純が知っている透華の性格を考えればバツサリと切り捨ててもおかしくないはずなのだが…

「問題ナツシング!あの2人なら校外学習中なので出席には響きませんわ。鶴賀の方にも圧力をかけておきましたから…あちらも大丈夫でしょう」

「…一高校生がする事じゃねえな…」

「親バカもここまで来ると逆に感心しちゃうよ」

今回の特打ちのため驚巢は衣にしばらく泊まりに来て欲しいと告げると、衣は大喜びし二つ返事で頷いた。個人戦にエントリーしておらず、退屈していた衣にとつては正に渡りに船だったのだ。透華は話を聞き最初はとんでもないと断ろうとしたが、衣に説得され半ば押し切られる形で許可を出してしまった。それに規則を確認したところ、グレーゾーンではあるが一応問題ないらしい。

元々衣のために全国や世界のどこかにいる衣と対抗できる者を探すために麻雀部を作り替えたのだ…。その衣が喜ぶなら多少のわがままで何でも聞いてあげたい。それが保護者としての責務だと考えていた。かと言って他校にまで圧力をかけるのはやりすぎだろうが。透華の強引さを知り尽くしている純たちも若干引き気味である。

「ハギヨシもつけていますし…ええ心配などしていません」

「おっそれ高めだ。跳満で12000だな」

「私も。5800」

「なっ…」

無警戒にドラをツモ切りしてダブルロンを食らい、絶句する透華。言葉ではそう言ってもやはり心配している透華であった。

「なあ衣和緒……佳織は本当にすごいのか？ いや確かに稀に幾許か感じるが……」

「ふえ……？ だから何回も言ってるじゃないですかあ！ 私なんて全然……」

衣の疑念は半荘を重ねる度に大きくなり、遂に言葉に出してしまつたのは7回目の半荘が半ばに差し掛かつた頃だつた。

だがそれも仕方のないことで、衣はここまで佳織に対し全く強者の手応えを感じていないのだ。むしろ切り順は滅茶苦茶で、時折チョンボをしかけ、手つきもおぼつかない様子からただの初心者にしか見えなかつた。

ここまでの順位も驚巢が圧巻の打ち筋で1位、昼間でやや力の劣る衣が後を追う形で2位、そして場を荒らさないように振らずに打つハギヨシが3位をそれぞれキープ。となれば必然的に佳織はずつと最下位であり、和了りもないまま飛ばされ続けている。

そして佳織も佳織でこんな場違いな場所に連れてこられたのは何かの間違いだはずつと思つている。自分とこの2人には天と地ほどの差があり、到底敵うはずがないと今日散々に思い知らされた。

「いや……間違いない。手を開いてでも打てばその異常性に気づくだろうが……」

手牌を倒して見えるように打てば、どのようなツモや手順なのか丸わかりだがそれでは麻雀にならず、衣が納得しない。結局佳織が和了つて手を晒してくれるのを待つしか

ないのだ。

「リ……リーチします……」

(ようやくか……儂を散々待たせおって……)

(……これはなかなか……)

ようやくテンパった佳織が最早半泣きになりつつリーチをかけたのは次局の浅い巡目。この場の空気に押されているのか非常に小さい声である。その瞬間、凄まじい圧迫感が衣を襲う。それは鷲巢が度々纏う豪運の氣に似たもの。鷲巢程ではないものになり強力。対してこちらの手はまだ仕上がっていない。鳴いてずらしたところで大した影響もないだろう。これは近いうちに和了るな……そう確信した衣だった。そして案の定、次巡佳織はツモ和了る。

「あ……ツモです。リーチ一発に……役牌が……あつすいません。裏ドラをめぐらないと……」

「ははっ……なるほど……」

「……いえいえ……裏ドラをめぐする必要はありませんよ」

「……えっ……?もしかして私また何かチョンボをして……」

手を伸ばして相変わらぬの手つきで必要のない裏ドラをめぐろうとする佳織を止めず、声もかけない鷲巢。その姿が余りに滑稽だったのか笑いをこらえられない。

そしてハギヨシは執事らしく佳織を優しく諭す。部屋には衣の乾いた笑い声が響き、

状況が分かっていない佳織だけが右往左往していた。

佳織手牌

〔24 東東南南南西西北北北〕 ツモ (3)

「…面白い！次に行くぞ佳織！」

「え…えと…あの…そろそろ…」

「…ぬっ…もう昼餐の時刻か…ハギヨシ！」

「心得ております。この半荘が終わり次第、昼食に致しましょう」

「…あ…あの…その…」

「フフフ…狼狽せずともよいぞ！ハギヨシの作るご飯は絶品だからな！」

壁時計はとつくに正午を過ぎ、長針が下に傾きかける辺りだった。どうやら時間も忘れる程熱中してしまったようである。佳織はいつ帰らせてくれるのかを聞こうとしたが、衣は佳織がお腹が減ったのだと解釈してハギヨシに昼食を頼んだ。元々気の弱い佳織である…それ以降も幾度となく尋ねようとしたが結局聞くことができなかつた。

こうして佳織にとって相当過酷な麻雀漬けの日々が刻々と続いていった。

日々は流れ、あつという間に個人戦当日を迎えた。長野県の個人戦は2日に渡って繰り広げられる。まず予選として北ブロックと南ブロックに別れての東風20回戦を行

い、そのスコアの上位64名が翌日の本戦に駒を進め、半荘10回戦に挑む。そのうちの3位までに入れば、晴れて全国大会への出場権が与えられるというわけだ。

さて龍門渕高校と鶴賀学園は共に北ブロック…つまり同会場での試合となる。ここで佳織と合流する約束になっている鶴賀学園麻雀部一同は、人に次ぐ人で溢れんばかりのロビーから少し離れたところで落ち着かない様子で待っていた。

その中でもゆみは特に心配している様でしきりに腕時計を確認する仕草が目立っている。

「まだ時間には余裕があるが…」

「そろそろ来るんじゃない？」「智美ちゃん…？」「ワハッ!?」

後ろから不意打ちのように声をかけられ、肩がびくつく蒲原。しかし聞き馴染みのあの声であった。振り返ると目の下に少し隈を作っている佳織が涙をためて佳織に飛び込んできた。大分強く飛び込んだようで蒲原からは変な声が漏れる。

「ひどいよ智美ちゃん！私だけこんな…うう…」

「ま…まあまあ…」

同級生の津山睦月がなだめるが、泣きじやくる佳織は暫く蒲原の胸に顔をうずめていた。その姿を見て流石に少しだけ罪悪感を感じる蒲原であった。

「ところで…向こうで何をやってきたんだ？」

「ずっと普通に麻雀をやってただけで…あつても、変わった麻雀も打ちました。実験だとか何とか…牌がガラスで…」

「ガラス…？」

ようやく落ち着いた佳織にゆみがこの一週間のことを尋ねる。ここまで参っているということはこつ酷くやられてきたのだろうが、どういう特訓を受けてきたのかは純粹に興味があつたのだ。効率の良い練習法なら自分たちの練習にも取り入れても面白いと思っていたが、佳織から返ってきたのはよくわからない言葉の羅列だった。

ガラスで作られた牌など聞いたことがないし、透けた牌で麻雀ができるとは思えないのだが。かつて鷺巣麻雀と呼ばれていたこの特殊な麻雀についての概要を詳しく知ることになるのはまだまだ先の話である。

鷺巣と衣は人ごみを避け、壁際のソファに座っていた。衣の手には自販機で買ったオレンジジュースが握られている。

先日の団体戦で顔が売れ、また目立つ服装も相まって近くで取材していた新聞や雑誌記者が気づき話を聞こうとしていたものの、鷺巣や衣らが持つ特有の空気にあてられ近づくことが出来なかった。

「そういうえば衣和緒…あの麻雀牌だが…」

「…あれか…あの麻雀は特別…あやつとはこれでないとな…」

「衣和緒…?」

鷲巢が小さく呟いた声が一部分聞き取れなかった衣が振り返って驚く。衣ですら見たことがない表情を浮かべていたからだ。

それは言うなれば恍惚…その機会を渴望しきついているといった様子である。

(…)(…)(…まで衣和緒が所望する輩とは一体…)

鷲巢が再び相対する日は刻一刻と近付いている。

「さあ県予選個人戦を迎えました。解説は引き続き藤田プロです。よろしくお願いします」

「なんだ…衣と鷲巢は出ないのか…」

パンフレットを眺めていた藤田は明らかに落胆していた。あの2人がいない個人戦になるとは…楽しみが減ってしまった。となると全国出場は風越の福路、清澄の原村や宮永。あと龍門洩辺りが本命だろうか。

ただ前評判通りでも面白くない。誰かダークホースか現れないだろうか…などと藤田はぼんやりと考えていた。そしてその願いは予想以上の形になって叶うことになる。

それからまもなくして対局が始まった。各部屋で熱戦が繰り広げられている中、特に

やることもない鷺巣と衣はモニター観戦もせず欠伸あくびをしつつ、仮眠室に向かっていた。ここ数日麻雀を打つために睡眠時間を犠牲にしていたツケが回ってきたのだろう。暫くして仮眠室からは規則正しい寝息が聞こえてきたという。

東風20回戦が終了し、軒並み藤田の予想通りの面々が上位に食い込んでおり、他にも団体戦で活躍した選手の名前も目立っている。そしてなんと佳織も本戦進出に滑り込んでいた。

果たして全国行きのキップを手に入れるのは誰なのか…それは誰にも分からない。

熾烈

一夜明け、個人戦予選の2日目を迎えた。予選を通過した64名の雀士達が一同に集まり半荘10回戦を行う。予選と比べて参加者は少ないもののチームメイトの応援や観戦に来ている者が多く、やはり会場は溢れんばかりの人で覆い尽くされている。

そしてその中には団体戦の決勝まで駒を進めたものの惜しくも敗退した清澄高校の姿もあった。どうやら無事全員予選を通過したようである。皆表情は明るい。

「ちえ…あそこで倍満に振り込まなかったらな…」

「いつまで言ってるの京ちゃん…」

訂正しよう…唯一の男子部員である須賀京太郎は早々に敗退してしまつたようだ。

「じゃえ!?今日は南場もあるのか!?!」

「優希…部長が言つてましたよ…」

「…よく聞いていなかったじゃよ!」

アハハハッ…と呑気に笑う優希を見つつ、和はひそかに胸をなでおろしこの1週間を振り返る。

団体戦敗退直後の咲はトップを陥落させてしまった責任からひどく青ざめ落ち込ん

でおり、個人戦出場が危ぶまれるまでに深刻な状態だった。元より和たちは咲のせいとは微塵も思っていないのだが、責任感の強い咲はしばらく部室に出来ない程自分を攻め続けていたのだ。この退部すら考えられる状況から予選2位を取るまで持ち直したのは皆の健身のサポートがあったからにほかならない。特に京太郎の支えが大きかったと思う和はありますがとうございます…と咲の右隣にいる京太郎に心の中でこっそり礼を述べた。

「それで京ちゃんは…!？」

「咲、どうした？」

「いや…ちよつと…その…」

さてその咲だが、緊張した様子もなく京太郎とたわいのない話をしていた。しかし唐突に身に覚えのある寒気を感じ取り身震いを起こし、軽くうろたえながら周囲を見渡し始める。

その仕草を不思議に思った京太郎が咲に聞くも返ってきた返事は曖昧で要領を得ない為、何かあるのかとその視線の先を追った。

「…あー！龍門渕！」

「おお！久しいなノノカ！」

「衣さん…なぜここに…」

その先には咲たちが散々苦渋を舐めさせられた龍門渚高校の天江衣と鷺巢衣和緒がいた。京太郎がやたらと大きい叫び声をあげたせいかわこうも気づいたようで、衣はこちら側に駆けて、鷺巢もゆっくりと歩いてくる。

だがなぜ個人戦に出てもいないこの2人がここにいるのか。観戦に来たと思えばそれまでだが…少し違和感を感じた和が返す言葉でそのまま質問する。

「…なにただ観に来ただけだ。少し気になる奴がおつてな…ククツ…」

それには衣の変わりに鷺巢が答える。観戦とは言うものの意味ありげに含みを残す鷺巢はどこか楽しそうに見える。

そして用はもうないと言わんばかりに、鷺巢は小さく笑い声を上げながら衣とどこかへと行ってしまった。

(…気のせい…ですね。それより清澄が団体戦で敗退した以上この個人戦…負けるわけにはいきません)

微かに嫌な予感が頭をよぎったがすぐに消え去ったため、特に気に止めなかった和。まもなく久の呼びかけで対局の組み合わせを確認するべく電光掲示板を見に向かった。

ちなみに咲はあれ以来鷺巢に強烈な苦手意識が出来たようで暫く会話に参加せず、ずっと京太郎の後ろに隠れっぱなしであった。

(ん?これは…)

昨日に引き続き解説を任されている藤田は控え室にて出場選手たちのデータ書類をチエックしていた。

しかし団体戦でも活躍した選手たちが予選の上位を占めていた為、やはり順当に県代表が決まるかと少し気落ちした矢先に興味を引く名前を見つける。順位こそ29位と平凡だが問題はその内容にあった。

南浦数江…その名前に聞き覚えはなく、彼女が所属している平滝高校も毎年団体1回戦負けが続く弱小校。今年に至っては部員が足りなかったのか出場すらしていないはずだ。

(振り込みが極端に少ない…それに南浦…か…)

数字だけの大雑把なデータなのではつきりとはわからないが放銃が明らかに少なく、全選手中でもトップクラスといえる。

そして数少ない和了で僅差で競り勝っている。正に「耐える麻雀」の完成形。そして藤田はこのスタイルを貫き通すプロ選手を知っている。

その選手こそシニアリーグで活躍する南浦プロであった。名字が同じこともあり、十中八九関係者だろうと決め込む。もし昨日力をセーブしていたのであれば今日爆発さ

せることは間違いない。なるほどこの南浦が台風の目玉となるか……そう思わせるのに十分な材料に、人知れず胸の高鳴りを覚える藤田であった。

そしてまもなく本戦……激戦の火蓋が切つて落とされた。流石に初日を勝ち抜いてきた猛者達だけあつて非常に高いレベルの試合展開となつている。

しかし対局数が進んでいくに連れて混戦から抜け出し、上位を快走する者も現れる。その中でも特に頭一つ抜きん出ているのは……二人。

「ロン……満貫で終了ですね」

『福路選手またしても一着でフィニッシュ！全国行きをほぼ手中へと収めました！』

一人目は風越のキャプテンである福路美穂子。安定感のある打牌で大きく沈むこともなく、無難に全国出場を決めた。

昨年に引き続き団体戦で全国を逃しているだけあつて、名門風越女子の面目を守り切つたといえるだろう……後輩部員からタオルを受け取り一息つくその表情には明らかに安堵が見える。

「ツモ。嶺上開花です」

『宮永選手今日も絶好調！全国行き決定です！』

もう一人は清澄の宮永咲。持ち前のスタンスを生かし、嶺上ツモを連発。結果、最終

戦を前に暫定一位である福路に僅差で2位につけ、ここで3位以上が確定。

更に最終戦はこの二人が直接ぶつかり合うことになっており、長野1位という特別な肩書を賭けての戦いに観客も盛り上がっている。

しかし同等…いやそれ以上に観客の興味を引いているのは、熾烈を極める残された全国行き最後のキップをかけての3位争いであった。

(フッフ…チャンス…これはまたとないチャンスですわ！)

最終戦を前に対局室で他の選手たちを待つ暫定四位の透華は人知れず浮かれていた。団体戦では叶わなかったのどつちこと原村和との対決がこんな大舞台で回ってくることに運命を感じる。そして透華の頭の中にはすでにこの後のビジョンが描かれている。

和とのデジタル雀士対決に完勝し、逆転で全国出場を決めた自分にあらゆるマスコミが大注目。テレビや雑誌で次々と特集が組まれることで更に取材が押し寄せ、持て囃される毎日…

「私目立ちまくりですわ！オーホッホッホ…」

「あ…あの…よろしくお願ひします…」

「オーホッ…は！」

和に話しかけられ我に返る透華。不意を突かれたことで考えていた口上も言えず、い

まいち締まらない出会いとなつてしまった。しかし咳払いをし、強引に仕切りなおそうとする。

「…原村和！私はあなたを「おっ揃っているようだな」…」

だが新たに部屋に入ってきた3人目：鶴賀学園の加治木ゆみに遮られる。暫定5位のゆみにも全国出場の可能性が残っているだけに少し気張っている様子で椅子に座る。

「私は今年で最後なんだ。悪いが勝たせてもらおうぞ」

「…そうはいきません。ところで何でしよう龍門渕さん」

「い…いえ…なんでもありませんわ…」

（わ…私の存在感が…）

完全にタイミングを逃した透華は小さくなるばかりであった。

『えーこの最終戦で決着となるわけですが…ここで現在の点数状況を今一度確認しましょう』

『そうだな…気になる選手もいることだし…』

最終戦が始まる直前、観戦室のモニターに大きく順位表が表示される。

今大会からルールが大きく改訂し、オカウマなどが採用された影響で順位の変動も起こりやすく状況が把握しづらいのである。

1位	福路美穂子	+284
2位	宮永咲	+278
3位	原村和	+203
4位	龍門渕透華	+200
5位	加治木ゆみ	+193
6位	竹井久	+184
7位	井上純	+179
8位	池田華菜	+172
9位	妹尾佳織	+169
10位	国広一	+163

『上位10名はこのようになっていきます。目まぐるしく順位が入れ替わってますね』
 『ん…？南浦はどうした？』

先程まで5位といい位置につけていた南浦数江が姿を消しており、ひっそりと目をつけていた藤田はつい実況に問いかける。

一日目はやはり力を温存していたらしく特に南場の伸びに目を見張るものがあり、期待以上の活躍を見せていた南浦だがここにきて大きく順位を落としたようだ。

『えーその南浦選手ですが…つい先ほど妹尾選手と対局しまして、東二局三巡目に大三

元に振り込みトビ終了となり13位に後退。逆に妹尾選手は9位に浮上しています』
『…あの妹尾か…9位!?』

三巡目での役満聴牌など察知すらできないだろう…不運な放銃に心底同情せざるを得ない。

そして直撃させたのは妹尾佳織…団体戦の決勝には似合わないド素人かと思いきや二局連続で役満を和了り、ド肝を抜いてきたよく分からない打ち手。本戦に出場しているだけでなく9位と好位置につけていることも驚きだ。個人戦になによりも要求される安定感が皆無であり、結果が残せるとは思えないが…

『最終戦、妹尾選手は原村選手を始め上位陣との対局となります。結果次第では逆転も十分にある大接戦となっております!』

『…そうか』

モニターが再び選手たちの映る対局室に切り替わる。どうやら大概の卓の場決めが終了しているようで、後は開始の合図を待つだけである。

今いろいろ考えても答えは出ない。見れば真価が分かるだろう…珍しく頬杖をやめ、腕を組む藤田。目に生氣が戻り光り始めた。

(ハア…私だけ…か…それに…)

「ククク…やはり飽きないな…あやつの麻雀は」

「なかなかやるではないか佳織は！」

（なんでこの2人が隣にいるんだー！）

鶴賀学園麻雀部員で一人だけ予選で敗退してしまった津山睦月は他の部員の応援に回り、観戦室にて席を確保していた。

そのまま暫く観戦していたのだが折り返しを迎えたころだろうか、この2人がやってきた。そう龍門洩が誇る2大エース天江衣と鷺巢衣和緒である。

席を立て移動しようにも見渡す限り満席でその余地がない。幸いこちらには話かけてこないの黙っていたものの…放たれるプレッシャーが凄まじく冷や汗をかきながらの観戦となるのだった。

「えーとこれはここです…」

（よりもよって4人目は妹尾さんですの!?!）

やはりおぼつかない手つきで理牌をする上家の佳織を横目で見る。

実は透華と佳織は初日の予選で同卓している。そこではリーチをかけた後に国士無双気味の捨て牌と手牌に気づき直撃を食らってしまった。

そして今日こうして自分の前に立ちふさがる辺り、衣と鷺巢による1週間の特訓は無

駄ではなかったということか。

(来るなら来てみなさい! もうあんなへまはしませんわ!)

「ノーテンですわ」

「ノーテン」

「テンパイだ」

「ノ、ノーテンです」

南二局終了時点(供託1000)

北家 龍門 瀧透華 12500 (―1000)

東家 原村和 37800 (―1000)

南家 加治木ゆみ 32400 (+2000)

西家 妹尾佳織 16300 (―1000)

(…ハッ! もう南三局!?)

南二局は決め手を欠き流局。テンパイしていたのはリーチをかけていたゆみだけであつた。

ここまでの透華の打牌は警戒のし過ぎ。その一言に尽きる。

佳織が動くたびに過剰に反応し、早々に危険牌を抱え回し打ちを始めていた。和了りに消極的になり、手の進みが遅れた結果他家に和了られる。振り込みこそ少ないものの

ツモ和了りでコツコツ削られている現状だ。

(妹尾さんは妹尾さんでここまで大きい和了りもないですし…)

親番も残っていない今そろそろ攻勢に出ないとまずい。そう感じた透華は多少不利な配牌でも勝負に出ることを決め、気を引き締めるのだった。

(妹尾…明らかに打ち筋が変わっている…)

佳織の変化に真っ先に気づいたのは先輩である加治木ゆみ。今までの佳織はろくに場の状況を読めず、テンパイ即リー全ツツパを地で行っていた。だが今はリーチに対して牌を選び、危なっかしいながらも降りることができるようになっている。

…ゆみは知る由もないことだがこれは余興であったガラス麻雀…通称鷺巣麻雀の影響である。4牌中3牌が透けて見える鷺巣麻雀では卓から得られる情報量が多く、相手の手牌や捨て牌、鳴きなど卓全体を見渡す観察眼が要求される。佳織も最初こそパニツクを起こしていたものの、時間をかけて何とか順応することに成功した。そして本人も気づかないうちに思わぬ副産物をもたらすことになった。

南三局 親・加治木 ドラ・〔2〕

七巡目

透華手牌

〔五六七2256④⑤⑤⑥⑦⑧〕 ツモ 〔③〕

(ナイスツモ！打点は十分ですがここは…)

「リーチ！」 打 (8)

ようやく手牌に恵まれた透華は七巡目に高めタンピン三色ドラ2の跳満をテンパイ。打点を考えればリーチは控える場面だが、少しでも点数が欲しい今、敢えて8筒切りでリーチをかける。点数に余裕のある和とゆみが振り込みを恐れ、降りることを期待してのリーチだ。

そしてその2人は一発放銃は回避しようと手出しで現物切り。和はベタ降りしていそうだが、親番であるゆみはどう出るかまだはつきりしない。

(あわわ…リーチ入っちゃった…)

佳織手牌

(8東南南西北北白発発中中) ツモ (東)

(えーと…ふたつずつふたつずつ…あつ張ってます！)

同順に佳織も七対子をテンパイ。しかし無作為に牌を切る前に透華の捨て牌に目を向ける。

透華捨て牌

(西東3-98)

(横8)

(8索が切られてる…じゃあ確実に通る方を…)

「リ、リーチです」 打 (8)

佳織は透華のリーチを考慮しての8索切りリーチ。

これこそ癖として根付いたリーチ者に対する捨て牌読みである。少なくとも今まで佳織では手が回らなかったことだ。

麻雀はリーチ者に対する警戒を怠らなければ放銃は極端に少なくなる。最もダメテンや鳴き手にはまだ対応しきれない。

(ふたつずつ…七対子ですわね)

透華は佳織の手が七対子であることを看破。…というよりふたつずつと呟いたり、牌が2つずつ固められているなどバレバレなのだが。

あくまで待ち牌が多いのは自分とばかりに先にツモってしまったえば問題ないとツモ山に手を伸ばす。そして数巡後ツモってきた牌を覗いた透華は軽く笑みを浮かべた。

「いらつしやいまし！ツモ！」

透華手牌

(五六七2256③④⑤⑤⑥⑦) ツモ (7)

「4000・8000いただきますわ！」

メンタンピンツモ三色ドラ2…きつちり高めをツモリ、裏ドラなしで倍満ホーラ了ー

『ここで龍門淵選手倍満ー！一氣にわからなくなってきました！いやーそれにしても…』

『妹尾の字一色七対子…和了れず仕舞いだったか』

『白が山に2枚残っていただけに妹尾選手がツモる度に固唾を飲んでいたんですが…』

『この手を和了れなかったのは痛いな。一応ラス親だから逆転の芽は残っているがな』

観戦室は見たこともない役満和了りを見逃したことでため息の渦に包まれる。しかし当の本人は大物手を逃したという自覚がなく、手を惜しむことなくあっさりと雀卓に流し入れていた。

西家 龍門淵透華 30500 (+18000)

北家 原村和 33800 (ー4000)

東家 加治木ゆみ 24400 (ー8000)

南家 妹尾佳織 11300 (ー5000)

南四局 親・妹尾 ドラ・(9)

透華配牌

(二四八八九45赤⑤⑦⑨⑨東西) ツモ (東) 打 (西)

(うっ…重い配牌ですわね…)

和と僅差に詰め寄り、さっと和了ってしまった場面での重い手。ドラ3だが対子

の東はオタ風であり和了るべき役が見えない。面前で仕上げなければならぬか……そう感じつつ西を切ったその瞬間、和が動く。

「ポン」 打 〔一〕

（鳴かれたー）

役確定の西ポン。和は1000点でも和了つてしまえば勝ちが確定する為、至極当然の鳴きである。ここから透華は和にむやみに鳴かせないように立ち回らなければならず、厳しい状況に立たされる。

（……ですが……ですが私はこの手を仕上げる以外勝ちはないですわ！）

透華の和に対する執念に牌が答える。なんとこの形から次々と有効牌を引き入れていった。

六巡目

透華手牌

〔七八八九45赤⑤⑦⑨⑨⑨東東〕 ツモ 〔⑥〕

（筒子が埋まって好形テンパイー！）

都合のいいことに嵌張が埋まって3、6索の両面待ちをテンパイ。だが懸念もある。和の捨て牌だ。

和手牌

〔■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■〕 副露 〔横西西西〕

和捨牌

〔一南⑧⑥⑦七〕

ゆみ手牌

〔■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■〕

ゆみ捨牌

〔南白東九八〕

佳織手牌

〔■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■〕 副露 〔横発発発〕

佳織捨牌

〔赤⑤①②⑨南⑨〕

〔なんて脂っこいところを…〕

和の手にテンパイ気配：直前に手出しで切られている七萬が怪しく光る。早々に中張牌を切り出している以上、最低でも手はイーシャンテン程度：既にテンパイしている可能性も十分にある。

だがここで回り道をしているわけにもいかない。意を決して八萬を手に取り、卓に強打した。

「通らば……リーチですわ!」

透華、八萬打ち。それに対する発声はなく、和がツモ山に手を伸ばした。何とか通つたことに透華は深い息を吐いた。

(…追いつかれましたか…)

和手牌

(七八③④④④⑤⑤123) 副露 (横西西西) ツモ (白) 打 (白)

しかし実は紙一重…和、六、九萬待ち。河を見る限り九萬が狙い目のいい待ちである。その前にツモってしまえば終わりなのだが、ここはもどかしい無駄ツモ。

だが和は顔色一つ変えず白をツモ切りした。

七巡目

透華手牌

(七八九45赤⑤⑥⑦⑧⑧⑧東東) ツモ (2)

(くっ…隣ですわ隣!)

こちらは真逆で焦りが顔に出ている。一刻も早く和了りたい…そう顔に書いてあるようだ。手牌にすら入れないまま再び強打で2索を卓に放つたその時だった。

「あ!それです!和了りです!」

「なっ…」

和了りの声は原村和ではなく佳織からのもの。親の連荘で仕切り直しですか…そう考えていたが倒された佳織の手は途轍もないものだった。

佳織手牌

〔2 2 3 3 4 4 4 6 6 6〕 副露〔横発発発〕 ロン〔2〕

「り…緑一色…」

「えっ…発ホンイツじゃ…あ、あとトイトイも…」

『き…決まったー！まさかまさかの緑一色！逆転で妹尾選手がトップに立ちました！』

『やってくれたなあいつ…河を見てみる』

『えっ…妹尾選手のですか…あつ…』

役満がオーラスで出たということに興奮を隠せない実況であるが、藤田は対照的に頭を抱えていた。それは佳織が最後の最後で大チョンボをしでかしたからに他ならない。

佳織捨牌

〔赤⑤ 1 二 九 南 9〕

「あ…あなた！1索切っているじゃありませんの！」

「えっ…それがなにか…」

「…妹尾。…フリテンだ」

透華が指摘しても佳織は気づかず、藤田と同じく頭を抱えるゆみが優しく諭す。例の

ごとく牌を2つ3つに区切っていた佳織は2、3索待ちのシャボ待ちだと思ひ込んでいたのだ。

しかし実際は1、4、5索も当たり…つまりフリテンチョンボで場が進まないまま親の罰符支払いとなる。だが佳織の点棒は12000点を下回っている為、払いきれない。

『えつと…この場合は…』

『どうもこうもない…罰符であろうとハコになればそれで終わり…試合終了だ』

『えー…試合終了です…この瞬間3人目の全国出場は原村選手となりましたー！』

場を盛り上げようとする実況だが、異例の試合終了に会場はざわつきが治まらない。

全国を見渡してもこんな形で個人の代表者が決まった前例などないだろう。

現に和は喜ぶどころか困惑しており、また一騎打ちの引き合いを邪魔された透華は真つ白に燃え尽き口から魂のようなものが出かかっていた。

終局

南家 龍門 瀧透華 34500 (+4000)

西家 原村和 37800 (+4000)

北家 加治木ゆみ 28400 (+4000)

東家 妹尾佳織 700 (12000)

「妹尾さん……」

以前ざわつきが止まらない観戦室の中で津山睦月は呆気にとられていた。佳織のチョンボは珍しいものではなかったがこんな場面でやらかしてしまうとは。

睦月は恐る恐る隣を見やる。あれ程佳織に入れ込んでいた2人だ……こんな結末に激怒しているに違いない。しかしそこには睦月の想像と違う光景が広がっていた。

「ククク……カカカツ……面白いことをしてくれたものだ……」

「ああ……実に恐悦至極！」

（はっ……？）

笑っていた。ただひたすらに手を叩いて笑っていた。それも呆れなどからくる笑いではなく、心の底から笑っているという感じである。

凡人である睦月には理解できない……いやもとより相容れない世界だろう。

「帰るぞ衣……ここはもう用済みだ……」

「あつ待つてくれ衣和緒！」

呆然としている睦月をよそに鷺巢と衣は立ち去る。睦月はその背中を黙って見送ることしかできなかつた。

……ちなみに余談だが透華が正気を取り戻すのはこれから3時間後のことである。

閑話

前哨

「…で、さつきから何をやっているのだ貴様は?」

「しっ!話しかけないでくださいまし!」

激動の個人戦も終了し、試合の余韻も残る翌日。龍門渕高校麻雀部室にて手足を組んだ不満気な鷺巣が透華に問いかける。

だが当の透華は目の前のノートパソコンから目を離そうとせずずっと凝視している。これが暫く続いているのだから文句も言いたくなるだろう。ちなみに鷺巣の隣にチヨコンと座っている衣もかなり苛立っている。

「今日はネト麻でのどつちが現れるまで待つつもりなんだって…まあ分からなくもないけど…」

「…いつまでかかるか…」

そんな透華を冷めた目で見つめるのは一と智紀。だが二人は透華に僅かだが理解を示していた。透華にとつてのどつちという存在がどれだけ大きいか知っているからである。

『のどっち』。ネット麻雀界のトップに君臨し透華が一方的にライバル視している打ち手である。その打ち筋は余りにも正確無比で隙が無く運営側が用意したプログラムなのではないかと噂されたほど。

だが透華はその年のインターミドル王者となった原村和にのどっちの面影を感じ、智紀と共に牌譜をすべて洗い流し研究に研究を重ねた。そしてようやく迎えた直接対決……だったのだが。とんでもない横槍が入ってしまった、中途半端に対局が終了してしまった。当然消化不良であろうと思っていた。

「……ともき……今から打てる？」

「無理。忙しい」

「だよー……」

ダメもとで智紀を麻雀に誘うもすげなく断られてしまう。というのも先日団体戦の全国出場校が出揃ったこともあって智紀はデータ収集に追われているからである。

智紀愛用のノートパソコンには幾つものウィンドウが開かれ、指が見えないほど高速でタイピングしている。その様子を横から覗き込んだ一は思わずうへえ……と声を上げるとも自分にはできそうにない作業だ。

「純くんは追試に引つかかったし、ハギヨシさんも休日でないしなあ……」

「外国語で赤点をとるなんて全く……龍門瀏家に仕える身としての自覚が足りませんわ

！」

「まあまあ……」

忘れがちだが龍門測高校は県内屈指の名門進学校である。幾ら部活動で好成績を残しているようと試験の成績が悪ければ追試が待っている。

ただ部活に熱中しすぎて勉強が疎かになる生徒は毎年少なからず出てきてしまう。そういう生徒の救済措置として全国大会前に追試を一斉に行うのだ。よってもうしばらくは帰ってこないであろう。

最終手段として部室に控えている龍門測家のメイド杉乃歩を入れるというのもありだが……初心者にも毛が生えた程度の彼女の彼女の實力では二人に筆むしられるのが目に見えている。一も歩が露骨に嫌がっているのが分かる為誘うのも気が引ける。

「チツ……大体ネット麻雀など素人共の戯たわむれにすぎぬだろうに……」

（あつそれはマズイ……）

「……それは聞き捨てなりませんわね」

イライラが最骨頂に達したか吐き捨てるように暴言を吐く鷲巢。だがその声は不運にも透華の耳に届いてしまった。デジタル雀士として高いプライドを持っている透華のことだ……簡単には引き下がらないだろう。面倒くさいことになったなあ……とは思わず天を仰いだ。

「確かに実際の麻雀と比べネット麻雀の敷居は低く初心者も多い…それは認めましょう…ですが！最上位である鳳凰卓ともなると決してプロの対局に見劣りしないレベルですわ！」

プロ雀士も大勢参戦しています。それにネット麻の成績優秀者とプロが対局する大会もありま「も、もういいんじゃない透華…」む…まあいいでしょう。分かってもらえたようですからね」

透華の豹変ぶりに珍しくタジタジの鷺巢や若干涙目の衣を見かねて一が助け舟を出す。透華は言いたいことは言えたようで案外おとなしくデスクに戻っていった。

「ちよつと軽率だったね…」

「しかしそこまでの価値があるのか？」

「やってみる？パソコンまだ余ってるから」

「むう…」

ネット麻を勧められるも正直気が進まない鷺巢。だが結局断り切れずとりあえずやってみる事になった。こうして昭和の怪物とまで呼ばれた鷺巢巖が平成の科学の結晶であるパソコンと相對することとなったのである。

「で、どうすればよいのだ？」

「へ…まさか本当にやったことないの？」

「ない。持つてもいないからな儂は」

「威張っていうことじゃないよ」

パソコンは立ち上がったもののデスクトップ画面でどうすればよいのか分からず固まる鷺巢。今時パソコンを使ったことがない女子高生はごく少数ではないだろうか。

操作が分からない鷺巢に代わり仕方なく一が昇龍門を立ち上げる。国内最大級のネット麻雀であり信用も厚く常時様々なイベントが開催されており、プロ麻雀連盟とも提携している。

「名前どうする？」

「…鷺巢ではないか」

「そういうわけにはいかないよ…うーん…衣和緒…衣和緒かあ…」

「よーし！衣も考えてやるぞ！」

意外に時間を取られたのがアカウントの名前だった。鷺巢自身はどうでもよかったのだが周りが無駄にこだわりを見せる。幾つもの案が出たのだが透華がごり押しした鷺繁がりのグリフォンに落ち着いた。

透華曰く鷺の英訳であるイーグルでは安直すぎることだがこれに智紀が思わずダサいと呟いてしまいひと悶着起きたのだが余りにも見苦しい為割愛する。

「…じゃあ始めようか…」

それから環境が整ったのはおおよそ二十分後のことであった。ごたごたに巻き込まれた一は若干疲れを見せつつも素早くデフォルトのままルールを設定し麻雀部屋を作る。

すぐに人数が揃い対局が始まった。ちなみに透華は原村和がログインしたようで既に対局を始めており、今は劣勢気味なのか唸るような声を上げていた。

一般卓東風戦

東家 高一☆最強

南家 グリフォン (鷲巢)

西家 ノツポさん

北家 姫様

東一局 親・高一☆最強 ドラ・〔白〕

一巡目

鷲巢手牌

〔六八23678②赤⑤⑥⑨白白〕 ツモ 〔七〕

「ほう…わざわざ牌を取らずともいいわけだな…」

（うわあ…いい配牌もらってるなあ…）

「で、牌は切る…と…」

「あつ…」

自動で配牌が進み自動で理牌もされる。鷺巢はそんな些細なことに人知れず感心していたわけだが一は鷺巢の配牌に内心呆れていた。

第一ツモで嵌張を埋める七萬を引いて早くもイーシャンテン。さらにドラの白が対子となつておりいつでも鳴きを入れ満貫を確定できる万全の構え。また面前で進めれば跳満まで望める好配牌である。どうやら鷺巢の豪運は機械をも超越するらしい。

本来ならこの手牌からは浮いている9筒を払う所。だがネット麻の操作方法が分からない鷺巢は適当にキーボードを打つ。

打 (白)

「がっ…儂は9筒を払おうとしたのだぞ…」

「9筒は隣…切り損ないだね…」

「ポン」

高一☆最強手牌

〔■■■■■■■■■■〕 副露 (白白横白) 打 (⑨)

「でもってしつかり鳴かれてるし…親に…」

「ぐぐつ…この…」

「ま、まあタンピン形にもできるから…腐らずやろうよ」

だが見よう見まねだったのが災いしたかドラの白を手放す痛恨のミス。そしてさすが機械的な声と共に上家の親が鳴き、親満を確定させてしまった。

思い通りにいかず早くも憤る鷺巢いぎとわだったが一がなんとかフォローする。白を切ってしまった今、一の言う通りタンピン形に寄せていくしかないだろう。

雀頭がなくなってしまうたが、手を整理している内にどこか重なるのを待つしかない。鷺巢は次巡は間違えずに白を落としその後手牌を進めていく。

九巡目

鷺巢手牌

〔六七八23678②赤⑤⑥⑦⑧〕 ツモ 〔②〕

「…ようやく張ったか…」

「リーチ」 打 〔赤⑤〕

もどかしさに苛つきながらも確定三色の満貫…ツモるか裏が乗れば跳満まである手をテンパイしリーチをかける。九巡目と多少遅れたのは鷺巢が気乗りしていない証拠か。

(でもいい両面待ち…河にも見えてないし、案外1索が出るかも…)

捨て牌と副露を見るにノツポさんはタンヤオ、姫様は萬子の染め手を匂わせている。そのため4索はともかく1索は手牌には使われていない可能性が限りなく高い。とな

ればツモ山にもかなり残っているはずだ。引いてくるのは容易だろう。逆にこの2人がツモつても手牌に使える余地はなく、そのままツモ切りするかもしれない。

「ツモ」

…すべて直後にツモ上がりが出なければの話だったが。

高一☆最強手牌

（一二三3456東東東） ツモ （3） 副露 （白白横白）

白 1翻

ダブ東 2翻

ドラ 3翻 跳満

「……………」

「…ああ！マウスが！マウスが壊れるから！」

無言で右手に握っているマウスを握りしめる鷲巢。手元から嫌な音が聞こえるのは気のせいではない。そしてその後、この手を逃したのが原因か集中力を欠き、切り間違いや鳴き損ねなど操作ミス誘発…終始ペースをつかめず後塵を拝す結果となった。

終局

高一☆最強 36200

ノツポさん 27300

グリフォン（鷲巢） 18700

姫様 17800

「……この儂が…僅差の3着だどっ…」

「も、もうネト麻はいんじゃないかな！ほらそろそろ純くんも来ると思うし…」

「そ、そうだ衣和緒！衣だつてねつと麻雀は好かないからな！」

一は既に察していた。鷲巢はパソコンとは衣以上に相性が悪い…と。見立てでは上達するのには相当の時間がかかる。大物手を狙える配牌には何回か巡り合ったもの、それを悉く無駄バカにしていた。現状ではこれ以上やつたところで大した意味もない様に感じる。それほど機械オンチなのだ。

「儂に……この場は引けというのか…貴様は…」

（あちゃー…完全に頭に血が上ってるなこれは…おとなしく見守っておこう…）

鷲巢の二人称が貴様となるのは相当頭にきている証拠だ。そしてその時の対処法は下手に触らずそつとしておくこと。放っておけばまもなく落ち着きを取り戻すだろう。

諦めた一を余所に再び対局を始める鷲巢であつた。

「やつと終わったぜ…どうも英語は苦手だな…なにがあつたんだこれは？」

「…まあいろいろあつてね…ホント…」

「い…衣和緒。純が来たぞ！さあ卓を囲もうではないか！」

「衣…今日は話しかけるな…」

「うう…いわお…」

(…こんな麻雀もあつたとは…くっ…)

すつかり太陽が夕日へと姿を変えた頃、純が追試を終え部室に顔を見せた。

透華がパソコンの前で燃えつき、鷲巢はこちらに背を向けソファーに寝転がっている。あの後鷲巢は同じメンバーと3度東風戦を打つたものの成績は振るわず遂に投げ出し不貞腐れてしまったのだつた。そんな鷲巢を衣が何とかしようとするがあえなく玉碎し涙目となっている。だが異様なのはその中であつて我関せずとデータをまとめ続けている智紀だろうか。その速度は全く落ちていない。

こんな惨状を説明できるわけもなく苦笑いで誤魔化す一であつた。以降鷲巢がパソコンを触ろうともしなかつたのは言うまでもない。

「ほう…泉。自主トレとは感心やな」

「どうも…船久保先輩。この打ち手なんですけど」

「なんやけつたいな名前やな…どれどれ…」

「不思議だよね…」

「まともに打ってれば全局トップかも…」

「私なりに頑張りました！」

「頑張ったわね小蒔ちゃん」

「にしてもこのグリフォンって打ち手…」

「案外下手なだけじゃないですかねー」

ちなみにこの日のみ現れた雀士グリフォンに全国各地が謎に包まれたのだがそれはまた別の話…

強豪集う全国大会まであと2週間。

全国編

上京

「また来たぞー！皇都だ！トウキョウだー！」

「こ、衣。まだ駅前だから静かにしないと…」

「全く！我が龍門渚が東京に降り立ったというのに！マスコミは何処にもいませんの
!？」

「…来るわきやねえだろ。さっさとホテル行こうぜ。荷物が肩に食い込んで痛いんだ
よ」

「あっち…」

八月も中旬に差し掛かりインターハイを目前に控えたある日。昨年を引き続き長野県代表の座を勝ち取った龍門渚高校の部員達が東京駅に姿を見せた。駅を抜けた途端に都会特有の熱気に襲われるが、それも何処か心地よく感じる。

ハギヨシの運転で直接ホテルまで向かってよかったのだが、それでは目立つことができないと透華の鶴の一声により電車を使用しての移動となったのである。

その透華は当てが外れマスコミはいないのかと忙しなく辺りを見渡し、その様子に純

は呆れ、智紀はやはり我関せずとタブレット端末を操作している。これも龍門渚ではお馴染みの光景となっていた。

そして衣は車内が新鮮だったのか落ち着く様子はなく、駅に着くや否や再び大舞台で強者と麻雀を打つことができることに喜びを噛み締めていた。通行人の何とも言えない視線に気づいた一が慌てて止めに入る。

(…東京…か)

さて龍門渚のニューフェイスである鷺巣は珍しく感慨に更けていた。太平洋戦争での敗戦後経営コンサルタント会社共生を立ち上げ、拠点を置き生涯の大半を過ごしただけあって思い入れはある。鷺巣麻雀を行う為の隠れ蓑としていた屋敷があつた武蔵野市周辺も栄えているのだろうか。と柄にもないことを考えていた。

「…そうですわね。取り敢えずホテルに向かいますよ。ハギヨシー！」

「はい透華お嬢様。お車はあちらです」

ようやく諦めた透華がため息交じりにハギヨシが手際よく手配していたタクシーに向かう。この抜け目がない辺り伊達に龍門渚家の執事をこなしていないということであろう。そんなこんなで龍門渚高校のインターハイはいまいち噛み合わないまま幕を開けたのであつた。

「……」が私たちの泊まるホテルですわ！勿論大会期間中はずっと抑えていますわ」

「……ええー……」

「いやおかしいだろ。普通のホテルや旅館でいいじゃんかよ」

「……」

タクシーを走らせること約十分。タクシーは目的地である宿泊ホテルへと到着した。したのだが……そこはどう見ても高校生が部活で泊まるにはそぐわない見上げる程高くそびえ立つ超高級ホテルであった。正面入り口には他と比較しても一際目立つ大きな歓迎看板が掲げられており、かなり恥ずかしい。透華曰く昨年の夏から今年、そして来年まで予約していたとのこと。立地も都内新宿とだけあって一泊幾らするのか想像もできない。しかし透華との付き合いが長い一同は今更そんなこといつてもしかたないと足早にホテルに向かうのであった。

だがその後しばらくして県予選決勝で戦い、四校合同強化合宿を行った清澄、風越女子、鶴賀学園も東京に到着したという連絡が透華に入り、それを聞きつけた衣、そして鷲巢の要望でそちらに向かうことになる。合同合宿にて清澄の原村和を始め、個人戦代表の福路美穂子、宮永咲らと交流を持った衣はインターハイまで充実した日々を過ごすのであった。

『……とすこやんのふくよかすこやかインハイレディオー！』

さあ今週もスーパーアウンサー福与恒子と現在はクラブチームに所属しています小鍛冶プロがお届けします！注目のインハイは明日開会式そして運命の抽選を迎えます！まずは地方大会を勝ち上がってきた精鋭48校が一堂に会す団体戦。頂に立つのはどの高校なのかー！

早速ですが今大会の注目校は何処ですか!？」

『こーこちゃん最初から飛ばしすぎ…それに団体戦は52校だよ』

『えっ!?マジで!?トーナメント48校じゃないの?』

『この説明去年もしたはずなんだけど…出場校が多い北海道、東京、神奈川、大阪と愛知からは2校ずつ出場してるんだよ』

『なるほどー。…で、注目校は!』

『流された!?!…じゃあシード校から…大本命は第一シードの西東京代表白糸台だね。先鋒から大将までほとんど隙が無いよ。歴代のインハイでも今年の白糸台は指折りの強さなんじゃないかな』

『20年前のインハイで優勝したアラフォー小鍛冶プロにそこまで言わせるって相当だね!』

『いや10年前だよ!アラサーだからね!何回目なのこのくだり!…こほん!第二シードの千里山も打倒白糸台に向け猛特訓を重ねてきたというし、新鋭にして異質の永水女

子に留學生部隊に個人3位の辻垣内選手擁する臨海女子とシード校はやはり強豪揃いですね…』

『ではノーシード校じゃどうです？あるいは初出場校とかは？』

『春大会5位だった姫松、九州の古豪新道寺女子、兵庫の劔谷つるぎたになどが有力だけど…私としては長野の龍門渕を押ししたいかな』

『あつ私も知ってますよ！確か去年MVPを獲った天江衣選手が話題になりましたね…つてそりゃ強いに決まってるじゃん。なんでシードじゃないの？』

『龍門渕は春季大会には出てきてないからね。残している実績では姫松や永水女子には若干見劣りします』

『すこや…じゃない、小鍛冶プロは注目している選手はいますか？』

『やはり白糸台の大将赤木選手ですね。去年彗星の如く現れたインパクトは衝撃の一言でした』

『神域、千里眼、すこやん2世と異名も多いですね！ただならぬ風格を感じます！』
『待って！最後の聞いたことないよ！何すこやん2世つて!?!』

『いやーあつちこつちで言ってるんだけどねー。なかなか浸透しなくて…』
『なにやってるのこーこちゃん!』

「あつはつはつは！このラジオ最っ高！すこやん2世つて！あつはつは！」

「おいうるさいぞ淡。さっさと風呂に入つてこい」

「…今いいところなんだからスミレー。」

「それでもだ。あと何回も言うが先輩と呼べ。全くなんでこいつと同室なんだ…」

東京のとあるホテルの2人部屋。そこにはベットに寝つ転がりながら余程ツボに入ったのか大笑いする金髪のロングの少女とそれに心底鬱陶しそうな表情を浮かべる風呂上りであろうか、髪から湯気が立っている黒髪の少女。彼女たちこそ団体戦二連覇中の名門白糸台のレギュラーの一角一年生大星淡と三年生弘世董である。だが最上級生で部長であるはずの弘世董は大星淡に手を焼いていた。というのもこの大星淡という少女は麻雀の腕は確かなのだが少々生意気で可愛げのないところがある。

これでも入学した時よりはマシになったのだが、素直に言うことを聞き懐いているのは自身より実力のある照と赤木のみである。

「…まあいいが。ちなみに大浴場は9時に男湯に切り替わるそうだ」

「…わわわ！それを早く言つてよスミレー！」

えっ…と淡が壁に掛けられた時計を見ると既に8時40分を回っていた。このままラジオを聞いていたいが毎日毎日蒸し暑いこの夏に風呂に入りそびれたくはない。慌てて備え付けのバスタオルと着替えを抱え、バタバタと部屋を飛び出す淡。ダンと強く閉められるドアを見つづ董は深い深いため息をついた。

『…門渕の鷲巢選手も気になる存在ですね』

『ほう。鷲巢選手…あまり聞かない名前ですね？』

『私の知る限りインターミドルには出てきてないはずですよ。機会があつて地区予選決勝戦の牌譜を確認したんですが…とんでもないですよ』

(鷲巢…か)

ふつとかかりっぱなしのラジオに耳を傾けると聞こえてきたのは鷲巢という選手の話題。龍門渕という有力校に加え天江衣を差し置いての大將拔擢ということもあり部屋にて要注意選手として挙げた一人だ。

打ち筋は何より豪腕で貪欲に大物手を狙っていく印象を受けた。では手が遅いのかというとなんかとはなく無駄ヅモもほとんどないまま牌を操っているかの如く最善手へと向かつていく。だが自分のポジションは次鋒であり龍門渕と当たれば打ち合うのは大將である赤木だ。

(あの時赤木が笑っているように見えたのは気のせいだろうか)

資料をレギュラーメンバーに配つた際、輩には赤木の口角が僅かに吊り上がったように見えたのである。滅多なことでは他の選手の牌譜も確認しない赤木が珍しく資料を眺めていた。まあ軽く目を通す程度であつたが。知っている選手なのかと聞いたが上手くはぐらかされ結局詳しいことは聞けなかつた。

(まあここでも考えても仕方ない。明日の組み合わせを見て二回戦から対策を立てよう)

4校中1校しか勝ち上がるのでできない一回戦が免除されているのは大きなアドバンテージだ。二回戦からは上位2位までが勝ち上がれる為、見方を変えれば一回戦が最も厳しいともとれる。幸い時間の猶予はある。輩はまだ垂れ流されていたラジオの電源を落とし、机に後輩の戦略班からもらったデータを広げるのだった。

『南大阪姫松高校…38番!』

翌日。開会式も無事に終わり、その直後に始まった運命の抽選会。一校一校の抽選に一喜一憂する選手たち。強豪校の抽選順ともなれば会場も大いに沸く。別のブロックに入ってくれてほっとする高校もあれば運悪く1回戦で当たることになってしまい思わず頭を抱える高校の姿もある。そして次の高校も要注目的高校だった。

『長野ー龍門渕高校』

その名前が響き渡った途端騒がしかった会場が水を打ったように静まり返り、檀上にかかる龍門渕透華に視線が集まる。当の透華はこの大きな会場の中、自分がいや自分だけが大勢に注目されていることにご満悦のようで顔が緩みにやけていた。

体全体でひしひしと感じる昨年とはまるで違う注目度。昨年は6連覇中の風越女子を破つての出場とはいえ、その風越女子は長野県内では文句なしの強豪校だったが全国

大会では目立った成績を残していない為特に目立つことはなかった。

だがその中でシード校を差し置いて二回戦を1位抜けし、初出場ながらベスト8に入った。準決勝では惜しくも他家が飛ばされ負けてしまったが、続く決勝戦の前座である5位決定戦では圧勝し麻雀ファンの印象に残ったといえる。その後の春大会では中部大会を順調に勝ち進んだものの間も無く衣が体調を崩してしまい、迷うことなく棄権した。今ではその選択は正しかったと断言できる。

今年もここに立てて本当に良かったと透華は感慨にふけりつつ抽選箱に右手を入れた。

「あー…ありやいらんこと考えてるな…」

「だから絶対にくじを引くって譲らなかつたんだね」

「…透華らしい」

「…ククツ」

そんな透華の心中は龍門渕高校の部員達には微妙に誤解はあるものの筒抜けであった。鷲巢にまで呆れられていることを本人が知ったらさぞかし憤慨するだろうがそんなことはつゆ知らず透華は少し抽選箱を漁る素振りを見せ右手に飛び込んできた1枚の紙を引き、高らかに掲げた。

『長野龍門渕高校…333番！』

「……結構きついとこだな」

(…: 反対側か)

その番号に会場内から大きな歓声上がる。透華が掴み取ったのは先程くじを引いた姫松高校と同ブロックになる大会3日目対局室Bの33番。両校とも順当に勝ち上がれば2回戦で早くも顔を合わせることになる。そこに第三シードの永水女子も加わるとあつては2回戦屈指の好カードになること間違いなしだ。

元来の目立ちたがり屋の透華の本能がこの番号、この組み合わせを呼び寄せたのか。満更ありえなくもない仮説に一番割を食う先鋒の純は渋い笑いを隠せない。どうやら楽に勝ち上がらせてはくれないようだ。

そして鷲巢は反射的にトーナメント表の左上を見上げる。白糸台とはブロックが分かれ、当たるとすれば決勝戦ということになる。なるほど結構なことではないか。追いかけて追いかけてようやく見えたアカギとの再戦。それが2位以上でも実質勝ちとなる2回戦や準決勝では緊張感が薄れてしまう。決勝こそ最善の舞台なのである。絶好のところを引いてくれたと高揚感を覚えつつ鷲巢は席を立ち会場を後にした。

その後も抽選が続き、遂に最後の空白が埋まりトーナメント表が完成した。高校麻雀のファンたちは自身の母校や応援している学校が何処まで勝ち上がれるか皮算用を始める。順当にシード校同士の決勝戦となるかそれともダークホースが現れ波乱が起き

てしまうのか。明日から始まる夏の激闘に胸を躍らせるのであった。

試合は3日目ということで龍門渕高校は暫く自由行動ということになった。座禅を組み瞑想をしたり、他校の対局を観戦し過去の牌譜を見ながら分析をしたり、清澄高校の面々が泊まっている旅館に入り浸ったり、無理矢理ハギヨシを従え東京観光をしつつ甘味処を何軒も訪れたりと各々性格にあつた時間を過ごし、迎えた1回戦当日。

龍門渕高校は前評判通り：いやそれ以上の打ち回しで副将の衣にすら回すことなく試合を終わらせ真つ先に2回戦に名乗りを上げた。同時刻に行われていた姫松高校の試合も先鋒戦こそ大量失点して最下位に一時的に沈んだものの中堅にしてエースを張る愛宕洋榎がそれ以上に取り返し無事に2回戦進出を決めた。

そしてもう1校は個人戦6位の銘苅擁する沖繩代表真嘉比まかび高校になるというのが大方の予想だったのだが、事前の雑誌や新聞などでは全くのノーマークであつた初出場校である岩手代表宮守女子が不気味に勝ち進んできた。

別名サバイバルとも呼ばれる1回戦が終わり早くも36校が姿を消し、ベスト16が出揃つた。いよいよシード校が姿を見せる2回戦が幕を開ける。

副露

新宿にそびえ立つ超高級ホテルの一角。そこに龍門渚高校麻雀部一同は宿泊している。

そして軽く朝食を終えたばかりの龍門渚透華の機嫌はなぜか悪い。特に低血圧で朝に弱いというわけではなく、原因は先程からついているテレビにあった。

『本日は全国高等学校麻雀選手権大会の6日目。シード校である臨海女子と永水女子が今大会初お目見え…』ピッ！

『私は特に永水女子の神代選手の活躍に注目しています…』ピッ！

『今年の臨海は隙が無いね。アレキサンドラ監督はよく仕上げてきた…』ピッ！

『永水女子に姫松、龍門渚の三つ巴ですね。実績では永水女子、姫松がやや優勢でしょう。初出場の宮守女子は少し苦戦を強いられるかも…』ブツッ！

『…全くどいつもこいつも見る目がない評論家ばかりですわ！どの局も我が龍門渚についてろくな事を言っていないじゃありませんの！』

「そりゃしょうがないだろ透華。うちが誇るエース2人が揃ってマスコミ嫌いだからな」

「ああ…そうでしたわね…」

この時期のテレビ局はどの局も麻雀のインターハイ一色になり、プロ雀団チームのスカウトも目を光らせている。すなわちそれ程日本中の注目を集めているのである。

そのことを百も承知の透華も期待してテレビをつけたのだが、取り上げられているのはどの局もシード校や古豪校がどう凄いのか、どういふパフォーマンスを見せてくれるのかという話題ばかり。

透華は素早くチャンネルをザッピングして確認するが、この時期にしか見ないような元プロや指導者の評論家が我が物顔で持論を話している姿を見て腹を立てつつ、テレビの電源を乱暴に切った。

その姿を見かねた純はいつもの調子の透華をなだめる。全く対局を前にして欠片も緊張していないのはいいことだが、少しくらい落ち着いてもいいのではないか。

もう何度目になるかも分からないため息をつきながら今更どうにもならない事を考える純であった。

『大会6日目2回戦第3試合。まもなく先鋒戦が始まろうとしております！申し遅れました、私この対局の実況を務めさせて頂きます佐藤です。解説には大宮ハートビーツ所属宇野沢プロにお越しいただいております。本日はよろしくお願ひします』

『よ、よろしくお願ひします』

『すいません。本日は急に解説をお願いして』

『いえいえ：呼んでいただけで光栄です』

(解説大丈夫そうね。少し緊張してるみたいだけど…)

それから数時間後、インターハイ会場は対局開始の時間が近づくとつれて徐々に熱気が高まっていた。何せ全国の厳しい予選大会を勝ち上がった猛者達の真剣勝負である。

既に観客席も満員で会場外のモニターにも人が集まっており、また全国各地でパブリックビューイングも開かれており否が応でも麻雀が国民的競技だという事実を認識させられる。

また今日は放送席側でもひとつの修羅場があった。解説として呼んでいたプロ雀士の都合が悪くなり、急遽当日代打が必要になったのである。

どうしようかと大会スタッフが慌てていると偶然その現場に居合わせた瑞原はやりが推薦してきたのが、白糸台OGでもある宇野沢葉であった。実力もあり、ルーキーブローヤで知名度もあり、たまたまオフであった彼女に白羽の矢が立ったのである。

ちなみにこの日ハートビーツ指定のメイド服を着用しており、恵まれたスタイルを生かしてのグラビア露出が多い彼女の登場にネット掲示板を中心に熱狂的ファンが大いに賑わったのだがそれはまた別の話である。

「んじや行つてくるな」

「純君、頑張つて！」

「純！龍門渕高校先鋒の力を今一度見せつけてくるのですわ！」

「フアイト……」

「純！虚心坦懐！」

「……今日は儂と衣にも回せ」

仲間たちの激励を受け、途中取材にきた記者を適当にあしらいつつ純は対局室へと向かう。

後ろに衣と鷲巢が控えている以上、自分が余程大きな失点をしない限りこの2回戦、2位以上は堅いだろう。自分は原点を維持できれば上出来だということも分かる。しかし2人に頼り切るつもりは毛頭なかった。

(要注意は永水の神代か……流れには乗らせねえ)

自分の持ち味は自分が一番よく知っている。今日もやる事は同じ。たとえ相手が超弩級の怪物であろうと流れを断ち切ることに。傾きかけた天秤を押し戻すことである。

対局室には自分以外の3人が既に揃っており着席している。純もいつも通りのルーティーンである座禅を組み気持ちを整える。

先鋒戦前半戦東一局 親・永水女子 ドラ・(八)

東家 神代小蒔 (永水女子)

南家 井上純 (龍門渕)

西家 小瀬川白望 (宮守女子)

北家 上重漫 (姫松)

小蒔配牌 (二三169⑦⑨⑨東東白発) ツモ (赤⑤) 打 (9)

純配牌 (二四赤五九②⑤⑧②47西北発)

白望配牌 (三五34赤5①④④東南中中中)

漫配牌 (⑧124678北北六七八八)

『さあ始まりました各校のエース級がぶつかり合う先鋒戦！まず各家の配牌はどうでしょう』

『そうですね…神代選手はダブ東が対子、上重選手が配牌がドラドラで三色も見えます。また小瀬川選手は中が暗刻で仕掛けやすい形になっています。対して井上選手は少し苦しいですね』

六巡目

漫手牌 (⑥⑦⑧145678六七八八) ツモ (八)

(よつしドラがきた。張ったで！)

「リーチ！」 打 (一)

『姫松上重選手リーチ！これはいきなりの大物手炸裂なるか!?!』

場に動きがあつたのは六巡目。姫松の上重漫がドラの八萬を引き込みリーチをかける。3面張の高めメンタンピン三色ドラ3の倍満をテンパイ。開始直後での倍満和了はあまりに大きく、もしツモれば永水に親かぶりを食らわせることができる。また安めでも裏ドラ次第で跳満まで伸びる。まさに絶好のチャンスだろう。

(チツ：リーチがかかったか。和了されると厄介だな…)

純手牌 (四五六②⑤⑧24西西) ツモ (9) 副露 (横678)

純はここまでどうにか鳴いてツモをずらそうとしたのだが、手牌がバラバラでうまく鳴けず、今の自分に流れはないと本能的に察知していた。逆に姫松に流れが向いていると純は漫の捨て牌に視線を移す。

漫捨牌

(白北北九2横1)

不要牌を整理していたら張った…と言わんばかりの捨て牌。手出しの連続であつた事からほぼ無駄ツモがなかったのだろう。また早い段階で自風の北を対子落とし、辺張を払つてのリーチである為十中八九タンピン形：打点もそこそこ高いはず。このまま

ツモを回せば一発ツモもありうる。

何とか流れを切りたいが牌勢が悪く、この局は和了れそうにない。しかし他家の手を潰す方法はなにも自分が和了る事だけではない。県予選が終わってからの四校合同合宿で嫌というほど痛感させられた。

(借りるぜ福路さん…あんたのやり方)

純手牌 (四五六②⑤⑧249 西西) 打 (4) 副露 (横678)

小考の後、純はツモってきた9索を手牌に取り込みカンチャンを崩す4索を切り出す。タンピン形のリーチに対して切るにはかなり危険な牌である。

(だるっ…そういうこと…)「…チー…」

白望手牌 (三四五4赤5④④東中中中) 打 (東) 副露 (横423)

この4索を下家の宮守女子の白望が鳴き、両面待ちのテンパイが入る。そして手牌から場風の東が切り出された。鳴かれるのを嫌い、テンパイギリギリまで絞っていた役牌である。

「ポンです」

(うっ…ツモれへん…)

小蔭手牌 (二三67赤⑤⑥⑦⑨⑨白白) 打 (⑨) 副露 (東横東東)

さらに白望が切った東を対面の小蔭が鳴き、ダブル東を確定させ受け入れの広いイー

シャンテンに構える。既に牌に右手を伸ばしかけていた漫だったがツモを飛ばされあえなく手を引つ込めた。純は四枚目の東を引き、手牌に入れることなくツモ切り。続いてツモった白望シロカゼがそのまま手牌を倒した。

「ん…ツモ。500・1000」

白望手牌 (三四五4赤5④④中中中) ツモ (6) 副露 (横423)

東家 永水女子 99000 (11000)

南家 龍門渕 99500 (1500)

西家 宮守女子 103000 (+3000)

北家 姫松 98500 (11500)

(う、うちのリーチがそんな安手で…)

『あつと上重選手ツモることも出来ませんでした！小瀬川選手がリーチを軽くないなして初和了りです！』

『点数以上に価値のある和了りですね。効果的です』

結局この局を制したのは白望シロカゼだった。中ドラ1で500・1000の和了りにリー棒を加えて3000点の収入となる。

よりによってオナテン待ちでリーチを蹴られた形となった漫はガツクリと肩を落とした。

「え〜和了れんかったん〜」

「いきなりの爆発やと思ったんやけどな…」

「ダメテンでもよかったのよ〜」

大物手を逃した姫松高校の控え室。そこでは麻雀部員4人と監督代行がため息をついていた。東一局である為、そこまで焦る必要もないのだがここは和了つてほしかったというのが本音である。

姫松高校の先鋒である上重漫は波に乗れば爆発し大きく稼ぐのだが、逆に乗れなければズルズル失点するという安定感のない両極端な打ち手である。

ただ爆発した時の勢いは全国区のエースと比べても遜色ないものであり、その将来性を期待して大将である末原恭子がレギュラーメンバーに推したという逸話もあるのだが…問題は滅多に爆発せず不発が多いという点であった。

「…龍門渕の井上が思ったより上手いですね。鳴いてツモをずらすくらいやと聞いてたんですけど」

「…う…今のは宮守が上手く鳴いてかわしたんじゃ」

「絹…あれは鳴いたんやない、井上に鳴かされたんや」

前局のターニングポイントは間違はなく純の4索切りだろう。もしリーチの現物に

頼つて2索を切つていれば白望は鳴かずそのまま4枚目の東をツモリ2索の合わせ打ちで4筒、東のシャンポン待ちでテンパイ。白望が最終的にツモつた6索で漫が高め一発ツモだった。正に紙一重で漫の倍満手を封殺したわけだ。

明らかに漫を警戒した打ち回し。漫の手に爆発の兆しがあつただけに悔やまれる。

「いやいやそんなん…鳴いてくれるかも分らんし、その先のツモ牌が分かつてないとそんな芸当できないですよ…」

「つまり水を差されたつちゆうことやなく爆弾だけに！…あれ？おもしろくなかつた？」
 (結果的に漫ちやんの倍満手は流された。今日の爆発は期待薄やな…)

つまらない事をドヤ顔で言っている主将を無視して恭子は頭の中で龍門測の警戒レベルを一段階上げる。去年は大将の衣に繋げる堅実な麻雀を打っていた印象だが一年間で成長しているということだろう。

また未だその全貌を見せない永水女子も宮守女子も手強い。えらい難儀な組み合わせになつたなと恭子はもう一度ため息をつくのだった。

先鋒戦後半戦南四局 親・姫松 ドラ・(六)

南家 永水女子 83800 (115200)

西家 龍門測 114100 (+14600)

北家 宮守女子 122500 (+19500)

東家 姫松 79600 (-118900)

(あ、あかん…3万点差どころやないやん…)

(神代…動きなしか…)

(…)

対局開始から数十分後。対局はそれぞれの思惑が交錯しながら進み、遂に後半戦のオーラスとなった。大物手を逃した漫はその後あからさまに配牌が悪くなり、それに反比例するかのように純と白望シロが親番で軽い手ながら連荘を重ね、2人から大きく引き離されていた。

だが気になるのは永水女子の神代小蒔。ここまで目立った和了りもなくただただ点棒を削られているだけである。昨年大暴れした実績があるだけに音沙汰なしというのは不気味に感じる。嵐の前の静けさというべきだろうか。他家に和了られての親番だが少しでも連荘して盛り返していきたい漫は少し期待しつつ理牌し始めるのであった。

漫配牌 (三赤五②③④赤⑤⑤2678北発) ツモ (4) 打 (北)

(おっ行けるんちゃうかこれ…)

配牌時点で2つの面子があり赤ドラ2枚に他の形も悪くない。鳴いて軽くタンヤオで和了るのもいいし、面前で仕上げれば打点も期待できる。久々の好配牌にここは迷う

ことなく浮いているオタ風の北を切っていった。

純配牌 〔六①①②⑤⑧〕一赤五九九北北〕 ツモ 〔南〕 打 〔⑧〕

〔チートイのリャンシャン…〕

純は対子が固まった配牌。一応七対子のリャンシャンテンだが七対子は役の性質上、有効牌が面子手より少なくなる為手が滞りがちになる弱点もある。

早めに聴牌出来れば儲けものと引いてきた字牌を残し8筒を切り出す。

五巡目

純手牌 〔六①①⑤〕一赤五九九南北北〕 ツモ 〔南〕

〔…南が埋まったか…ひとまずダメだな〕 打 〔⑤〕

意外にもこの局真つ先にテンパイしたのは純だった。しかし七対子の待ち牌にしたかった字牌の南が対子となつてのテンパイである。同じテンパイならドラの六萬か赤5筒をツモリたかつたがそれは欲張りすぎであろう。この局面でリーチをすれば出和了りで12000。ツモつても跳満、さらに裏が乗れば倍満まで伸びる思いがけない手となつた。

しかし単騎を5筒か六萬にしてのリーチでは出和了りは期待できない。またその後の状況変化に対応できなくなるリスクは背負いたくない純はダメテンで六萬待ちとする。

この局面でもあのタコス娘：片岡優希ならオーラス断トツでも勇んでリーチするの
 だろうかと内心苦笑いしつつ5筒を切っていった。

「う、5筒ポン！」

漫手牌

（三赤五②③④456788）

副露

（赤⑤横⑤⑤）

打

（7）

（よっしやテンパった！和了れば取り返せる！）

『井上選手に続き上重選手にも嵌四萬待ち5800のテンパイが入りました！』

『んーと…これは少し焦ったテンパイですね…巡目も浅いので萬子の嵌張払いで好形テンパイを待ってもよかったかもしれません』

『しかし親番ですしテンパイに取っていい場面だと思えますが…』

『いや筒子、索子ともいい形だったのが勿体ない…十分多面待ちへの発展が期待できたと
 思います』

『でも他家も和了りに向かっているので…』

純が切った5筒をすかさず対面の漫が鳴き、タンヤオドラ2のテンパイに取る。しかしこれは些ちよか強引こわで前のめりなテンパイに見える。

漫の副露と序盤に役牌が切られている捨て牌から手役がタンヤオだと看破されやすく、また待ちが四萬と手牌に使われやすい中張牌であることも和了りにくさに拍車をかけている。実況席でも実況佐藤アナと解説である宇野沢栞の意見が真っ二つに割れ、

ヒートアップしかけていた。

「…」打〔発〕

（うつ…）

（…これは…なんだ…）

（…この土壇場でくるか）

小蒔手牌

（一一二二三三七七八八九九九）

『あつくと!? 神代選手途轍もない大物手をテンパイしています! い、いつの間に…』

『六萬から九萬までの4面待ちです。九萬ツモで高めの数え役満ですね』

続く神代小蒔が発を手出しで切ったその瞬間、強烈な威圧感が卓上を支配する。漫や白望^シは正体を掴めずにいるが、純はこの感覚に覚えがある。何度も体感した衣や鷲巣らが^シ大物手を和了る前兆みたいなものだ。つまり張っているのは間違いない。打点も索子を一面子落としている以上染め手で相当高いと読んでいた。

純手牌

（六①①11赤5599南南北北）ツモ（八）

『井上選手ツモってきたのはよりにもよって八萬! これは振り込んでしまうのでしょうか!』

『テンパイに取ればどちらとも放銃ですよ!』

（チツ…初牌の萬子なんざ切れないっつーの!）打〔北〕

『あつと井上選手テンパイを崩して振り込みを回避！』

『…避けましたか。何かからテンパイ気配を感じ取ったんでしうか…』

佐藤アナと栞の予想に反して純は完全安牌である北から落とす。この局面鳴いて場の流れを乱したいが原点を割る可能性が有る以上、振り込みだけは回避しなければならぬ。ない為甘い牌は打てない。

白望手牌 (①②③12789 西西西白発) ツモ (2)

「…ちよいタンマ…」

(んー。ここは残り牌の数では圧倒的に発切りなんだけど…んー。)

ここまで淀みなく打っていた白望の手がここに来て初めて止まった。当の本人は額に手をやり場全体を眺め悩む。配牌から手なりで打っていた白望の手は順調に進みチャンタが狙えるイーシャンテンとなっていた。

迷いなくここは2枚切れの発を切り手を広げる場面。先程小蒔が通している牌でもあるので振り込みもない。だがその小蒔から先程確かに感じた圧迫感。このままツモらせる訳にはいかないような気もする。

純捨牌 (⑧2②一北)

小蒔捨牌 (⑨432中発)

漫捨牌 (北東発⑧7) 副露 (赤⑤横⑤⑤)

白望捨牌 (東④⑥北中)

(2索が全部見えてるけど1索が切れてない…つまり何処かに固まつてる…)

「…決めた。こつちで」打 (1)

(それだ宮守!) 「ポン！」

純手牌 (六八①①赤5599南南北) 副露 (11横1) 打 (北)

(これで少しでも流れが変わってくればいいが…)

白望^{シロ}は悩んだ末に1索を切りそれに純が食いついた。常人ならこのツモずれで足踏みすることになるが、今相手にしているのはそういう型枠から大きく外れた天照大御神である。しかし自分ができるのはあがくことだけ。あがかなければただただ蹂躪されるのみである。

漫手牌 (三赤五②③④45688) ツモ (九) 副露 (赤⑤横⑤⑤)

『上重選手これは苦しい！神代選手にド高めの九萬を握らされました！』

『完全に不要牌ですからね…ツモ切りではないかと…』

(九萬…切つてもええんかこれ…)

純が鳴いてツモ番がずれた後、白望^{シロ}は発を手出し。その後漫は四萬ツモ和了はならず。

この九萬、漫がタンヤオ手で既に鳴いている以上ツモ切るしかないのだが本能がそれ

に待ったをかける。これは純の鳴きで自分に入ってきた牌…本来小蒔がツモっていたはずの牌である。ここままで純の鳴きで有効牌が他家に食い流され、うまくテンパイできず翻弄された手前、安易に扱えないのである。しかしここから九萬を抱えるということでは実質の和了放棄。正に八方塞がりである。

(これ以上の振り込みはあかん。これは抱える…) 打 (8)

(8索手出し…ツモ牌は抑えたか)

ここままで大きく点を削られ委縮気味になっていた漫は対子の8索を切っていく。何とかテンパイまで戻し、流局連荘を狙う腹積もりのようだ。逆に点数が浮いていけば強気に九萬を切り出していただろう。今回はこの臆病気味…よく言えば慎重な打牌が功を奏した。

場に切り出される8索を見て純は僅かに顔を顰める。純にとつては漫に振り込んでもらったほうが都合がよかったのだが、流石に学習しない木偶ではない。

そして8索に鳴きが入らない以上、自動的に小蒔のツモ番となる。小蒔はツモ牌を盲牌するやいなや卓に晒し続けて手牌を倒した。

「ツモ。4000・8000」

小蒔手牌 (一一二二三三三七七八八九九九) ツモ (七)

(ずらしても和了るか…) (…)

(はあ…終わった)

(や、やっぱり九萬も当たり…)

3人ともこの局は神経をすり減らしたようで椅子にもたれかかる。特に数え役満を振り込んでいたかもしれない漫は顔に冷や汗が伝っていた。

『神代選手自力で持つてきた！倍満です！』

『他家に和了牌を抑えられましたが待ちが多かったのが幸いでした』

『そしてこの和了りで先鋒戦終了！永水女子が原点付近まで復帰しました！現在初出場の岩手代表宮守女子がトップに立っています。なお次鋒戦は小休憩の後まもなく始まります！』

先鋒戦終局

南家	永水女子	99800	(-200)
西家	龍門渕	110100	(+10100)
北家	宮守女子	118500	(+18500)
東家	姫松	71600	(-28400)

「お疲れさーん」

「対局お疲れさまでした」

「…お疲れさまです…うう…帰られへん…」

対局終了後足早に立ち去った小蒔と漫の背中を見送りつつ自分もその場を立ち去る。宮守の小瀬川白望が椅子にもたれかかったまま微動だにしていなかったが物思いにでもふけっているのだろうか。

トップは取れなかったが自分の麻雀は貫けた。場の流れも以前より明確に読み切ることができ、特訓の成果があつたというものである。自分に出ることは仲間を信じて見守るのみ。これが団体戦のもどかしさでもあると純は一息ついて控え室に戻つていくのであつた。

昨年までシード校にも選ばれていた強豪姫松高校が大差で4位に沈む波乱の幕開けとなつた。しかし2回戦はまだ始まつたばかり…